【評価区分】Ⅳ：年度計画を達成している（達成率100%）Ⅲ：年度計画を概ね達成している（達成率80%以上）Ⅱ：年度計画を十分には達成できていない（達成率60%程度以上）Ⅰ：年度計画を達成できていない（達成率60%程度未満）

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
4.教育課程・学習成果 **○医療保健学部看護学科** **【計画10-1】㋐** 医療保健学部看護学科の新カリキュラムの運用と評価を実施する。									
「計画達成のための方策」 1.学年別目標の周知と評価の実施。	Ⅳ	1.4月履修ガイダンスでDPと学年目標（旧：学年別目標）を説明した。次に、2～3月に改めて説明し、学年目標達成度の自己評価を実施した。実施率は、全学年目標だった80%を上回った（1年次88.7%、2年次88.1%、3年次83.7%、4年次87.5%）。	**【年度計画10-1】** 1.学年別目標の周知と評価：4月履修ガイダンスで説明、2～3月学年別目標に沿った学生自己評価の実施。	Ⅳ	1.前年度3月に上位学年対象の履修ガイダンスでDPと学年目標を説明し、4月には新入生対象の履修ガイダンスにて説明した。次に、2～3月に改めて説明し、学年目標達成度の自己評価を実施した。3月末日時点での実施率は、全学年目標だった85%をいずれも下回り、昨年度よりも低下していた（1年次75.6%、2年次79.5%、3年次77.9%、4年次75%）。				
2.eポートフォリオの運用。		2.WebClassを用いた学修ポートフォリオの1・2年生実施率は、80%以上だった。運用について教員にも調査を行い、一部仕様を修正した。	2.学修ポートフォリオの運用改善。		2.WebClassを用いた学修ポートフォリオの実施率は、1年次76.4%、2年次77.8%、3年次56.6%と前年度より低下し、特に3年生において実習終了後の記載率が低かったため、リマインドメールを送り、記載期間を再設定した。学生への説明資料および教員用マニュアルの更新と周知を行った。学生の到達目標達成度評価へのフィードバックを教員間で分担し実施した。				
3.新カリキュラムのモニタリング・新規科目の準備・改善・評価の実施。		3.カリキュラム・教育に関する企画は、2回実施した（9/29教学マネジメント企画を兼ねた、3/15カリキュラム企画）。また、カリキュラム評価に関する会議は、4回実施した（/27、9/7、11/14、3/4）。	3.「看護研究」科目担当者会議の開催。		3.「看護研究」科目担当者会議は、看護の統合実習の科目担当者会議と同時に、5回実施した。（8/7, 9/27, 12月メール会議, 2025年1/15, 3/18）				
		4.大学での学び方支援プログラムは4月から5月まで計3回開催した。出席率は第1回88.7%、第2回93.1%、第3回69.6%と、60%以上で推移した。次にヘルスデータサイエンスプログラム（保健看護データコース）の修了者（2023年度）は20名だった。教学マネジメントの理解とカリキュラム・教育体制への導入準備として、7回会議を開催し（4/27、6/6、7/31、11/14、12/22、1/16、2/16）、学科教員に対してはFDを2回実施した（9/29、3/15）。	4.社会からの要請への対応した学士課程教育：大学での学び方支援プログラムの導入、ヘルスデータサイエンスプログラム（保健看護データコース）の普及、教学マネジメントのカリキュラム・教育体制への導入。		4.「大学での学び方援プログラム」：学生委員会と教務委員会との合同開催とし、4/4、4/18、6/17の計3回実施した。出席率は、第1回99.2%、第2回96.9%、第3回84.3%といずれも80%以上を維持した。アンケート結果より、約80%の学生から「とても役に立った」との回答が得られた。 「ヘルスデータサイエンスプログラム（保健看護データコース）」：31名の学生が修了した。 「教学マネジメントプロジェクト」：会議は9回実施し（4/25, 5/20, 8/1, 9/12, 10/3, 11/13. 2025年1/16, 3/5, 3/21）、学科教員に対してはFDを2回実施した（8/7, 2025/3/18）。 また、10月～11月に科目における到達度分析の実態調査を行った。				
「評価指標」 ・学年別目標の自己評価実施学生数：90%以上 ・eポートフォリオの実施学生数：80% ・カリキュラム・教育に関する企画の実施：年2回以上 ・カリキュラム評価に関する会議の開催：年1回以上（令和5年度）			**「評価指標」** ・学年別目標の自己評価実施学生数：全学年85%以上 ・学修ポートフォリオの実施学生数：80%(1～3年生) ・カリキュラム・教育に関する企画の実施:年2回以上 ・カリキュラム評価に関する会議の開催:年1回以上 ・大学での学び方支援プログラムの出席率、アンケート結果 ・ヘルスデータサイエンスプログラム（保健看護データコース）修了学生数 ・教学マネジメント導入に関するプロジェクト会議:年2回以上 ・教学マネジメントに関する企画の実施:年2回以上 ※2学年別目標、学年目標が混在しており、学年目標で統一						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画10-2】㋐ グローバル人材の育成のための取組みを推進する。 **「計画達成のための方策」** 1.看護学科グローバル人材育成に向けた全体構想の検討・実装・評価・改善の実施。	Ⅲ	1.学生の関心を高めるための戦略と成果(推進担当:中山、山崎) ・ガイダンスの充実（各学年年度当初ガイダンス、動画作成、医愛祭での紹介、ウエブクラス活用、国際交流委員会と連携した情報提供等、メンバーにより授業後等を活用した広報活動）など、学生に情報が行き届くようこまやかに広報活動を行った。今年度は、昨年度に対して国際看護論受講生（4名→23名、外国人模擬患者演習参加者（12名→16名）と増加した。	**【年度計10-2】** 1.看護学科グローバル人材育成に向けた全体構想の実装と評価改善。	Ⅳ	1.R5年度に引き続き、学生へのガイダンスの充実に向けて、各学年当初ガイダンス、医愛祭での紹介、ウエブクラス活用、国際交流委員と連携した情報提供、メンバーにより授業後等を活用したメンバーによる広報活動）を行った。今年度の国際看護論受講生は38名、外国人模擬患者演習参加者は11名であった。学生有志による、英語サークルが立ち上がり、本プロジェクトメンバーが顧問（大堀講師）として活動を開始した。				
2.外国人模擬患者を対象としたシミュレーションプログラムの実施。		2.令和6年3月7,8日実施。参加学生数16名（内訳　1年生7名、2年生1名、3年生8名）外国人模擬患者6名（ベトナム、ミャンマー、台湾、シンガポール、モンゴル）、アンケート回収率63%。（推進担当：大堀） プログラム終了時にアンケート依頼を依頼したことにより回収何時は上昇した。今後のプログラム改善に役立てたい。	2.外国人模擬患者を対象としたシミュレーションプログラムの実施。	Ⅲ	2.令和7年3月6,7日実施。参加学生数11名（内訳　1年生1名、2年生5名、3年生2名 4年生1名、卒業生2名）外国人模擬患者4名（シンガポール、中国2名、マレーシア）、アンケート回収率（外国人模擬患者100%、参加学生70%）。（推進担当：大堀） プログラム終了時にアンケート依頼を依頼したことにより回収何時は上昇した。今後のプログラム改善に役立てたい。				
3.レニック先生の英語クリニックの継続実施と評価の実施。		3.レニックニコラス先生の異動により停止中。看護学科連携施設のNTT病院における英語学習会参加機会など、別の方法での英語学習機会について情報収集を行った。連携病院と連携可能な様々な教育機会を発掘し、臨床とのコラボレーションを図ることを検討していく。	3.レニック・ニコラス氏の職場異動に伴い停止中。再開の可能性を検討する。	Ⅳ	3.レニック・ニコラス氏との継続的な英会話教室は、費用等の面から難しい状況である。並行して、連携病院であるNTT東日本関東病院国際診療科より、院内英会話教室に学生参加可能との情報提供をいただいた。4月1名、6月5名、9月2名、10月2名(1月～3月休止、令和7年4月再開予定）の学生の参加実績を上げている。今後は、NTT東日本関東病院との連携を継続したいと考え、外国人患者受け入れ病棟の看護長と今後の活動に関する打ち合わせを実施したところである（1月10日、大堀、本谷、松尾）				
「評価指標」 ・外国人模擬患者を対象としたシミュレーションプログラム10名以上、アンケート回収率90%以上 ・レニック先生の英語クリニックの参加者数10名以上（年）、アンケート回収率90%以上 ・グロプロ会議回数10回/年 ・活動実績広報件数3件以上		【その他の活動実績】 ●グロプロ会議開催　10回（令和5年度） ●看護学科新規プログラムの立ち上げ 　令和6年度からの看護学科独自プログラム「グローバル看護人材育成プログラム―調和のとれた社会に向けて―」英語標記：Globally Competent Nursing Program(GCNP):Embracing Dibersit for a Harmonious Society-」の設置準備（要項の作成、学生向け履修案内の作成、関連科目に周知）。 補足：GCNPは、看護学科独自プログラムとして、関連科目と活動をポイント評価し、学科長による認証を行うもの。 ●グロプロ業績の発信 ・2021年外国人患者模擬演習参加者を対象にインタビューして得た学びのデータを、紀要に投稿・採択決定（筆頭　山崎） ・第43回日本看護科学学会において交流集会の実施（国際看護論設置と、グローバル人材の育成に関する交流セッションの企画運営（筆頭　松尾）	**「評価指標」** ・外国人模擬患者を対象としたシミュレーションプログラム10名以上、アンケート回収率90%以上 ・レニック先生の英語クリニックの参加者数10名以上（年）、アンケート回収率90%以上 ・グロプロ会議回数10回/年 ・活動実績広報件数3件以上 ＊レニック先生の英語クリニックは実施する場合のみ評価を行う。		●グロプロ会議実績　5回　看護学科内で新カリキュラム検討などが開始した。グロプロの活動は定着してきていることから、会議は対面とメール会議の双方を用いて合理的に進めることとした。結果として会議は5回となり、メールやチームズを活用した情報共有、意見交換を行うことで円滑な運営を行うことができた。 ●看護学科独自プログラム「グローバル看護人材育成プログラム―調和のとれた社会に向けて―（GCNP）Ｉ」を始動した。学生用シラバス、認定までの事務手続き、文書作成を教務部と協力して実施した。令和6年度の認証実績は、4年生1名、3年生3名の計4名であった。本プログラムの認証は、今後教務委員会にて所掌するため、引き続き行う。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画10-3】㋐ 学生サポートによるへこたれない心の育成を図る。 **「計画達成のための方策」** 1.新入生ガイダンスにて、学生生活ガイダンス及びアドバイザー活動を実施する。 2.新入生ガイダンス実施後に、Formsを用いたアンケートを実施し、アドバイザー制度・アドバイザー教員の連絡先・学生相談室・障がい学生支援制度の認知度、及びアドバイザー活動の満足度を評価する。	Ⅲ	1.2.看護学科学生委員会では、学生自身の援助希求育成に寄与するために、新入生ガイダンスにて、学生生活ガイダンスおよびアドバイザー活動を実施している。昨年度アンケートでは従来通りの高い満足感が確認されたものの、依然感染に伴う人との交流機会の減少がある中で、上位学年からの効果的な情報提供や交流機会が少ないと想定された。そこで、先輩学生がガイダンスに参加する計画を立案した。具体的には、学生生活経験を新入生に伝えたり、質問に答えるなど、具体的な体験を知る機会設けた、である。令和5年度では、これらを踏まえたガイダンスの満足度を評価し、次年度のガイダンスに向けて成果と改善点を明らかにするため、令和5年度の6月～7月に任意のwebアンケートを実施した（回答率約77%）。 ・新入生ガイダンスでは、新入生が空き時間に先輩に交流を図る場面を見受けることができた。 ・質問項目の構成は「大学全体の各種相談窓口について」「看護学科のアドバイザー制度について」「“キャンパスライフリーフレット”について」「学生生活サポート制度に対する受け止めついて」「4月5日に実施した新入生への“学生生活ガイダンス”について（先輩との交流について）」である。 ・新入生ガイダンス実施後アンケートの結果、全体の理解度は85%で、ガイダンス全体の満足度はとても満足、まあ満足を合わせて95%(n＝86) で、昨年度より高い満足度となった。一方で、大学の支援制度について、「障がい学生支援制度があることが分かった」（69%）や「障がい学生支援制度の窓口が分かった（42%）と学生の理解度が低いものもあった。自由記載では先輩との交流に関する内容が多く、「より多くの先輩方からご意見を聞きたいと感じました」など前向きなコメントが見られた。次いで、大学の授業や勉強について、「テスト勉強の仕方」、「勉強相談ができたらいいと思います」など要望も多くみられた。	**【年度計画10-3】** 1.新入生ガイダンスにて、学生生活ガイダンス及びアドバイザー活動を実施する。 2.新入生ガイダンス実施後に、Formsを用いたアンケートを実施し、アドバイザー制度・アドバイザー教員の連絡先・学生相談室・障がい学生支援制度の認知度、及びアドバイザー活動の満足度を評価する。	Ⅲ	1.2.3.看護学科学生委員会は、教務委員会主催学び方支援プログラムと一部合同開催した。また、昨年のガイダンス後アンケート結果から先輩と交流したいという多くの要望があったことを踏まえ、先輩学生がガイダンス後の学び方支援プログラム/アドバイザー活動に参加し、学生生活経験を新入生に伝えたり、質問に答えるなど、交流の機会を多く設けるよう取り組んだ。 ・ガイダンス実施後アンケートでは令和6年度の5月～6月に任意のwebアンケートを実施した。回答率は約42%で前回の約77%を下回った。 ・アドバイザー制度の認知度は100%、アドバイザー教員の連絡先の認知度88%、学生相談室の認知度99%、ガイダンス及びアドバイザー活動の満足度は「とても満足」27%、「まあ満足」89%と併せて96%であり、「評価指標」の目標達成および目標値に近い数値となった。一方で、障がい学生修学支援制度の認知度は69%と目標値に大きく届かない結果となった。 ・アンケートの回収率が前年度より著しく低下した要因として、開催時期より期間が空いていたことや他のガイダンスのアンケートや授業やその課題など学生が取り組むべきものが多いこと、アンケートの質問項目が27項目と多岐にわたることなどが要因と考えられる。アンケート結果より認知度の高かった項目はガイダンスの内容やその方法の妥当性があったと評価できる一方で、障がい学生修学支援制度についてはその制度を必要とする学生だけでなく多くの学生にも認知してもらえるよう、アプローチの工夫を続けていく必要がある。 ・ガイダンス及びアドバイザー活動全体の満足度は高く、概ね目標指標の達成もできた部分もあり、年度計画はおおむね達成していると評価する。				
3.この評価をもとに、次年度のガイダンスに向けて成果と改善点を明らかにする。 **「評価指標」** ・新入生ガイダンス実施後アンケートの実施状況 ・アドバイザー制度、アドバイザー教員の連絡先の認知度100% ・学生相談室の認知度100% ・障がい学生支援制度の認知度100% ・新入生ガイダンス時のアドバイザー活動の満足度　（満足している人）80%		3.次年度ガイダンスでは、アンケート結果や自由記載より見えてきた課題から、より効果的なガイダンスの方法を検討し、計画することとした。	3.この評価をもとに、次年度のガイダンスに向けて成果と改善点を明らかにする。 **「評価指標」** ・新入生ガイダンス実施後アンケートの実施状況 ・アドバイザー制度、アドバイザー教員の連絡先の認知度100% ・学生相談室の認知度100% ・障がい学生支援制度の認知度　100% ・新入生ガイダンス時のアドバイザー活動の満足度（満足している人）80%						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画10-4】㋐ 臨地実習指導者講習会を実施する。 **「計画達成のための方策」** 1.臨地実習指導者講習会を、看護学科実習委員会の担当メンバーを中心として実施する。	Ⅲ	1.看護学科実習委員会の担当者3名を中心に企画・運営・評価を実施できた。	**【年度計画10-4】** 1.臨地実習指導者講習会を、看護学科実習委員会の担当メンバーを中心として実施する。	Ⅲ	1.R6年度は実習委員会の人員削減に伴い、看護学科実習委員会の担当者のみでは講義を実施することが困難（講義内容の専門性の問題）となり、実習委員2名と委員外の教員3名にご協力いただく形での開催となった。企画・運営・研修後評価は実習委員3名で担うことはできた。				
2.研修会プログラムは令和元年度の内容を踏襲し、9月に2日間の基本知識の講義・演習を実施することとし、講師は学内教員から募集する。		2.9月に2日間の基本知識の講義・演習については、学内教員5名の協力を得て実施できた。特に前年度からニーズの高かった参加者同士のディスカッションの時間を多くとった。	2.研修会プログラムは令和元年度の内容を踏襲し、9月に2日間の基本知識の講義・演習を実施することとし、講師は学内教員から募集する。		2.これまでの研修プログラムを踏襲し、9月に2日間にわたりオンライン（Zoom）にて教育課程の理解や教育方法等に関する講義を実施した。講師は実習委員2名の他、学内教員3名の協力を得て実施することができた。 ただし、本学の人員削減・教員の負担増と本研修の近年の参加人数の推移を勘案すると、R7年度の継続開催は検討を要する。				
3.対象者の看護師に10月～12月の実習指導のリフレクションシート記載を課し、1月に各参加者の実習指導体験のリフレクション演習を行う。		3.10月から12月に本学の実習を担当していただき、実践を踏まえて実習指導者として各自2事例を提出し、1月にグループリフレクションを実施することができた。	3.対象者の看護師に10月～12月の実習指導のリフレクションシート記載を課し、1月に各参加者の実習指導体験のリフレクション演習を行う。		3.研修参加者には10月～12月にかけて実習指導を担っていただいた。その実践を踏まえ、実習指導に関するプロセスレコードを2事例提出してもらい、1月にグループワークを通じてリフレクションを実施することができた。研修後アンケートにおいても「理解が深まった」「有意義であった」といった回答が8割以上と多かった。 R6年度も研修へ参加しやすいようオンライン形式としたことで、急性期病院から老健施設と幅広い実習施設からご参加いただけた。一方、勤務の合間に参加している状況があり、入室が遅れる等の参加者も散見された。しかし、各グループにファシリテーター（教員）を配置することで学習支援を細やかに実施できたと考える。ただ、1月上旬開催であったため、まだ授業期間であることから学内教員の協力・参加人数には限界があった。				
4.令和3年度から5年間実施し、評価、その後の継続について委員会内で検討する。		4.リモート研修としたことで、訪問看護ステーションや老健・特養施設の指導者は参加しやすい環境があった。一方で勤務をしながら研修参加をしている状況もあり、ワーク時の入室遅れの参加者も多数いた。しかし、各グループにファシリテーター（教員）を配置することで、入室遅れの参加者へのサポートを行うことができた。授業期間中のため、学内教員の参加人数には限界があった。	4.令和3年度から5年間実施し、評価、その後の継続について委員会内で検討する。		4.R3年度から5年間（つまりR7年度）実施する計画である。なお、本研修は開催当初より参加費無料（つまり本学・教員の全面負担、ボランティア）で行われている。 しかし、R6年度末時点の本学・学科の経営状況（予算／人員削減等）や認証評価との兼ね合いから、R7年度の研修継続は本学科としての開催意義は低くかつ困難ではないかと考える。また、本研修の当初目的（開催を開始した理由）として、主にはNTT東日本関東病院における「短期間での実習指導者育成」があったが、現状として当該施設側にそのニーズがないとのことである。（理由：近年は看護協会等主催の講習会を利用している。当初は指導者が少なく、ある程度の人数を講習会に出す必要性があったが、勤務上長期間出すことができず、本学科との連携ということで講習会を開始した。しかし、今は実習指導者も増え、毎年研修を要するのが数人のみとなったため、協会等の講習会を利用できる体制になった）。また、他施設からのニーズも同様に低く、参加人数目標30名を近年達成できていない。以上の背景より、R7年度の開催は中止する方向で検討する。 今後、実習施設や社会のニーズが再度高まり、また本学の経営が上向き、人員配置上の不安も解消された際は、研修に関する補助金を外部より獲得した上で再開することも検討していくことが、本学科の現状としては賢明ではないかと考える。 具体的な評価指標達成状況は以下の通りである。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
「評価指標」 ・実習病院・施設の参加者　看護師30名、教員15名		**「評価指標達成状況」** ①研修後アンケート評価 講義内容について、理解できた、役立ったという回答が主であり、他の人にも勧めたいということで満足度は高かった。 ②実習病院・施設の参加者人数 ・参加者20名（病院：6施設 16名、特養・老健・訪看：3施設 4名） ・学内教員9名　計29名	**「評価指標」** ・研修後アンケート評価 ・実習病院・施設の参加者人数		①研修後アンケート評価 R6年度は9月開催終了時の中間アンケートと、1月開催終了後の最終アンケートの2回に渡りデータを収集した。 結果ではいずれも「理解できた」「有意義だった」といった回答が8割程度で満足度は高かった。 特に、他施設・他参加者と実習指導の現状・課題について共有し思考できる時間（場）を提供できた点が高く評価された。しかしこの点は本講習会内でなくとも、実習協議会にて補完できると考える。 （アンケート結果：実施報告書は以下参照） ・教授会資料「2024年度実習指導力育成講習会報告20250207」 https://thcuacjp-my.sharepoint.com/:b:/g/personal/y-kasahara_thcu_ac_jp/ESHGS5JnKlxJk781IgG-NREBRtkaddUEInv-sOX9hRb2ug?e=XhHo7n ②実習病院・施設の参加者人数（目標30名：達成率最終70%） ・第1回：2024年9月25日（水）計23名*（*1名は9/26・1/10欠席） ・第2回：2024年9月26日（木）計22名 ・第3回：2025年1月10日（金）13時～15時30分 計22名参加・修了 学外参加者19名　《施設種別》病院：7施設 17名、 特養・地域包括：2施設 2名 学内教員3名（助手・助教・非常勤）（＋グループワーク参加：教員5名・運営3名）				
【計画10-5】㋐ 医療保健学部看護学科卒業生を対象としたホームカミングデイを実施する。 **「計画達成のための方策」** 1.医療保健学部看護学科卒業生を対象としたホームカミングデイを実施することとし、卒業生によるパネルディスカッション及び運営を教員（看護学科就職対策委員会）と協働して行う。 2.パネルディスカッションのテーマは目的に合わせて年度毎に検討する。 **「評価指標」** ・ホームカミングデイの参加状況卒業生30名、教員20名、在校生10名	Ⅲ	1.令和6年1月12日に、対面とリアルタイム配信のハイブリッド形式で開催した。就職対策委員を加えた参加者は、69名。卒業生26名、在学生8名、教職員33名、元教職員2名であった。 2.今年度は、新人看護師の離職率が10%を超えたことを受け「看護実践家としての壁を乗り越えよう！」をテーマに、第一部　を卒業生スピーカーによるトークセッション　、第二部を参加者の交流会として実施した。スピーカーは、①小児専門病院で働く3年目看護師、②３次救急病院の集中治療センターで働く7年目の看護師、③病院勤務、海外青年協力隊等を経て23区区役所で勤務する保健師の3名とした。スピーカーの発表後には、卒業生を中心に活発な意見交換も行われた。終了後のアンケートは、回答数：50名（回収率80.6%）。　全体の満足度では、満足とまあ満足が98.0%であった。交流会では、予定時間を超過して教員や同級生と会話をする卒業生の姿がみられ、HCDを開催する意義は達成されたと考える。また、在校生らも積極的にスピーカーに質問したりオンラインで交流したりすることができた。今回の３人のスピーカーの選定は妥当であったと評価している。次年度は、医愛祭が五反田キャンパス開催になることを受けその期間中に開催することを検討している。さらに参加者増を目指し、今年度卒業生全員にHCD実施案内の送信を実施。今後も会の活性化を目指して、企画検討を重ねていきたい。	**【年度計画10-5】** 1.医療保健学部看護学科卒業生を対象としたホームカミングデイを実施することとし、卒業生によるパネルディスカッション及び運営を教員（看護学科就職対策委員会）と協働して行う。 2.パネルディスカッションのテーマは目的に合わせて年度毎に検討する。 **「評価指標」** ・ホームカミングデイの参加状況卒業生30名、教員20名、在校生10名	Ⅳ	1.令和6年12月23日に、対面とリアルタイム配信のハイブリッド形式で開催。当初、医愛祭との同日開催を計画していたが、開催場所の確保ができず日程変更をした。日程変更・年末開催に加え感染症の流行など悪条件ではあったが、参加者は54名（卒業生18名、在学生7名、元教職員を含む教職員29名）で年度計画を達成した。 2.卒業生が「家に帰る」気持ちで母校を来訪し、懐かしい学友や教職員と親睦を深め相互の発展を目指すことを目的に実施。昨年度アンケート結果から、『さまざまなキャリアケースの紹介』への要望が最も多く、卒業生の活躍や困難からの立ち直り方について知りたいという意見があった。それらを踏まえ、テーマを『会いたかったわたしへ- 多様な働き方・生き方を考える -』として企画。ゲストスピーカーは3名。①本学学部卒業後助産学専攻科に進学、総合病院産科で10年以上勤務。その間の紆余曲折について紹介。②卒業後急性期の病院で数年間勤務後、外資系の会社で治験のマネージメントを担当。③実習病院に就職し看護師として数年間勤務。そのキャリアについて紹介。トークセッション後は、卒業生、在校生、教員間での交流会を行い様々な情報交換が行われた。実施後のアンケートでは、【満足】【まあ満足】が91.0%で、参加者の納得できる内容であり年度計画を達成したと考える。 また、今年度より就職支援コーナーを設置し、参加者持参の施設パンフレットなどを掲示した。興味をもって閲覧する参加者もおり、HCDが卒業生のキャリア支援の一助となりうることが推察された。さらに、参加した卒業生より、卒業後に英語学習の必要性を強く感じたという発言があり、教員を介してグロプロにつなげ、卒業生の生涯学習の提供の機会ともなった。今後はさらに、大学で提供している生涯学習の機会に関する情報提供についても検討していきたい。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画10-6】（令和6年度より新規） 看護学教育モデルコアカリキュラム（令和6年度改訂版）等に基づき、教学マネジメントの確立や看護学教育評価基準に照らした自己点検・評価・改善等により内部質保証体制の確立と運用に取り組むことが可能な「2027年度入学生適応のコンピテンシー基盤型カリキュラムを検討・作成」する。 **「計画達成のための方策」** 1.大学設置基準、設置認可審査、認証評価（機関別・分野別）及び評価結果の公表などの大学教育の質保証システムの中で、大学が自ら率先して、教学マネジメントの確立や看護学教育評価基準に照らした自己点検・評価・改善等により内部質保証体制の確立と運用に取り組むことが可能な「2027年度入学生適応のコンピテンシー基盤型カリキュラムを検討・作成」する。			**【年度計画10-6】** 1.大学設置基準、設置認可審査、認証評価（機関別・分野別）及び評価結果の公表などの大学教育の質保証システムの中で、大学が自ら率先して、教学マネジメントの確立や看護学教育評価基準に照らした自己点検・評価・改善等により内部質保証体制の確立と運用に取り組むことが可能な「2027年度入学生適応のコンピテンシー基盤型カリキュラムを検討」する。	Ⅳ	1.2.2024年4月に新カリキュラム検討プロジェクトを設置し、プロジェクト方針として、【計画10-6】の素案を立案した。 ・【計画10-6】の素案の立案に関しては、毎月のプロジェクト開催に加え、活動班3つに分け（フロー班、モデルコアカリキュラム班、独自班）、それぞれが情報収集を行った。情報収集した内容は、毎月の医療保健学部看護学科の学科会議にて報告を行った（2024.5.6.7.9月）。 ・上記経過を経て、プロジェクトを発展させ、2024年9月に新カリキュラム検討委員会を設置した。 設置に当たり、委員会規定、活動方針、活動班と所掌事項、【計画10-6】のブラッシュアップを行い、委員会内で決定した後、年間計画を立案した。新カリキュラム検討委員会は医療保健学看護学科の専任教員全員に対して公開とし、誰もが情報共有、議論参加できるようにグランドルールを作成した。 ・委員会で作成した資料や委員会での議論は、すべてTeams上で医療保健学部看護学科の教員全員にリアルタイムに公開とし、委員会そのものもTeams上で実施、公開とした。 合意形成が必要な議論は、毎月の学科会議とFD研修会（2024.9月と2025.3月）で意見交換の機会を持つとともに、Formsによる意見聴取を行って、合意形成を得た。教員全員がタイムリーに参加できるよう、進捗状況や活動実績一覧はリアルタイムで共有した。 ・具体的な活動は以下の通りである。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
2. 作成時には、3Pに基づく教育の実質化と学修成果（ディプロマサプリメントなど）達成の取り組みを明示できるように、大学ビジョン、学位プログラム共通の考え方である看護学教育モデルコアカリキュラム（令和6年度改訂版）、医療保健学部看護学科ビジョンと活動方針に基づき、学科の独自性と強みを発揮できる３つのポリシー、カリキュラムマップとツリー、学修目標・学修評価・評価時期・評価基準・到達度・具体的実施方法などを定めた各科目のシラバス、3Pに基づくアセスメントプラン、アセスメントテスト、共通ルーブリック、履修規定も検討・作成する。 ●上記を達成するために、5つの活動班に分かれて、具体的に活動・作成する。 活動班①全体のタスクとフローのマネジメント 活動班②DP・CP・AP・履修規定作成 活動班③学修成果・評価（共通ルーブリック含む）の作成 活動班④教学マネジメント・自己評価・認証評価の遵守 活動班⑤内部質保証会議・文部科学省申請書類の作成 **「評価指標」** 2024年度3月末（2025.3）までに1.2を検討するためのプロジェクト・委員会の設置、検討事項の教授会・学科会議で合意形成できる（100%） 2025年度3月末（2026.3）までに1.2を作成し、学部長等会議、内部質保証会議で合意形成ができる（100%） 2026年度5月に文科省申請し、承認が下りる（100%）．新規カリキュラムをHPで公表する（100%） 2027年度4月より新カリキュラム開始し、3月末に初年度評価を実施する。			2. 大学ビジョン、学位プログラム共通の考え方である看護学教育モデルコアカリキュラム（令和6年度改訂版）、医療保健学部看護学科ビジョンと活動方針に基づき、学科の独自性と強みを発揮できる３つのポリシー、共通ルーブリックを検討する。 ●上記を達成するために、5つの活動班に分かれて、具体的に活動・作成する。 活動班に分かれて、具体的に活動・検討する。 活動班①全体のタスクとフローのマネジメント 活動班②DP・CP・AP・履修規定作成 活動班③学修成果・評価（共通ルーブリック含む）の作成 活動班④教学マネジメント・自己評価・認証評価の遵守 活動班⑤内部質保証会議・文部科学省申請書類の作成 **「評価指標」** 2024年度3月末（2025.3）までに1.2を検討するためのプロジェクト・委員会の設置、検討事項の教授会・学科会議で合意形成できる（100%） 2025年度3月末（2026.3）までに1.2を作成し、学部長等会議、内部質保証会議で合意形成ができる（100%） 2026年度5月に文科省申請し、承認が下りる（100%）．新規カリキュラムをHPで公表する（100%） 2027年度4月より新カリキュラム開始し、3月末に初年度評価を実施する。		【活動班①新カリキュラム作成のタスクとフロー】では、2026年7月に文科省に新カリキュラムを申請するためのタスクとフローを視覚化、2）上記のタスクとフローに従ったタイムマネジメント、3）現行科目とコンピテンシー対応調査を実施した。学科会議で合意形成を得られた。 【活動班②DP・CP・AP・履修規定】では、1）DP案の作成、2）学科の独自性の検討案、3）臨地実習科目・統合実習の履修年次と単位案を作成し、2025.3月FD研修会で説明、意見交換を行った。□ 【活動班③学修成果・評価（共通ルーブリック含む）】では、1）活動班②のDP案に対して共通ルーブリックの評価項目の案の作成、2）評価基準の検討、3）共通ルーブリックに含まれるべき内容やその意義の資料を作成し、最終的に2025.3月FD研修会で合意形成を図った。 【活動班④教学マネジメント・自己評価・認証評価（教育の質保証）】では、1）文部科学省の大学設置基準、設置認可審査、認証評価（機関別・分野別）及び評価結果の公表などの大学教育の質保証に関して、資料収集・学科教員への説明、2）本学の教学マネジメント・チェックリスト 、アセスメントプラン・テスト、東京医療保健大学第4期中期目標・計画（令和9-13年度）、自己評価点検、私立大学等改革総合支援事業 、データを活用した教育改善、新カリキュラムの情報公表、HPへの掲載などの説明、3）文部科学省「看護学教育モデル・コア・カリキュラム（令和6年度改訂版）の説明を行った。□ 【活動班⑤内部質保証会議・文部科学省申請書類】では、1）学部長等会議、内部質保証会議、文部科学省への提出書類と時期に関する確認、2）五反田事務部との確認をし、そのスケジュールを教授会・学科会議で説明を実施し、合意形成得られた。 以上、活動班①②③④⑤により、【計画10-6】の令和6年度の達成状況は100%であった。□				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
○医療保健学部医療栄養学科 **【計画11-1】**㋐ 専門性の高い心温かい医療人の育成の観点から、ボランティア活動を推進する。 **「計画達成のための方策」** 1.主に「せたがやハウス」を利用し、国立成育医療研究センター病院にて付き添い入院している家族へ焼き菓子等の提供や食育媒体の提供を行う。 **「評価指標」** ・主に「せたがやハウス」を利用し、国立成育医療研究センター病院にて付き添い入院している家族へ焼き菓子等の提供を実施：3回/年 ※COVID-19感染拡大状況により、「せたがやハウス」での食事支援活動が可能になれば、食事提供を実施：1～2回/年 ・主に「せたがやハウス」を利用し、国立成育医療研究センター病院にて付き添い入院している家族へ食育媒体の提供：3回/年 ・ボランティア学生：4名程度×3回＝12名		— —	**【年度計画11-1】** — **「評価指標」** —		— —				
【計画11-2】㋐ 幅広い分野で活動している管理栄養士として、必要な知識及びスキルを日々更新していくことが重要であることから、「卒後教育」として知識・スキルアップのための研修会を開催する。 **「計画達成のための方策」** 本学教員及び卒業生が講師となり、各分野での事例・症例紹介や情報共有など、講義、演習、ワークショップを含む様々な学習形態で開催する。 **「評価指標」** 研修会の実施回数：年3回以上かつ年間の参加者数を卒業生・一般で100名以上	Ⅳ	・令和5年度は3回開催し、延べ95名が参加した。 第1回「ケア環境研究所の夏野菜を活用した料理教室」令和5年8月19日　参加者32名 第2回「臨床現場の研究報告会」令和5年9月30日　参加者22名 第3回「旭松食品共催こうや豆腐を活用した料理教室」令和5年3月9日　参加者41名 ・今年度は昨年度のWEBアンケート結果をもとに企画した。臨床現場での研究報告会では、研究に興味があるが実施できていない卒業生を中心に参加があり、実施後アンケートでは、満足度100%、次回の参加希望100%であった。 ・今年度は卒業生だけでなくその家族や職場の同僚等も参加可能としたが、今後も引き続き卒業生以外の参加も受け付ける。 ・今後希望する内容として、「食育分野の報告会」「異業種交流会（病院、会社、学校等）」などが多かったため計画に組み込んでいく。 ・今年度は1名の学科内教員、3名の卒業生・修了生、1名の管理栄養士に講師依頼したが、次年度は学科内教員への依頼を増やしていく。	**【年度計画11-2】** 医療を含めた複数の分野に関する研修会を、講義、演習、ワークショップなど様々な学習形態で実施し、卒業生に向けて参加を募集する。また、企業の協力と卒業生に講師の依頼をする。 **「評価指標」** 研修会の実施回数：年3回以上かつ年間の参加者数を卒業生・一般で100名以上	Ⅲ	・令和6年度は3回開催し、延べ57名が参加した。 第1回「料亭の技を学ぶ料理教室」令和6年5月13日　参加者14名 第2回「管理栄養士がフリーランスとして働くためには」令和6年9月23日　参加者15名 第3回「こうや豆腐を活用した料理教室」令和6年3月8日　参加者28名 ・卒業生よりフリーランスに関する質問が複数あり、テーマとして企画した。フリーランスに興味がある者や他の分野で働く管理栄養士との情報交換を目的とした者の参加があった。実施後のアンケートでは、満足度100%、次回の参加希望100%で、刺激を受けた等の感想を多く得た。 ・今年度は卒業生や家族だけでなく、世田谷区の住民や管理栄養士の参加もあった。 ・現在予定されている学科再編に注力するため、次年度から本テーマの優先順位を下げることにした。この理由により、本テーマを令和6年度限りで終了とする。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画11-3】㋐ 卒業時に管理栄養士国家試験合格が叶わなかった卒業生に対し卒業後に管理栄養士免許を取得できるように支援する。									
「計画達成のための方策」 1. 卒業生向け管理栄養士国家試験対策講座を在校生の特別講義と同時開催する。 2. 卒業後にガイドラインの改訂などがあった場合は、卒業生対象に講座を開講する。この場合、日常業務と並行しての講座は日程調整で困難があるため、講座は動画配信で開講する。		—	**【年度計画11-3】** —		—				
「評価指標」 ・参加者の合格率50%以上		—	**「評価指標」** —		—				
【計画11-4】㋐ 既卒であっても本学で栄養教諭一種免許を取得可能とし、学校栄養職員から栄養教諭への任用替えを目指す卒業生への支援策を検討する。									
「計画達成のための方策」 本学科栄養教諭委員が担当し、科目等履修にて栄養教諭一種に必要な科目（栄養教育実習を含む）を修得できる時間割・組織を構築することが将来的に可能か調査を行う。 1. 他大学の取組状況から本学で教職科目履修可能な状況を見出し、今後の生涯学習支援がどこまで実施可能か調査研究する。 2. 時間割作成について、重点として取り組む。 3. 本校勤務者並びに非常勤講師招聘が可能か調査研究する。		—	**【年度計画11-4】** —		—				
「評価指標」 ・調査研究の実施状況等		—	**「評価指標」** —		—				
【計画11-5】㋐ 古代食の再現研究について、独立行政法人文化財機構奈良文化財研究所・国立歴史民俗博物館との共同研究を引き続き実施し、研究成果を学術雑誌やシンポジウムの開催を通じ、成果発表を行う。									

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
「計画達成のための方策」 独立行政法人文化財機構奈良文化財研究所・国立歴史民俗博物館との共同研究（令和5年度）と科学研究費助成金基盤研究A「東ユーラシア東辺における古代食の多角的視点による解明とその栄養価からみた疾病」（令和6年度まで）の研究を通して、古代食研究の成果を今後学術雑誌やシンポジウムなどで報告する。	Ⅳ	・奈良文化財研究所と本学で再現実験を行い、試料についても調理学・食品衛生学・栄養学などの分析を行い、成果を出した。またその成果についてシンポジウムを行い、『カツオの古代学』として公刊する予定である。 ①今年度の研究計画であった発酵食品の再現実験であるが、奈良県御所市の油長酒造の協力の下、古代米と復元須恵器を用いた古代酒の再現実験を行い、『長屋王の酒を醸す』（庄田慎矢編吉川弘文館2024年刊行予定）に「古代史料に見える甕酒づくり」として発表する予定。 ②静岡県西伊豆町において地元の企業と協力して、古代の堅魚製品の再現実験を行った。この成果は『カツオの古代学』（三舟隆之・馬場基編吉川弘文館2024年刊行予定）で発表する。	**【年度計画11-5】** 1.科研費基盤Ａの国内調査の実施（科研費最終年度）。古代の堅魚製品に関する調査を行う。 2.最終年度に当たるため、成果報告のシンポジウムを静岡県で市民を取り組んで行う計画。	Ⅳ	・前年度の研究成果は『カツオの古代学一和食文化の源流を探る』（吉川弘文館刊行）で公開した。香川大学の協力により古代米を使った炊飯実験及び古代酒の再現実験を、令和7年3月5日・6日に行った。また3月8・9日には、沼津市・富士市および静岡県考古学会と共催で科研費研究の成果報告シンポジウムを行った。その報告の準備のため、7～2月まで関東各地の教育委員会で土器の観察を行った。 令和6年度で、研究責任者が退官するため、本テーマを令和6年度限りで終了とする。				
「評価指標」 ・共同研究等の取組状況と成果報告			**「評価指標」** ・共同研究等の取組状況と成果報告						
【計画11-6】（令和5年度より新規） 学生の主体的な学びを推進するため、学修者の支援体制を構築するとともに教員の教育力を高度化して教育の質の向上を行う。									
「計画達成のための方策」 ・学修ポートフォリオを用いることで、卒業時に目指すべき能力等をどこまで習熟したか、学生自身に振り返りと自己評価を促す。 ・管理栄養士国家試験合格に向け、自身の能力を客観的に分析し計画的に学修できるよう、ガイダンス・学修環境整備・学修指導を行う。 ・教員にアクティブ・ラーニング等の能動的授業の実施を促す。 ・教育内容の充実や教授方法の高度化のため、教員にFD研修会への参加を促す。	Ⅲ	・新年度ガイダンスで学生に学修ポートフォリオについて説明を行った。また、教員へは教授会で、学生に学修ポートフォリオの作成と提出を促し、学修ポートフォリオをもとに指導することを依頼した。学生にはWebClassで提示されるディプロマサプリメントからfGPA値を読み取り学修ポートフォリオに記入させたのち、自己分析と次期セメスターの目標を記載させ、WebClassで提出させた。アドバイザは提出された学修ポートフォリオを学生指導で利用した。学修ポートフォリオにより学修の振り返りと自己評価を行った学生の割合は、89.1%であった。（1年生：90.3%、2年生：83.5%、3年生：94.7%） ・自主的及び計画的に国家試験対策ができるよう、国家試験対策委員や外部講師によるガイダンスを実施した。試験問題への挑戦、教員による授業、外部講師を招いての対策講座を、1回2時間を目途に、45回実施した。模擬試験は5回実施した。また、WebClassで国家試験の過去問を、オンラインで受講できる駿台グループの管理栄養士教育支援システムを提供した。また、事務部と協力して学生が自習できる教室やスペースを確保した。第38回管理栄養士国家試験の合格率は、本学：64.6%、全国：80.4%（前年 本学：60.6%、全国：87.2%）であった。 ・外部講師を招き、「医療系カリキュラムにおける知識教授を目的としたアクティブ・ラーニング」のFD研修会を実施した。アクティブ・ラーニングを取り入れている講義・演習の割合は、60.4%であった。 ・教授会及び電子メールで、学科内教員及び全学教員へFD研修会への参加を呼び掛けた。FD研修会に参加した教員の割合は、75.0%であった。授業評価アンケートでは、学科平均値が前年比で8.7%減少した。ICTの利活用やアクティブラーニングの取り入れなど、学修の充実に関する情報提供を継続し、授業評価アンケート結果の改善を図る。	**【年度計画11-6】** ・各セメスターの終了時に、学修ポートフォリオを用いた振り返りと自己評価を学生に指導する。 ・能動的・計画的に国家試験対策を実行できるよう、自習室の確保、ガイダンスや模擬試験の実施、ICT利活用による個別最適化された教材や対策講座の提供などを行う。 ・教員にアクティブ・ラーニング等の能動的授業の実施を促す。 ・教育内容や教授方法の高度化のため、教員にFD研修会への参加を促す。	Ⅲ	・学生への学修ポートフォリオの説明は新年度ガイダンスで行った。教員へは教授会で、学生へ学修ポートフォリオの作成と提出の働きかけ、学修ポートフォリオをもとにした指導と就職活動への利用提案を依頼した。学生にはディプロマサプリメント（WebClass）のfGPA値の学修ポートフォリオへの記入および自己分析と次期セメスターの目標の記載後、提出させた。提出された学修ポートフォリオでアドバイザは学生指導した。学修ポートフォリオにより学修の振り返りと自己評価を行った学生の割合は、81.1%であった。（1年生：87.6%、2年生：92.8%、3年生：95.1%、4年生：60.9%） ・4年生前期の対策を強化し、勉強法のセミナー、過去問テストと教員による解説（週3コマ12週）、模試低得点者に対する追加対策（週3コマ9週）を実施した。後期は模擬問題テストと外部講師による対策講座（週2コマ15週）、追加対策（週2コマ11週）を実施した。また、4年生業者模試を年間7回に増やし、模試低得点者には面談で勉強法を助言し、オンラインで学習できる駿台グループの教育支援システムを提供した。第39回管理栄養士国家試験の合格率は、本学：60.9%、全国：80.1%（前年 本学：64.6%、全国：80.4%）であった。 ・前年に引き続き、「医療系カリキュラムにおける知識教授を目的としたアクティブ・ラーニング」のFD研修会を実施した。令和6年度のアクティブ・ラーニングを取り入れた講義の割合は、67.0%（前年51.8%）であった。 ・令和6年度FD活動として2回の研修会（アクティブ・ラーニング、ルーブリック）と後期にピアレビュー（教員による他教員の授業参観）を実施した。FD活動に参加した教員の割合は、96.0%（24名/25名）であった。授業評価アンケートでは、学科平均値が前年比で0.8%減少した。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
「評価指標」 ・学修ポートフォリオにより学修の振り返りと自己評価を行った学生の割合　95%（令和8年度） ・管理栄養士国家試験合格率　全国平均以上 ・アクティブ・ラーニングを取り入れている講義・演習の割合　55%（令和8年度） ・FD研修会に参加した教員の割合　96%（令和8年度）、授業評価アンケート学科平均値が前年比で2%増			**「評価指標」** ・学修ポートフォリオにより学修の振り返りと自己評価を行った学生の割合　85% ・管理栄養士国家試験合格率　全国平均以上 ・アクティブ・ラーニングを取り入れている講義・演習の割合　48% ・FD研修会に参加した教員の割合　92%、授業評価アンケート　学科平均値が前年比で2%増						
【計画11-7】 専門性を高めるための基盤となる基礎学力を向上させるため、リメディアル教育を充実させ、その教育を継続する。 **「計画達成のための方策」** ・新入生の学力把握とその結果に基づくリメディアル教育の実施 ・リメディアル教育の継続的な改善 **「評価指標」** ・リメディアル関連科目受講推奨者の履修率100% ・令和5年度リメディアル国語開設 ・リメディアル教育の改善実施	Ⅲ	・入学時の化学・数学・英語テストの平均点は前年度新入生とほぼ同等であり、入学区分別では、例年通り総合選抜・推薦の方が一般・共通テストよりも低い傾向。一方、今年度開始の国語のテストに入学区分別の差はなかったが、大学生としては不十分な得点。 ・テストの低得点者に対し、オリエンテーション時、授業後の対面、メールを利用し、リメディアル関連科目の受講を推奨。結果として、低得点者の受講率は、基礎数学84%、化学Ⅰ100%、リメディアル国語32%。リメディアル国語は今年度から開始した科目であるが、単位認定のない科目であることが低受講率の原因と推測。 ・リメディアル国語受講者のアンケートによる満足度は高く、科目として必要と考えられたため、次年度から選択科目として「実用国語」を開設することに決め、開設の準備を実施。	**【年度計画11-7】** ・新入生の学力把握とその結果に基づくリメディアル教育の実施 ・リメディアル教育の継続的な改善 **「評価指標」** ・リメディアル関連科目受講推奨者の履修率100% ・リメディアル教育の改善実施	Ⅲ	・医療栄養学専攻の入学時の化学・数学・英語・国語テストの平均点は前年度新入生とほぼ同等であり、R6年度開設の臨床検査学専攻は、全ての科目で医療栄養学専攻よりも高かった。しかし、いずれも大学生としては不十分な得点であった。 ・R6年度から、単位認定のなかった「リメディアル国語」を正式な選択科目の「実用国語」として開講した。 ・テストの低得点者に対し、オリエンテーション時とメールを利用し、リメディアル関連科目の受講を推奨した。結果として、低得点者の受講率は、基礎数学90%、化学Ⅰ94%、実用国語92%と100%には届かなかったが比較的高かった。特に実用国語については、正式な科目にしたことが寄与したと推測される。				
○医療保健学部医療情報学科 **【計画12-1】**㋐ Socity5.0に基づくヘルスケア情報人材像を確立し、高等学校、実習先、就職先・進学先など社会におけるステークホルダーからの信頼を勝ち取る。 **「計画達成のための方策」** Socity5,0におけるヘルスケア人材像やその背景の書籍化及びカリキュラムの見直し・実装等を推進する。 **「評価指標」** ・入学定員に占める学生の割合100% ・実習先の実習科目における肯定的な指導者評価75%超 ・就職先における肯定的な上司評価75%超	Ⅲ	・2023年度入学者から新カリキュラムを適用し、その新DP/CPに基づくアドミッションポリシーの適用を行っている。 ・入学定員に占める学生の割合は60%を下回っており、入試広報部、世田谷事務部とも連携して抜本的な対策が急務である。 ・新カリキュラムに基づく人材像を取りまとめた書籍を刊行したため、これを配布するとともに実習先や就職先からの評価を定性的に調査しはじめている。現時点では肯定的な評価が多いので、その調査結果を2024年度に取りまとめたい。	**【年度計画12-1】** 令和5年度新カリキュラム適用学生におけるインターンシップの見直し・実装。 **「評価指標」** ・入学定員に占める学生の割合100% ・実習先の実習科目における肯定的な指導者評価75%超 ・就職先における肯定的な上司評価75%超	Ⅰ	・学生に魅力のあるカリキュラムを目指して2023年度から新カリキュラムを適用しているところではあるが、残念ながら2024年度入学生は入学定員の半数を割り込む結果となり、よって在学定員に占める学生の割合はさらに低下する結果となった。 ・18歳人口が減少する中で現状のままでは学科を継続することは困難であるため、2024年7月の大学経営会議において、医療情報学科（定員80名）と「医療保健学科医療情報学専攻（定員30名）」と大幅に縮小することとなった。また、これまで病院や電子カルテベンダーなど狭義の医療情報分野で活躍する情報処理技術者の育成を目指していたが、その範囲を大幅に広げることとした。具体的には、健康・スポーツの分野を含めたヘルスケアフィールドにおいて、情報処理機構が示す幅広いDX人材像も視野に入れて、多様なデジタルヘルス人材の育成にシフトすることとした。まだ関連産業等へのヒアリングを行っている段階であるが、「スポーツ科学副専攻」との連携等も含めて、着実にカリキュラムの見直しを進めてまいりたい。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画12-2】㋐ 卒業生への生涯学習支援として、卒業後の資格試験取得に向けた学習サポートを実施する。									
「計画達成のための方策」 卒業生向けの医療情報技師等の資格試験講座を開講する。 **「評価指標」** ・卒業後3年以内の推奨資格（医療情報技師等）取得者15名以上	Ⅱ	・卒業生の就職先企業における資格取得講座を継続し、3名が合格した。新型コロナウイルス感染症の影響もあり対象拡大できていないが、より多くの卒業生に還元できるよう方法等の見直しを行っていきたい。	**【年度計画12-2】** 前年度計画記載以外の卒業生向けの学修支援方法を検討する。 **「評価指標」** ・卒業後3年以内の推奨資格（医療情報技師等）取得者15名以上	Ⅲ	・本学卒業生が複数名就職する企業から委託を受けて例年「医療情報技師対策講座」を行っているところであるが、本年度は合格者2名にとどまったものの、うち1名が初度受験合格であり、同社からは高い評価をいただいた。また次年度以降も継続するよう依頼を受けており、同社には例年通り卒業生が就職する予定であることから、引き続き支援を続けてまいりたい。				
【計画12-3】㋐ 紀要・学会誌への投稿を推進する。									
「計画達成のための方策」 紀要・学会誌への投稿がスムーズにできるための問題点を抽出し、今後のアクションとスケジュールを決定する。 **「評価指標」** ・学科全体として、英語論文を3本/年以上公表	Ⅳ	・英語論文の掲載が1件及び掲載決定が1件あり、目標を達成した。このほか国際学会発表が4件あった。徐々に国際学会での発表が復調し始めているので、その成果を学科のブランディングにもつなげていきたい。	**【年度計画12-3】** 英語論文を3本以上投稿する。 **「評価指標」** ・英語論文の投稿状況	Ⅳ	・本年度は、英語の原著論文が5本、国際学会発表が5本と、例年より大幅に増加した。もっとも、昨年度課題とした「学会のブランディング」という意味ではまだ十分に活かせていないので、引き続き努力してまいりたい。				
○東が丘看護学部 **【計画13-1】**㋐ 全領域で「自ら考え判断し行動できる自律した看護師」の育成を目指し、学生が主体性を発揮できる学習活動（アクティブラーニング）を取り入れた授業（講義・演習）を実施（導入・継続）する。 また“tomorrow's Nurse”が目指す看護実践能力の基盤となる知識・技術の修得に向けて、毎年20%ずつの演習科目の内容・方法を検討し、令和8年度には全ての演習科目の見直しを行う。									
「計画達成のための方策」 1.各領域で新たに取り組むテーマを1つ以上決定し、それに対する行動計画および実施・評価を報告する。令和8年度までには全領域、全科目において検討する。	Ⅳ	1.全領域でテーマや計画に沿ってアクティブラーニングを取り入れた授業（講義・演習）に取り組んだ（100%）。それぞれのKPI・計画・実施状況および評価（達成度を含む）に関する資料（全4ページ）を作成し、全領域で共有した。以上2点から、今年度の取り組みは達成率100%とした。	**【年度計13-1】** 1.各領域の特性や各科目の学習目標に合わせ、アクティブラーニングを取り入れた効果的な授業計画・展開する。また、各領域で実施しているアクティブラーニングに関する情報を共有する。	Ⅲ	1.90%以上の科目でアクティブラーニングを取り入れた授業を展開した。アクティブラーニングに関する情報をシラバス、カリキュラム検討委員会等で共有した。				
2.領域間で情報を共有し、看護過程展開の事例や看護技術項目等の効果的かつ効率的な配置に関する検討を毎年1回ずつ行い、令和8年度の完了を目指す。	Ⅳ	2.全領域で演習科目および技術項目を決定し、方法・内容を見直しに取り組んだ（100%）。それぞれのKPI・計画・実施状況および評価（達成度を含む）に関する資料（全4ページ）を作成し、全領域で共有した。以上2点から、今年度の取り組みは達成率100%とした。	2.看護実践能力の基盤となる知識・技術の修得に向け、各領域で年度内で検討する演習科目および技術項目を決定し、演習内容・方法を見直す。また、各領域での検討内容をカリキュラム委員会で共有し、全体での調整を図る。	Ⅲ	2.各領域で演習内容・方法を見直した。カリキュラム検討委員会での共有、全体の調整は実施できなかった。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
（令和6年度より新規） 3. 学生自身が学修ポートフォリオを活用し、学修状況の自己評価、今後の学修目標の設定を促進する。			3. 学生自身が学修ポートフォリオを活用し、学修状況の自己評価、今後の学修目標の設定を促進する。	Ⅲ	3. 学修ポートフォリオである「看護技術経験表」を用いた自己評価、目標設定を促進した。各学年の活用率は80%以上であった。				
（令和6年度より新規） 4. ヘルスデータサイエンスプログラムの履修により、発展・進化する看護の知識・技術を積極的に探究し、データサイエンスの活用を通じて自らも看護・看護学の発展に創造的にかかわる能力を高める。			4. ヘルスデータサイエンスプログラムの履修により、発展・進化する看護の知識・技術を積極的に探究し、データサイエンスの活用を通じて自らも看護・看護学の発展に創造的にかかわる能力を高める。	Ⅳ	4. ヘルスデータサイエンスプログラムの履修率および修了認定率は100%であった。				
「評価指標」 ・アクティブラーニングを取り入れた授業（講義・演習）の実施状況及び演習科目の見直し状況 ・各科目の学生からのフィードバック、授業評価アンケート結果、学修ポートフォリオの活用率、プログラム（該当科目）の履修率および修了認定率			**「評価指標」** ・アクティブラーニングを取り入れた授業（講義・演習）の実施状況及び演習科目の見直し状況 ・各科目の学生からのフィードバック、授業評価アンケート結果、学修ポートフォリオの活用率、プログラム（該当科目）の履修率および修了認定率						
【計画13-2】㋐ ボランティア活動やボランティアサークルが定着し、4年間を通じて学生一人が最低1回はボランティア活動に参加する。									
「計画達成のための方策」 1. 学友会や学生サークルと連携し、学生のリクルートを積極的に行う。	Ⅳ	・コロナ禍も落ち着いてきており、多少の活動制限はみられたが平時の活動に戻りつつある。その一環として、コンタクトグループも対面での活動に移行した。 ・目黒区との地域連携を推進するため10月8日(日)に開催された「第47回目黒区民まつり」に学生ボランティア5名及び教職員3名を派遣した。 ・東京医療センター主催の災害訓練に約110名のボランティア学生を派遣した。また、目黒区消防団に173名登録しており、約450名の東が丘看護学部の学生が4年間で最低１回のボランティア活動に参加するという目標は達成できていると考えられる。 今後は年度計画を遂行していくと共に、新規で参加する学生やボランティア活動を増やしていきたい。	**【年度計画13-2】** 1. 学友会や学生サークルと連携し、学生のリクルートを積極的に行う。	Ⅳ	1-4. 約450名の東が丘看護学部の学生が4年間で最低1回のボランティア活動に参加するという目標は達成できていると考えられる。 ・学友会と連携を取り、各種イベントに学生の参加を促した。また、コンタクトグループを対面で2回実施した。				
2. コンタクトグループの前後に学生に連絡を行い、情報を周知する。			2. コンタクトグループの前後に学生に連絡を行い、情報を周知する。						
3. 学生サークルの活動が円滑に行えるようにサポートする。			3.　学生サークルの活動が円滑に行えるようにサポートする。						
4. ボランティア活動・ボランティアサークルの推進について、学友会と連携を取り支援していく。			4. ボランティア活動・ボランティアサークルの推進について、学友会と連携を取り支援していく。						
（令和6年度より新規） 5. 目黒区と連携し、区民対象のイベントに救護活動等のボランティアとして活動する。			5. 目黒区と連携し、区民対象のイベントに救護活動等のボランティアとして活動する。	Ⅳ	5. 目黒区との地域連携を推進するため「第48回目黒区民まつり」に学生ボランティア14名及び教員1名を派遣した。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
（令和6年度より新規） 6. 実習施設の災害訓練に患者役のボランティアとして参加する。			6. 実習施設の災害訓練に患者役のボランティアとして参加する。	Ⅳ	6. 東京医療センター主催の災害訓練に約110名のボランティア学生を派遣した。				
（令和6年度より新規） 7. 管弦楽クラブのダカーポに所属するメンバーは、病院の患者向けミニコンサートにボランティアとして参加する。			7. 管弦楽クラブのダカーポに所属するメンバーは、病院の患者向けミニコンサートにボランティアとして参加する。	Ⅲ	7. 病院などはコロナ禍の後、演奏会を禁止しており、ミニコンサートは実施できていないが、練習活動を行っている。				
（令和6年度より新規） 8. アロマセラピークラブのひいりんぐぽっとに所属するメンバーは、病院や老人施設、医愛祭などでアロマトリートメントのボランティアの活動を行う。			8. アロマセラピークラブのひいりんぐぽっとに所属するメンバーは、病院や老人施設、医愛祭などでアロマトリートメントのボランティアの活動を行う。	Ⅳ	8. 外部施設に2回、医愛祭などの内部施設で2回、アロマトリートメントのボランティアの活動を行った。 また、アロマ石鹸づくりを1回実施し9名が参加した。				
（令和6年度より新規） 9. 目黒区消防団に入会し、防災活動や災害時の拠点確認を行い、地域住民に対して貢献する。			9. 目黒区消防団に入会し、防災活動や災害時の拠点確認を行い、地域住民に対して貢献する。	Ⅳ	9. 目黒区消防団に150名弱が登録している。				
「評価指標」 ・各種ボランティア活動の参加状況、参加率、サークルやクラブの入会率			**「評価指標」** ・各種ボランティア活動の参加状況、参加率、サークルやクラブの入会率						
【計画13-3】㋐ （令和6年度より新規） 学生生活の充実を図る。									
「計画達成のための方策」 1. 学生生活ガイダンス及び担任制における学生への支援活動を実施する。			**【年度計画13-3】** 1. 学生生活ガイダンス及び担任制における学生への支援活動を実施する。	Ⅳ	1. 年度初めに学生生活ガイダンスを実施した。年間を通して担任制を用いてサポートしている。				
2. コンタクトミーティングの実施により、学生に学年を超えた縦のつながりを提供し、担任以外の教員からのサポートも提供する。			2. コンタクトミーティングの実施により、学生に学年を超えた縦のつながりを提供し、担任以外の教員からのサポートも提供する。	Ⅲ	2. コンタクトグループを対面で2回実施した。				
3. 看護技術経験表のデジタル化により、学生自身が自ら技術の到達度を確認しながら学習や実習を進めていくことを促す。 ・各実習後の面談にて、看護技術経験表の確認を教員と実施する。 ・各実習の開始前には、学生自身で看護技術達成度を確認するように教員が促す。 ・未達成項目を確認し、実習の中で受け持ち患者のニーズに合わせて学生が自ら達成できるように指導する。			3. 看護技術経験表のデジタル化により、学生自身が自ら技術の到達度を確認しながら学習や実習を進めていくことを促す。 ・各実習後の面談にて、看護技術経験表の確認を教員と実施する。 ・各実習の開始前には、学生自身で看護技術達成度を確認するように教員が促す。 ・未達成項目を確認し、実習の中で受け持ち患者のニーズに合わせて学生が自ら達成できるように指導する。	Ⅲ	3. 実習検討委員にて看護技術経験表の活用を実習前後で学生に周知および促しを徹底した。ダウンロードに関してはほぼ全員が済ませている。 ・実習後の担当教員との面談時に看護技術経験表の確認を実施できた。 ・各実習の開始前には、学生自身で看護技術達成度を確認するよう各領域の教員、実習検討委員が促すことができた。 ・各領域の実習で達成が見込まれる技術項目についてハイライトを施し周知徹底したが、学生・教員の理解が進まず、誤って評価をしている学生が散見された。 ・看護技術経験表の各学年の更新状況・看護技術経験表の各学年の目標達成率 1年生更新状況　97%、目標達成率は2025年度集計予定 2年生更新状況　98.2%　目標達成率　69.7% 3年生更新状況　86.6%　目標達成率　90% 4年生更新状況　100%、目標達成率　98%				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
「評価指標」 1）新入生ガイダンス実施後アンケートの実施状況の確認 2）コンタクトミーティングへの参加率、アンケートの確認 3）看護技術経験表の各学年の更新状況・看護技術経験表の各学年の目標達成率			**「評価指標」** 1）新入生ガイダンス実施後アンケートの実施状況の確認 2）コンタクトミーティングへの参加率、アンケートの確認 3）看護技術経験表の各学年の更新状況・看護技術経験表の各学年の目標達成率						
【計画13-4】 ㋐ (令和6年度より新規) 学びの機会を拡大し、学際的視野を身につけることを促進する。									
「計画達成のための方策」 1.単独の学問だけでは解決が難しい課題に対して、複数の学問を連携・融合させ学修することで学際的視野を身に着けることができるように、情報提供や学習支援に努めていく。			**【年度計画13-4】** 1.単独の学問だけでは解決が難しい課題に対して、複数の学問を連携・融合させ学修することで学際的視野を身に着けることができるように、情報提供や学習支援に努めていく。	Ⅲ	1.4年次の「卒業研究」にてグループ研究を実施した。履修率は100%であった。また3年生も参加する形式で研究成果の合同発表会を開催した。4年生の100%、3年生の95%以上が参加した。				
2.前期後期開始時に学部長、主担任により学生へのカリキュラムや学習に関するガイダンスが行われることで、一層学ぶことの意義や学際的視野につながる。			2.前期後期開始時に学部長、主担任により学生へのカリキュラムや学習に関するガイダンスが行われることで、一層学ぶことの意義や学際的視野につながる。	Ⅲ	2.前期・後期開始時に学部長・担任・関連委員会委員長によるガイダンスを実施した。各学年の95%以上が出席した。				
3.学生が自己の看護に関連する分野だけでなく、他領域の知識、知見、手法を融合しながら、問題解決に取り組む姿勢とスキルを身につけることを目指すことができるような学修の場を提供する。			3.学生が自己の看護に関連する分野だけでなく、他領域の知識、知見、手法を融合しながら、問題解決に取り組む姿勢とスキルを身につけることを目指すことができるような学修の場を提供する。	Ⅲ	3.コンタクトグループミーティング、スポーツ大会、医愛祭、東京医療センターの災害看護訓練等の課外活動を充実させ、参加を促進した。				
4.グローバルな健康課題に対し、一人ひとりが主体的に興味関心のある分野を学修できる副専攻「国際看護学」を設置し、国際看護を担う人材を育成する。			4.グローバルな健康課題に対し、一人ひとりが主体的に興味関心のある分野を学修できる副専攻「国際看護学」を設置し、国際看護を担う人材を育成する。	Ⅳ	4.副専攻「国際看護学コース」を設置した。学内での講義・演習だけでなく、フィールドワーク、プレゼンテーション、TOIEC受験、English Caféへの参加等を通して、グローバルな視野を修得できるようにした。				
「評価指標」 ・出席率・参加率・授業評価アンケート			**「評価指標」** ・出席率・参加率・授業評価アンケート						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画13-5】 ㋐ （令和6年度より新規） 学生に継続的な教育支援を行い満足度を高める。 **「計画達成のための方策」** 1. 学修ポートフォリオ（電子版看護技術経験表）の活用：演習や実習を学生と一緒に振り返り、できるようになった看護技術を確認し、学生自身が成長を感じられるように促す。			**【年度計画13-5】** 1. 学修ポートフォリオ（電子版看護技術経験表）の活用：演習や実習を学生と一緒に振り返り、できるようになった看護技術を確認し、学生自身が成長を感じられるように促す。	Ⅲ	1. 看護技術達成度を確認する経験表をデジタル化し、学生も自身でその達成度を確認し、不足な技術を積極的に実施することへとつながっていた。 また、達成度がアップしていくことで、学生自ら自信につながり、学習意欲をもつことにつながっていた。 実習終了後の評価面接の際に、学生とともにデジタル化された経験表を一緒に確認することで、実施できていた項目がチェックされていないところの修正、またそのあと続く実習での実施の意識付けにもつながり効果的であった。				
2. OH（オフィスアワー）の開催：各教員がOHの開催について学生に伝え（シラバスに記載する）、授業や演習、実習での学生の疑問にタイムリーに対応するようにする。			2. OH（オフィスアワー）の開催：各教員がOHの開催について学生に伝え（シラバスに記載する）、授業や演習、実習での学生の疑問にタイムリーに対応するようにする。	Ⅲ	2. OH（オフィスアワー）の活用をシラバスに記載し、教員が学生に伝えたことにより、学生対応に役立ち、効果的であった。				
3. 授業評価アンケートを実施し、学生にフィードバックする。			3. 授業評価アンケートを実施し、学生にフィードバックする。	Ⅲ	3. 授業評価アンケートの実施および教員の結果確認により、今後の改善等につながり、学生へのフィードバックに効果的であった。				
「評価指標」 ・学修ポートフォリオ（看護技術経験表）の記載状況を確認し、目標到達レベルの推移をみる。 ・OHの利用状況を集計する。 ・授業評価アンケートを集計する。回答率や回答内容の確認をする。			**「評価指標」** ・学修ポートフォリオ（看護技術経験表）の記載状況を確認し、目標到達レベルの推移をみる。 ・OHの利用状況を集計する。 ・授業評価アンケートを集計する。回答率や回答内容の確認をする。						
【計画13-6】 ㋐ （令和6年度より新規） 書籍を利用しやすいレイアウトや検察対応を工夫し、図書利用の促進および満足度を高める。 **「計画達成のための方策」** 1. 図書館利用方法の説明や検索対応を行う。			**【年度計画13-6】** 1. 図書館利用方法の説明や検索対応を行う。	Ⅳ Ⅳ	・国際看護や実習指導者講習会、大学院の図書、地域連携などの展示図書コーナーを新規に設け、教員や学生が書籍を利用しやすいレイアウトの工夫を行った。入館者数はBDS故障のため不明ではあるが資料貸出数6000件以上、ILL申込件数400件程度、看護師国家試験WEBﾛｸﾞｲﾝ数は全学利用の3分の1を東が丘看護学部が占めており、目標は概ね達成したと評価する。 1. 来館者に対して図書館の利用方法についてその都度説明するとともに、開館案内を毎月送信し、学生に周知してもらっている。データベースログイン回数は全学のデータしかないが、看護師国家試験WEBﾛｸﾞｲﾝ数は全学利用の3分の1を東が丘看護学部が占めており、活用されている。				
2. データベース利用方法の説明を十分に行い、英論文クリティークや看護研究の基礎といった講義においても繰り返し説明し、各自がスムーズに利用できるまで支援する。			2. データベース利用方法の説明を十分に行い、英論文クリティークや看護研究の基礎といった講義においても繰り返し説明し、各自がスムーズに利用できるまで支援する。	Ⅳ	2. 新入生・来館者を対象に、データベースの利用方法について説明している。英論文クリティークや看護研究の基礎の講義内でも教員が説明し、学生はスムーズに利用できている。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
3.授業や実習に必要な書籍およびDVDに関して、前期・後期で購入リクエストを受け付けるとともに、リアルタイムでリクエストも受付、ニーズに対応する。			3.授業や実習に必要な書籍およびDVDに関して、前期・後期で購入リクエストを受け付けるとともに、リアルタイムでリクエストも受付、ニーズに対応する。	Ⅳ	3.新入生・在校生を対象に図書のリクエスト方法について口頭・メール等で説明し、周知してもらっている。図書のリクエスト授業や実習に必要な書籍およびDVDに関して、前期・後期の定期リクエストを受け付けるだけでなく、毎月随時リクエストを受け付け（2月時点で21冊/年）、教員・学生のニーズにあった対応が実施できた。				
4.目黒区、目黒区内の病院図書館における地域連携を促進する。「緩和ケア」「就業継続しながらの治療」といったテーマでコラボレーション展示を行い、学生の興味関心を促すとともに大学図書館と地域の連携による社会活動を学ぶ。			4.目黒区、目黒区内の病院図書館における地域連携を促進する。「緩和ケア」「就業継続しながらの治療」といったテーマでコラボレーション展示を行い、学生の興味関心を促すとともに大学図書館と地域の連携による社会活動を学ぶ。	Ⅳ	4.目黒区との地域連携として、「飲酒と健康」をテーマに選書15冊、コラボレーション展示、ブックリストの配布を行った。展示は展示コーナーを設けることで地域連携の強化ならびに学生の関心を促せた。				
「評価指標」 入館者数、資料貸出冊数、ILL申込件数、データベースログイン回数とSession数、看護師国試WEBﾛｸﾞｲﾝ回数			**「評価指標」** 入館者数、資料貸出冊数、ILL申込件数、データベースログイン回数とSession数、看護師国試WEBﾛｸﾞｲﾝ回数						
【計画13-7】㋐ （令和6年度より新規） 異文化コミュニケーションの充実と学生の満足度を高める。									
「計画達成のための方策」 1.ハワイのNPによる特別講演を設定し受講できるよう時間割を調整する。			**【年度計画13-7】** 1.ハワイのNPによる特別講演を設定し受講できるよう時間割を調整する。	Ⅲ	1.ハワイでNPとして働いている非常勤講師により、学部生はオンライン授業、大学院生は対面で講義を受けた。米国の保健医療制度の特徴などの講義を受け学生達は高い関心を示した。日本と異なる医療制度等に関心が高まった。				
2.国際看護学Ⅱのフィールドワークを通して、グローバル化の実態および、外国人の健康問題について探求する。			2.国際看護学Ⅱのフィールドワークを通して、グローバル化の実態および、外国人の健康問題について探求する。	Ⅳ	2.副専攻「国際看護学Ⅱ」は希望した学生が受講し、学内での講義・演習だけでなく、フィールドワーク、プレゼンテーションを通して、国外のグローバル化や、健康課題、国際医療協力の実態を探求した。				
3.TOEIC®の受験を推奨、セッティングし、英語能力、日常やオフィスなど実際のコミュニケーション能力を高める。			3.TOEIC®の受験を推奨、セッティングし、英語能力、日常やオフィスなど実際のコミュニケーション能力を高める。	Ⅳ	3.TOEIC®はおよそ130名の学生が受験し、実力測定により語学能力の確認と向上に寄与できた。1年生の受験率は100%であった。英語の表現力向上および自己の意思を伝える語彙の増加に貢献した。				
4.ネイティブスピーカーと交流するEnglish caféの定期的な開催により、英語能力、コミュニケーション能力を高める。			4.ネイティブスピーカーと交流するEnglish caféの定期的な開催により、英語能力、コミュニケーション能力を高める。	Ⅳ	4.English caféは年間に6回、定期開催し、平均参加学生数は60名であった。ネイティブスピーカーとの会話によりリスニングおよびスピーキング能力の向上に寄与した。英語圏の文化を学び、グローバルな視野を修得した。				
5.海外現地研修参加による現地の学生やホストファミリーとの交流により、英語能力、コミュニケーション能力を高める。			5.海外現地研修参加による現地の学生やホストファミリーとの交流により、英語能力、コミュニケーション能力を高める。	Ⅲ	5.ハワイ大学アウトリーチ部門主催N.I.C.E.プログラムに3名の学部生が参加した。現地の学生と会話するセッション、ハワイ・アメリカの文化研修、学外活動により、語学力が向上するように設定した。				
6.海外オンライン研修の参加を促し、英語能力、コミュニケーション能力を高める。			6.海外オンライン研修の参加を促し、英語能力、コミュニケーション能力を高める。	Ⅲ	6.オーストラリアオンライン研修は学生の参加希望がなかったが、教員2名が運営スタッフとして協力した。グリフィス大学の協力を得て、海外の看護や栄養について学び、効果的な学修機会と回答した人は100%であり、満足度も高かった。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
「評価指標」 特別講演の出席率、ヒアリング参加率、TOEIC®の受験率、English caféの参加率、海外研修の参加率および満足度、オンライン交流の参加率および満足度			**「評価指標」** 特別講演の出席率、ヒアリング参加率、TOEIC®の受験率、English caféの参加率、海外研修の参加率および満足度、オンライン交流の参加率および満足度						
【計画13-8】㋐ (令和6年度より新規) 卒業後の支援体制を構築する。									
「計画達成のための方策」 1. 卒業生との懇談会を企画し、学生が将来の進路について考える機会を設ける。			**【年度計画13-8】** 1. 卒業生との懇談会を企画し、学生が将来の進路について考える機会を設ける。	Ⅲ	1. 卒業生との懇談会を11月8日に国立病院機構本部講堂で実施した。卒業生に関しては、本学部の実習病院を中心に14施設から参加があった。学部3年生に関しては104名の参加があり、参加率は92.9%であった。 前半では、卒業生が所属する施設に関する説明を行い、後半では、卒業生が施設ごとにブースに分かれ、3年生が自由に卒業生から話を聞く時間とした。 実施後のアンケートでは、懇談会について「満足」「やや満足」と回答した割合が計77%であり、今後の就職活動に「大いに参考になった」「参考になった」と回答した割合が計85%であった。 評価指標がおおむね80%を超えていることから評価区分をⅢと判定する。				
「評価指標」 卒業生との懇談会の参加率及び満足度			**「評価指標」** 卒業生との懇談会の参加率及び満足度						
【計画13-9】㋐ (令和6年度より新規) 実習施設との連携強化により充実した実習指導を強化する。									
「計画達成のための方策」 1. 医療センターとの連携会議(3回/年)を開催する。			**【年度計画13-9】** 1. 医療センターとの連携会議(3回/年)を開催する。	Ⅳ	1.2. 看護学連携会議：参加人数は教員延べ65人、病院延べ70(第2回までで)であった。 ・各回アンケート回答率は参加者の5～7割程度で概ね参加者は会の主旨やねらいを理解して有意義な話し合いが持て、満足度の高い会議を実施することができた。				
2. 連携会議でのテーマについては、参加者からの意見や希望を聞き、医療センターと大学の担当者で調整する。			2. 連携会議でのテーマについては、参加者からの意見や希望を聞き、医療センターと大学の担当者で調整する。						
3. 看護学実習施設への説明会の開催(1回/年)			3. 看護学実習施設への説明会の開催(1回/年)		3. 看護学実習施設への説明会：案内総配布数79施設の内、35施設(事前欠席連絡18施設)73名の事前参加連絡をいただき、当日は事前参加施設すべての参加ならびに、大学参加者40名の総勢113名の参加であった。 ・各回アンケート回答率は参加者の5～7割程度で概ね参加者は会の主旨やねらいを理解して有意義な話し合いが持て、満足度の高い会議を実施することができた。				
4. 実習指導者講習会の開催(2024年度より開講)			4. 実習指導者講習会の開催		4. 実習指導者講習会：受講者数29名 ・回収率は63.6%、会の内容については、ほぼ参加施設の方が満足されており実習受け入れ・指導に活用できると回答されており、本会の目的は達成されたと考える。				
「評価指標」 ・連携会議、看護学実習施設への説明会、実習指導者講習会の参加人数 ・実施後のアンケート結果			**「評価指標」** ・連携会議、看護学実習施設への説明会、実習指導者講習会の参加人数 ・実施後のアンケート結果						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画13-10】㋐ （令和6年度より新規） 広報活動の充実により受験生の本学受験および入学の意志が高まる。									
「計画達成のための方策」 1.入試広報部と協力し、受験生に本学の特徴を認識してもらえるよう複数の広報イベントを開催する。 ①オープンキャンパスの充実：年3回開催とする（3月,6月,7月）。 ②入試説明会の充実：模擬授業、病院見学など、学生や両親が関心を持て、実際の学びの雰囲気を体験できる魅力あるイベントを企画運営する。 ③個別相談会の充実：在学生や教員との相談会、事務部職員による学生生活支援状況の説明を個別に実施できるようにイベント内で設定する。			**【年度計画13-10】** 1.入試広報部と協力し、受験生に本学の特徴を認識してもらえるよう複数の広報イベントを開催する。	Ⅲ	1.オープンキャンパス 3/24（日） 来場者学生数（72名　前年度74名） 満足度（情報なし） 6/9（日） 来場者学生数（102名，　前年度　96名） 満足度（93.1%:大変満足60.5%，満足32.6%） 7/28(日） 来場者学生数（145名，前年度199名） 満足度（74.0%:大変満足72.0%，満足2.0%） ・高校教員対象大学説明会 7/1(月)（20名,前年度15名） 高校の教員への説明会に参加し、入試に関して説明した。教員の満足度が高かった。高校生の本学部に対する関心が高まった。 ・入試説明会 9/16（月） 来場者学生数（65名,前年度48名） 満足度（情報なし）				
2.企画広報部と協力し、広報誌、公式Webサイト、SNS等を通じて、東が丘看護学部の情報やイベント情報を発信する。			2.企画広報部と協力し、広報誌、公式Webサイト、SNS等を通じて、東が丘看護学部の情報やイベント情報を発信する。		2.一般選抜科目対策講座（Web） 12/6（金）-2/7（金）（139名,前年度190名） ・入試相談会 11/27（水） 来場者学生数（4名,前年度3名） 12/10（火） 来場者学生数（6名,前年度19名）				
3.大学の授業内容に触れることのできる出張講義を提供することで、看護の魅力と医療界の働きがいを伝え、キャリア選択に「看護」が入るよう実施する。			3.大学の授業内容に触れることのできる出張講義を提供することで、看護の魅力と医療界の働きがいを伝え、キャリア選択に「看護」が入るよう実施する。		3.出張講義 7/18（木）東京都立忍岡高等学校 12/11（水）目白研心高等学校 1/30（木）玉川聖学院高等部 ・進路セミナー 11/8（金）東京都立正則高等学校 ・Webサイトの訪問者数やSNSの再生回数 対応なし				
「評価指標」 ・開催状況（オープンキャンパス、個別相談会、入試説明会） ・各イベントの来校者数と満足度調査 ・出張講義の実施状況 ・受験者数 ・Webサイトの訪問者数やSNSの再生回数			**「評価指標」** ・開催状況（オープンキャンパス、個別相談会、入試説明会） ・各イベントの来校者数と満足度調査 ・出張講義の実施状況 ・受験者数 ・Webサイトの訪問者数やSNSの再生回数						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
○立川看護学部 **【計画14-1】㋐** 立川看護学部の「地域から信頼される看護師の育成」を基本とし、新カリキュラムの導入により、高い実践力と判断力を身に着けた看護師の育成を目指し、学生が主体的に学ぶことができるよう、講義・演習・実習を連動させ、これまでの学修成果を見直し、新たな教育手法の導入と改善および教育環境を整備する。 **「計画達成のための方策」**			**【年度計画14-1】**						
1.新カリキュラムの導入、及び各領域の特性や学習目標に合わせた教育手法を用い、学生が主体的に学ぶことができる教育環境を整え、効果的な授業を展開する。また、学習成果を可視化し、授業内容の改善を図る。	Ⅲ	1.新カリキュラムの進捗状況：新カリキュラムは1・2年次の学生に提供している。今年度は科目ナンバリング、新カリキュラムのマップとツリーの作成、科目ナンバリング表の作成を行い、カリキュラム全体の総確認をした。結果、新カリキュラムのDPに向けた学習の積み重ね状況を確認・整理し、学修の基盤強化を図る内容を取り入れ、授業ガイダンスにおいて学年進行に伴う学修の積み重ねや科目のつながりについて説明を取り入れた。学生が学習において困難に感じる科目等については2024年度より、初年次教育を開講し、学習のサポートを実施していくこととした。今年度より、学内教員による講義では、ほぼすべての講義でPCを用いた試験を取り入れた。	1.アクティブラーニングの導入・ＩＣＴの活用等について、全科目の20～25％の見直しを行う。	Ⅳ	1.各科目でアクティブラーニングの導入を行うとともに今年度より電子教科書を導入した。さらに前年度から引き続き演習等の授業内におけるVRシステムの利用をすすめ、演習では全科目においてMedi-EYE（演習用電子カルテ）とF.CESS（実習用電子カルテシステム）を使用し、実際の臨床、看護現場に近づけた形での看護過程の展開を実施している。実習においては全教科でF.CESSを活用している。学修成果の可視化並びにICT活用を進める中で、WebClassを活用し試験の実施を進めており、専任教員が担当している科目は全科目達成しているため、全科目の50%以上は実施できている。 学修成果の可視化として、カリキュラムマップ並びにカリキュラムツリー、シラバス、試験については全科目において説明している。評価指標を提示するためにルーブリック評価を活用し、授業1回毎並びにすべてを振り返って学修目標が達成されたか否かを学生自身が認識できるように整備を進めた。よって計画の目標は達成された.今後さらにICT活用や学習成果を可視化し授業内容の充実を図っていく。				
2.看護技術項目（令和4年度から導入）の各演習・実習での修得度を評価し、卒後時点での看護技術の修得度を高める。	Ⅲ	2.看護技術項目に関しては、全ての実習が終了した4年次生に調査したところ、到達度60%以上の項目が95%であり、到達していない項目は、178 項目中9項目（5%）しかなかった。コロナの影響で病棟にいる時間が制限された学年であったものの、その中では十分修得できたと考えられる。	2.前年度より達成度の割合の増減を評価する。令和8年度の目標値の達成を目指す。	Ⅲ	2.看護技術ポートフォリオを導入し、看護技術の達成度の見直しを行い昨年度より運用している。60%未達成の項目が14項目あり昨年度より多い状況にある。入院期間がさらに短期化していること、実習施設での受け持てる患者の変化により実習で実施できる技術にも限界がある。ただ、学内での演習での実施を強化し看護技術修得度を高める。				
3.副専攻「災害看護学コース」の教育を1年次から4年次まで系統的に実施、また、災害医療センターと連携し教育内容の充実を図る。さらに、地域と協働した避難訓練参加などの学習の機会（地域貢献・ボラティア）をもつ。	Ⅲ	3.副専攻・災害看護学コースでは113名が必要な単位数を獲得し、修了証を授与する。講義内容の重複を解消すること、より総合的な災害に対応する実践力を強化すること、科目間のつながりを重視し学生の学習の進捗を素早く把握してフィードバックすること、振り返りによる学習の積み上げ効果を図るために副専攻の科目運営を看護基盤学が担当することとした。また、DXの推進の一環で災害看護学の演習においてVR教材の開発を行い、災害時特有のリアリティさを伴う状況判断力を養う教授方法の特徴を出し、さらに、産学連携並びに災害拠点病院や立川防災基地（防衛省、警察庁、消防庁、立川市）との連携により効果的な授業を展開していくこととした。	3.新カリキュラムの進捗状況とともに、災害看護学コースに関連する全ての科目の学修評価・改善に取り組む。毎年、2～3科目の見直しを行う。また、副専攻災害看護学コースに規定された単位数を修了した場合は、修了書を渡す。	Ⅳ	3.副専攻・災害看護学コースでは110名が必要な単位数を獲得し、修了証が授与された。副専攻の科目運営の担当領域が決まったことで、段階的な積み上げや講義内容の重複が解消されている。さらに災害看護学実習では、産学連携並びに防災基地（防衛省、警察庁、消防庁、立川市）との連携のもとよりリアリティのある実習に取り組めている。また災害拠点病院である災害医療センターとも連携し、災害時の病院運営等のシミュレーションを実際の病院、病棟で実施するなどが進められている。よって、今年度の計画は達成されたと考えるが、より実際の場面にコミットした授業運営ができるように継続して評価していく。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
「評価指標」 ・新カリキュラムの導入状況 ・看護技術項目の習得状況 ・災害看護学コースの教育内容充実状況			**「評価指標」** ・新カリキュラムの導入状況 ・看護技術項目の習得状況 ・災害看護学コースの教育内容充実状況						
【計画14-2】㋐ 学生の国家試験対策や就職支援を強化するとともに、卒業後の支援体制を構築する。									
「計画達成のための方策」 1.看護師国家試験合格100%をめざす。	Ⅲ	1.本年度は成績不振者の下位20名に対し、業者の講義を入れ、全員合格対策の一つとした。自己採点結果では、受講した学生は全員ではないが合格ラインに入ってきており、受講を進めたが、金銭的理由から受講しなかった学生は、合格点に達していない結果であった。最終的な合格者は110名（97.3%）であり、全国の大卒平均93.5%より高いものの、目標の全員合格には届かなかった。	**【年度計画14-2】** 1.看護師国家試験合格100%をめざす。	Ⅲ	1.本年度も成績不振者の下位20名に対し、業者の講義を入れ、全員合格対策の一つとした。最終的な合格者は現役生111名中110名合格（99.1%）、既卒生4名中3名合格であり、全国の大卒平均95.9%(全体90.1%）より高かったが、目標の全員合格には届かなかった。				
2.8月末までに就職内定90%以上（進学希望者を除く）、卒業時就職・進学率100%をめざす。	Ⅳ	2.就職に関しては、8月末の時点で内定率78%だったが、報告が遅れている学生に再確認したところ内定率は90%に達し、10月10日時点では94%であった。最終的に1名は看護師に向かないと判断し病院ではなく一般企業に就職したが、他の学生は希望施設へ就職や進学ができたため、目標の100%を達成したと判断した。	2.8月末までに就職内定90%以上（進学希望者を除く）、卒業時就職・進学率100%をめざす。	Ⅳ	2.8月末までに111名のうち進学希望者2名除く109名中88名の進路が内定しており、80.7%の内定率であった。最終的に100%就職、進学先が決まっている。進学については試験が遅いこともあり、早期にわかることは少ないが、就職に関しては報告し忘れている学生もいるため報告喚起を行い把握しながら支援を行っている。				
3.卒業後の支援体制を構築する。	Ⅱ	3.卒業生支援体制として、3月6日にホームカミングディを初めて実施した。卒業時のメールアドレスが分かる342名に連絡したが、アドレス変更などのためにうまくメールが届かない状況が多く見られた。把握できる卒業生のLINE等も駆使したところ84名から連絡があり、1期生を中心に14名の参加があった（連絡が2月でと遅かったので、参加したいがシフトが調整できないという意見が多く寄せられた）。1期生はちょうどステップアップや転職等を考える時期であり、特定行為研修を受講した1期生に受講までの経緯を報告してもらったのを始め、転職した人には転職前後の経緯を報告してもらったり、結婚した人や子供がいる人にはワークライフバランスに関する状況を報告してもらうなど、各自が近況報告をし、その内容についてディスカッションすることで様々な環境とその対処方法について考える機会になり好評であった。終了後アンケートでも、参加者の満足度が高かったため、来年度は12月に案内を出し、3月に開催することとしたい。	3.卒業後の支援体制を構築する。	Ⅲ	3.ホームカミングデイを3月5日（水）午後に実施した。参加人数：10名（内、子供連れ2名）、教員7名が参加した。当日雪の影響もあり予定より参加者が少なくなったが、小グループで親睦交流を深める機会となった。次年度も同時期頃に開催する予定とし、継続して支援していけるようにする。 ・卒業生との懇談会をこれから就職活動を始める3年生を対象に行い、14施設15名の卒業生が来校した。3年生に説明を行う機会だけでなく、旧友と会い、情報交換ができる場となっている。				
「評価指標」 ・看護師国家試験合格状況 ・就職内定状況 ・卒業後の支援体制の構築状況			**「評価指標」** ・看護師国家試験合格状況 ・就職内定状況 ・卒業後の支援体制の構築状況						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画14-3】 ㋐ 立川看護学部の学生支援を充実させる。 **「計画達成のための方策」** 1.コンタクト・グループミーティングの出席率を各学年80%以上に維持する。	Ⅲ	1.コンタクト・グループミーティングの出席状況は、前期開催80.5%、後期開催62.2%であった。	**【年度計画14-3】** 1.コンタクト・グループミーティングの出席率を各学年80%以上に維持する。	Ⅲ	1.コンタクト・グループミーディング並びに担任の役割を整理し、担当教員と学生がより密に相談支援体制ができるように強化した。コンタクト・グループミーティングの出席率は4月(86.6%)と12月(64.6%)であったが、学生へのアンケートでは交流が持てたと参加者の約8割以上が役立ったと回答していた。後期の参加率が従来より低いため、実施時期、運営方法を再考し交流促進がはかれるようにしていく。				
2.新入生合宿研修での学科プログラムの企画運営を効果的に行い、参加学生の満足度を80%以上にする。	―	2.新入生合宿研修の形態およびプログラムが変更となり、学科プログラムが無くなったため、評価不能である。	2.新入生合宿研修での学科プログラムの企画運営を効果的に行い、参加学生の満足度を80%以上にする。	Ⅲ	2.新入生合宿研修の形態およびプログラムが変更となり、学科プログラムが無くなったため、評価不能であるが、今後、新入生合同研修の参加意義などを伝え満足度をあげていく。				
3.医愛祭での立川看護学部の企画イベントで地域に貢献する。両日80名以上の来場者を確保するとともに、学生ボランティア10名以上を確保する。	Ⅲ	3.医愛祭での（学科企画への）来場者、学生ボランティア数・ボランティア活動の参加状況については、令和5年11月4日が114名、5日が74名、計188名の来場者があった。また、学生ボランティアの参加は、ACTへの参加が10名以上あった。	3.医愛祭での立川看護学部の企画イベントで地域に貢献する。両日80名以上の来場者を確保するとともに、学生ボランティア10名以上を確保する。	Ⅲ	3.医愛祭（9月28日、29日開催）では、学科企画として「災害・防災について考えよう」をテーマに、防災グッズ展示、VRシステム体験を行い、災害の備えの重要さを改めて理解できた、VRシステムが予想以上にリアルで驚いた等の意見が多く概ね好評であった。両日で1000名以上の来場者のうち本学部への来場者数は両日あわせて160名以上であり大変好評であった。				
4.ボランティア活動参加の活性化を図る。 **「評価指標」** ・コンタクト・グループミーティングの出席状況 ・新入生合宿研修の満足度 ・医愛祭での来場者、学生ボランティア数 ・ボランティア活動の参加状況	Ⅲ	4.学生ボランティア活動は、立川消防団、赤十字奉仕団、立川シティマラソンなどへの学生の主体的な参加と活発な活動があり、ボランティア活動の活性化が図れた。情報提供は３回以上実施できた。医療機関や老人保健施設などへのボランティアは、コロナ等の関係でまだ控えることにした。	4.ボランティア活動参加の活性化を図る。 ・ボランティア活動に関する情報提供を年3回以上行う。 ・4年間を通じて学生一人が最低1回はボランティア活動に参加する。 ・医療機関や老人保健施設などにおける学生ボランティアの参加や病院でのコンサートへの参加協力など）を、年に1回以上行う。 **「評価指標」** ・コンタクト・グループミーティングの出席状況 ・新入生合宿研修の満足度 ・医愛祭での来場者、学生ボランティア数 ・ボランティア活動の参加状況	Ⅲ	4.学生ボランティア活動は、立川消防団、赤十字奉仕団、立川シティマラソンなどへの学生の主体的な参加と活発な活動があり、ボランティア活動の活性化が図れた。情報提供は3回以上実施できた。医療機関や老人保健施設などへのボランティアについては感染症の影響が多少残っており難しいところもあるが、個々で興味のあるところへ出向いたり、障がい児・者並びに家族会でのボランティア活動などに参加している学生もいる。学部として、学生のボランティア活動の状況がすべて把握できていない為、感染症も5類となったので社会活動への参加支援も強化していく。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画14-4】㋐ 実習施設と大学の連携を図り、より良い実習環境を整備した上で、看護師教育の技術項目に対する卒業時の到達度の達成に向けた指導の実施や、質の高い看護教育の実現に向けて大学・実習施設で共同研究を実施する。									
「計画達成のための方策」 1.実習施設と大学で実習に関する情報や課題を共有し、課題解決や教育効果向上に向けた検討の機会を持つ。	Ⅳ	1.6月22日（木）にハイブリッド形式にて開催した。実習施設数19施設（対面：6施設、オンライン13施設）実習担当者48名、教員25名が出席した。	**【年度計画14-4】** 1.看護学実習施設に対する説明会の実施。（1回/年）	Ⅳ	1.実習施設説明会 テーマは「臨床実践能力を磨く臨地実習に向けて」とし年間実習計画の共有を目的にハイブリット形式にて開催し、参加者は対面4施設14名、オンライン26施設、教員31名が出席し、実習施設との課題の共有を図った。				
2.臨床指導者と大学教員とさらなる連携を図り、看護学実習の目的・目標に沿った教育効果の高い実習を行えるよう実習環境や指導体制について検討する。	Ⅳ	2.12月11日（月）に災害医療センター、村山医療センター、共済立川病院看護部との共催で、ハイブリッド形式にて開催した。	2.看護学実習連携会議の実施。（1回/年）	Ⅳ	2.看護学実習連携会議 テーマを「看護学実習における教学マネジメントと教育DXの新たな展開」とし、本学および3施設にWeb環境に伴う実習環境の変化や指導の課題提供をいただき、グループディスカッションを行った。今年度より主な実習病院の3施設に加え、母性・小児・精神・在宅実習の施設にも声をかけ、参加者は実習施設29施設で76名、本学27名（計103名）が参加した。終了後アンケートでは参加者の97%が参加してよかった、95%が今後に役立つと回答していた。				
3.看護技術経験表の集計、到達度が未達成(60%未満)の項目について委員会で対策を検討する。また、学生の到達度評価について教員間で共有し、実習指導に活かす。	Ⅳ	3.4年次生に調査した。回収率100%。到達度60%未満の項目は、178 項目中9項目（5.1%）コロナの影響で実施できてなかった技術がモデル人形で実施できたと転じた項目があった一方で、対人関係やコミュニケーション、家族の状況に関するアセスメントの実施が低い状況があった。コロナの影響で病棟にいる時間が短いなどの実習制限がかかった学年でもあることが影響していると推察された。本結果を実習指導や新人教育等に活かせるよう実習施設に情報共有することも検討する。	3.技術経験表の学生の到達度調査及び内容の検討。 ・東が丘・立川看護学部看護学科災害看護学コース4年次生の看護技術卒業時到達度達成の到達度60%以上の項目が90%以上。 ・到達度未達成(60%未満)項目の共有及び対策の検討。（1回/年）	Ⅳ	3.4年次生に調査し、回収率100%であった。到達度60%以上の項目は164項目で92.1%であり到達度60%未満の項目は14項目（7.9%）あった為、目標は達成できている。しかし、昨年度と技術項目が多少異なるが、多くなっている。最近の臨床現場の動向を鑑みると排泄介助や呼吸訓練など臨床で実施を経験する機会が減っている技術項目もある。そのため、技術項目について再度検討するとともに必要な技術については演習だけでなく動画視聴などの活用も考えていく。以上を実習検討委員会並びにカリキュラム検討委員会、教授会でも共有した。				
4.大学・実習施設で看護教育に関する共同研究を実施し、学術集会で成果発表を行う。	Ⅳ	4.第43回日本看護科学学会学術集会にて「看護系大学と実習施設のシームレスな教育連携の検討ー実践的な看護師教育体制の構築に向けた取り組みー」について実習施設と交流集会を企画・実施した。看護技術教育に関する研究に取り組み「COVID-19下の多様な実習を経験した新卒看護師の実習形態による看護実践能力の違い」について口演にて成果発表を行った。	4.大学・実習施設と実習指導に関連する共同研究。 ・大学と実習施設による共同研究の実施。（1回以上/年） ・学術集会での成果発表。（1回以上/年）	Ⅳ	4.第44回日本看護科学学会学術集会にて実習施設と共同して交流集会「看護学実習における教学マネジメントと教育DXの新たな展開」というテーマで実施した。また一般演題として「臨床指導者の看護学生へのコミュニケーション教育の実態」として発表した。当交流集会に参加した東京都立看護学校教員が、都立看護学校並びに都庁保健医療局へ働きかけ、本学部へのDX推進体制について見学のため来校（全都立看護学校教員並びに都庁職員16名）した。3時間ほどかけて推進体制の説明とICTツールの実際に触れていただき、交流を図った。				
「評価指標」 ・看護学実習施設に対する説明会の実施状況 ・看護学実習連携会議の実施状況 ・技術経験表の学生の到達度調査及び内容の検討状況 ・大学・実習施設と実習指導に関連する共同研究状況	Ⅳ	5.今年度より全領域で実習記録を電子化し、看護技術到達度ポートフォリオもF.CESSで一元化した。また、実習記録の標準化を図った。	**「評価指標」** ・看護学実習施設に対する説明会の実施状況 ・看護学実習連携会議の実施状況 ・技術経験表の学生の到達度調査及び内容の検討状況 ・大学・実習施設と実習指導に関連する共同研究状況						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画14-5】㋐ 立川市消防団機能別分団(立川市学生消防団)活動の活性化を図ることにより、立川市民の安全・安心を護るとともに学生団員自らの災害医療に対する知識と技能、意欲を育成する。									
「計画達成のための方策」 1.新入生オリエンテーション等の機会を利用して、大学の社会貢献活動の重要性を丁寧かつ適切に伝え、学生が主体性を持って入団することを第一とする。また、活動の様子を広くＰＲし、社会的に認知されていることを入団の意識付け材料とする。	Ⅳ	1.立川市学生消防団に所属する学生数は、各学年 32名、39名、34名、37名の計142名であり、全学生数456名の31.1%であった。	**【年度計画14-5】** 立川市消防団機能別分団(立川市学生消防団)活動の活性化。 1.立川市学生消防団に所属する学生数。全学部生の30%以上加入	Ⅲ	1.立川市学生消防団に所属する学生数は、1年生16名、2年生31名、3年生39名、4年生34名であり、全学部生数455名中120名(26.4%)の加入であり、30%にやや届かなかった。1年生の入団学生が少なくなったことも1つの要因として挙げられる。そのため、活動内容を周知し加入しやすい環境を整備していく。				
2.訓練・行事への出席率向上について、消防団員は『公務員』であるという自覚と責任感を入念するとともに、地域の担い手として地域住民と接することを説明して出席に対するモチベーションアップに繋げる。また、各種訓練等の日程を予め立川市と調整し、学業に支障のないスケジュールを設定する。	Ⅱ	2.1年の任命式は30名（21%）であったが、11月の総合防災訓練は17名（12%）１月の出初式は20名（19%、４年生は除く）であり、年間の出席率は15%に留まった。ポストコロナに向け、消防団員としての自覚を促し、出席率の向上を図りたい。	2.立川市学生消防団における主な訓練・行事への出席。平均出席率コロナ禍：約30%以上 、ポストコロナ:約50%以上	Ⅲ	2.1年の任命式は対象が1年生のみであるため75%の出席率であり、1年生入団前の6月の震災対応訓練は55.8%、11月の訓練は10%, 23%であり、1月の出初式(4年生除く)は17.5%の出席率であり、平均36.2%であった。昨年度よりは出席率があがり、達成されているが訓練が後期にあることが多く、3年生は実習中であり、4年生は国家試験前であり、参加率が伸びなかった。				
3.上級救命講習の受講について、上級救命講習の概要及び学生消防団にとっての必要性と有効性を説明する。 **「評価指標」** ・立川市学生消防団に所属する学生数 ・立川市学生消防団における主な訓練・行事への出席状況 ・上級救命講習を受講し上級救命技能認定証の交付を受ける学生消防団員の状況	Ⅳ	3.上級救命講習の受講者は10名（31%）であり、全団員の資格取得者は67名（47%）となっている。	3.上級救命講習を受講し上級救命技能認定証の交付を受ける。 学生消防団員の15%以上 **「評価指標」** ・立川市学生消防団に所属する学生数 ・立川市学生消防団における主な訓練・行事への出席状況 ・上級救命講習を受講し上級救命技能認定証の交付を受ける学生消防団員の状況	Ⅳ	3.今年度上級救命講習取得者は3名（18%）であり、全団員の資格取得者は51名(42.5%)であり目標は達成できている。しかし1年次の取得率が低いため、次年度促がしていく。また、次の3年生から（新カリ）災害看護学Ⅲで、日赤救護法のマスターを図っていく。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画14-6】㋐ 立川看護学部が目指す看護師像を情報発信するとともに、立川看護学部の人的リソースによる魅力あるオープンキャンパス、個別見学会等を企画・運営し、参加高校生の満足度を向上させる。 **「計画達成のための方策」** 1. 学生募集部と協働し、広報企画参加者の満足度とニーズに関する量的、質的データを収集できるアンケートを作成し、実施する。	Ⅳ	1. 広報イベントの実施状況 全広報イベント参加者合計：753組（約1520名） 1）参加者授業体験型オープンキャンパス 目的：参加者が在校生、教員、授業などに直接触れ、本学部を良く知るための学部紹介 計3回 609組（約1220名） 参加者満足度 80% ①3月115組 ②6月189組 ③8月307組 2）入試説明会 目的：詳しい入試情報を得たい高校生への情報の提供 計2回130組（約260名） 参加者満足度 80% ① 9月 総合型選抜対象 84組 ②10月 学校推薦型選抜対象 46組 3）WEB入試説明会 全学合同の学部紹介 参加者満足度 未調査 ①2023年12月18日～2024年2月28日 約190名閲覧 4）学科説明会の回数と参加組数 OCを要約した形の短時間の学部紹介で、個別見学会の規模を拡大して開催。 参加者満足度 80% ① 6月 教員対象 16名 ②11月 一般公募受験者対象 15組（約30名） ③12月 一般公募受験者対象 15組（約30名） 5） 出張講座（高校からの要請に基づく看護職と学部の紹介）の実施校 ただし、参加者満足度は未調査 ①埼玉県立松山女子高等学校（7/13） ②東京都立松が谷高等学校（10/26） ③都立府中高校（12/19）	**【年度計画14-6】** 1. 来校型・WEB型による、オープン・ミニオープンキャンパスの開催。 ・オープン・ミニオープンキャンパスの開催数。3回 ・オープン・ミニオープンキャンパス参加者。満足度80%以上	Ⅳ	1. 広報イベント実施状況 1）来校型オープンキャンパス ①参加者授業体験型オープンキャンパス 目的：入試に関する最新情報の提供及び参加者が授業などに触れながら本学部を知ってもらう 計3回（6月183組 8月426組 3月76名） 参加者計約1294名 参加者満足度：87%(6月) 87.8%(8月) 92%(3月) 時期の対象者に合わせたイベントや模擬授業を行った。参加者のアンケート評価はおおむね好意的な結果である。				
2. 広報企画参加者アンケートの結果を検討して次のオープンキャンパス、ミニオープンキャンパス、個別見学会、入試説明会、大学案内パンフレットなどの内容を検討する。	Ⅳ	2. 広報イベントへの在学生の年間協力数 1年生：8名、2年生：8名、3年生：21名、4年生：27名	2. 来校型による、個別見学会の開催。 ・個別見学会の開催数。3回以上 ・個別見学会の参加者。満足度80%以上	Ⅳ	2. 入試相談会（個別見学会：名称変更のため入試相談会） 目的：6月、8月のオープンキャンパス等に出席できなかった高校生向けに実施 参加者：11月並びに12月に実施しのべ22組（約44名） 参加者満足度：80%以上				
3. 在校生、教員、事務部職員などの人的リソースを活用した、参加者に近い感覚の学生メッセージ、学生と両親が関心を持てる学部紹介とキャンパスツアー、大学の授業内容に触れる学科企画プログラム、模擬講義、学生や教員によるフランクで楽しい各種プレゼンテーションなどを企画運営する。	Ⅳ	3. 広報イベントの成果 参加者アンケートから満足度は非常に高いことが把握された。特に本学部の状況を在校生から直接説明を受け、相談できたことが本学部の状況を把握するうえで、大変良かったという意見が多かった。これらのことから広報イベントは大きな成果を上げ、下記の結果を得ていると判断する。 1） 総合型選抜の受験者の広報事業参加率 2023年 受験者数88名中86名参加 98% 2） 学校推薦型推薦選抜の受験者の広報事業参加率 ①公募制 2023年 受験者数50名中48名参加 96% 2022年 受験者数50名中43名参加 86% ②指定校 2023年 受験者数25名中23名参加 92% 2022年 受験者数23名中22名参加 96%	3. 来校型・WEB型による、入試説明会の実施。 ・入試説明会開催数3回以上 ・入試説明会参加者。満足度80%以上	Ⅳ	3. 入試説明会 1）来校型 目的：総合型選抜、学校推薦型選抜入試情報を得たい受験生への情報提供総合方選抜対象 参加者：99組（約198名）参加者満足度：80% 2）WEB型 目的：一般選抜受験を希望する高校生を対象としてWEBで実施した。 参加者：閲覧数190人				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
			4. 出張講座の実施。 ・出張講座開催数。1回以上 ・出張講座参加者。満足度80%	Ⅲ	4. 3校を訪問し、計約110名の高校生に出張講義を行った。満足度については未集計ではあるが、好評であった。				
「評価指標」 ・来校型・WEB型による、オープン・ミニオープンキャンパスの開催状況 ・来校型による、個別見学会の開催状況 ・来校型・WEB型による入試説明会の実施状況 ・出張講座の実施状況			**「評価指標」** ・来校型・WEB型による、オープン・ミニオープンキャンパスの開催状況 ・来校型による、個別見学会の開催状況 ・来校型・WEB型による入試説明会の実施状況 ・出張講座の実施状況						
【計画14-7】㋐ 学生・教職員の研究推進のため、図書室の利用促進を図る。									
「計画達成のための方策」 図書室の申し込みの手続きを利用者の利便性に配慮して、簡便な方法に改善するとともに、文献利用を促すためのPRを定期的に発信する。また積極的な利用を推進するため、利用者の関心が高まるような新刊図書のPRを行うとともに、文献貸出を促すためのPRを定期的に発信する。	Ⅰ	1. ILL申込人数は、3月～2月で52件であった。文献のオンライン化（無料PDF公開を含む）が進んでいるため、ILLの申し込みが減少していることが考えられる。実際に、申し込みのあった約半数の文献が無料PDF公開で入手可能であったためキャンセル扱いになっている。よって、年度計画を一度見直す必要があるかもしれない。	**【年度計画14-7】** 1. ILL申し込み人数が令和3年度前期は67件（2～29件/月）を1.3倍の87件を目指し、年間174件をめざす。	Ⅱ	1. ILL申し込み人数は前期49件、年間99件であった。文献のオンライン化も進み、申し込みがキャンセルされることもある為ILL申し込み人数については伸び悩んではいるが、昨年度より申し込みが増加傾向にあるため、引き続き動向を見ていく必要がある。				
「評価指標」 ・ILL申し込み人数の状況 ・立川図書館の貸し出し状況	Ⅲ	2. 貸し出し冊数は、4月～2月で3567件であり、ほぼ目標数に達していた。	2. 立川図書館の貸し出し冊数（図書および雑誌）は令和2年度3,523冊であり、令和3年度より5%増の3,699冊（176増）をめざす。	Ⅱ	2. 図書、雑誌の貸し出し冊数はあわせて年間2321件であった。目標には届かなかった。理由として、図書、雑誌のオンライン化も進んでいるため、伸び悩んでいると考えられる。				
			「評価指標」 ・ILL申し込み人数の状況 ・立川図書館の貸し出し状況						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
○千葉看護学部 **【計画15-1】** 未来に向けた主体性を涵養する教育を推進する。 **「計画達成のための方策」** 1.主体的に学修できる仕組みと環境を整備する。 ⑴ 学生がビジョンに照らして自己評価できるプログラムとしてポートフォリオを導入し、効果的に運用されるよう仕組みを整備する。	Ⅲ	1.(1) ・学修ポートフォリオの運用に関して教務委員会で検討後、申し合わせについて学修支援員会でも検討を行った。両委員会が共同し、運用申し合わせを作成した（運用検討会議各委員会が１回ずつ開催）。ポートフォリオに関する学年別ガイダンスを2024年2月および3月に計2回行い、1～3年生の各学年複数名の学生が入力を試みた（正確な人数は、システム上教員が把握できず）。令和6年度は評価指標を再検討し、活用を促進する。	**【年度計画15-1】** 1.主体的に学修できる仕組みと環境を整備する。 ⑴①LMSを用いた学修ポートフォリオの利用を拡大する。 ②学生に対して定期的にガイダンスを実施し、具体的な履修につながるようにする。	Ⅲ	1(1) ・ポートフォリオシステムの実質運用に関する評価改善会議としては開催せず、定期教務委員会で2回以上の利用拡大につながるガイダンスの検討を行った。 ・ポートフォリオに関する学年別ガイダンスを計4回（前期および後期に各2回）行った。 ・ポートフォリオの記載人数は今年度把握できなかったので、次年度に調査を行う。				
「評価指標」 ・ポートフォリオシステムの整備状況、学年別ガイダンスの実施状況、ビジョンについてのポートフォリオの記録回数・実施人数			**「評価指標」** ・ポートフォリオシステムの実質運用に関する評価改善会議（2回）、ポートフォリオに関する学年別ガイダンスの実施（4回）、ポートフォリオへの記載人数（8割以上/学年）						
⑵ 早期から看護職としての意識を高めるため、1年前期から看護の現場での演習を実施すると共に、授業内外で、看護職や人々の健康に関する講演会・イベント等の参加機会を提供するなど、アーリー・エクスポージャーのプログラムを行う。	Ⅳ	1.(2) ・学外の看護・医療保健福祉関係者等による授業は、各学年複数回行われた。 ・看護学概論の授業評価は、肯定的評価が7割以上であった。 ・授業外での看護・医療保健福祉関係者等による講演会・イベント等は、1回以上行われた。本学非常勤教員の看護倫理に関するトークイベントには、1年生が複数名参加した。また、3月24日に開催した地域交流イベントにおける船橋中央病院の医療従事者による講演会には、5名以上の学生が参加し、学生ボランティアは40名以上が参加した。	⑵①講演会やイベント、ボランティア募集に関して定期的に情報提供を行う。 ②外部の保健医療福祉関係者の授業の実施状況（特に低学年）を確認し、次年度に反映させる。 ③前年度の評価を受け、①を活用しながら、改善計画を立案する。評価調査の対象として学外の授業関係者からも聴取を行う。	Ⅳ	1(2) ・学外（船橋市）の看護・医療保健福祉関係者等による授業は、各学年複数回行われた。 ・看護学概論の授業評価では、4月早々の初回授業において、既存の動画を教材とし、人々の健康に関心を寄せる機会を提供し、6月上旬の学外演習を通じ、9割の学生が到達目標を達成できたと評価した。 ・授業外での看護・医療保健福祉関係者等による講演会・イベント等は、ふなばし健康まつり、まなフェス、八木が谷地区社会福祉協議会福祉まつりなど5回以上行われた。 ・3月9日開催の地域交流イベントにおいて、学生ボランティアは78名参加し、船橋中央病院の医療従事者による公開講座には、5名以上の学生が参加した。				
「評価指標」 ・学外の看護・医療保健福祉関係者等による授業回数、看護学概論の授業評価、授業外での看護・医療保健福祉関係者等による講演会・イベント等の案内回数、参加人数、学生ボランティアの割合、情報提供の頻度			**「評価指標」** ・学外の看護・医療保健福祉関係者等による授業回数（1回/各学年）、看護学概論の授業評価（肯定的評価が7割以上）、授業外での看護・医療保健福祉関係者等による講演会・イベント等の案内回数（1回）・参加人数（5人/回）、学生ボランティアの割合（5人/回）、情報提供の頻度（3回） ・学外の授業関係者からの聴取（1回）						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
⑶ 自ら学修に取り組む意義と方法との獲得をめざして、主体的な学修資源としての、図書館利用の促進、スタディスキルズに関する教材の提供、国家試験合格に向けて計画的・主体的に取り組むことが出来るような低学年時からのガイダンスや学修環境整備を行う。 **「評価指標」** ・図書館入館数、貸出数、スタディスキルズに関する教材の視聴率、国家試験合格への取り組みの実施状況及び対策参加状況	Ⅳ	1.(3) ・入館延べ人数は前年比130%、学部学生・大学院生の資料貸出延べ数は前年比110%であった。（2月末時点の比較） ・学部4年生科目「看護研究」の希望領域を対象に、図書館司書の協力により、文献検索ガイダンスを実施、大学院生向けにも同様の動画視聴の機会を設けた。 ・国家試験対策支援として、模試、ガイダンス、有料講座等を実施した。 【模試】 　2年生：2回実施し、全学生102人が受験した。 　3年生：2回実施し、全学生115人が受験した。 　4年生：保健師模試も含め8回実施し、対象学生全員105人、20人が受験した。 【ガイダンス】 　2年生：3回実施した。学修方法や国家試験理解の促進、模試の振り返りを行った 　3年生：3回実施した。模試の振り返りや学修方法を行った。 　4年生は、6回実施した。 　模試、ガイダンスの他に、4年生には有料講座を実施し、105人が受講した。	⑶①～④前年度の点検評価を行い主体的な学修を支援する環境整備の視点から改善点を提案する。 **「評価指標」** ・附属船橋図書館の入館者数、貸出件数が、前年度より増加する ・国家試験対策支援への参加者数増加状況	Ⅳ	1.(3) ・国家試験対策支援として、模試、ガイダンス、有料講座等を実施した。 【模試】 　2年生：2回実施し、131人が受験した。 　3年生：1回実施し、100人が受験した。 　4年生：保健師模試も含め8回実施し、対象学生114人、20人が受験した。 【ガイダンス】 　2年生：3回実施した。学修方法や国家試験理解の促進、模試の振り返りを行った 　3年生：3回実施した。模試の振り返りや学修方法を行った。 　4年生は、6回実施した。模試、ガイダンスの他に、4年生には有料講座を実施し、希望学生が国家試験合格に向けた勉強を進められるように環境を整えた。 ・スタディ・スキルズに関する動画を主に1年生を対象に配信し、学生が視聴できるように整え、視聴率はスタディ・スキルズⅠ75.8%、スタディ・スキルズⅡは32.3%であった。 ・国家試験対策支援への参加は4年生100人（96.1%）が参加した。				
2.入学試験合格者に対する学修支援を入学前に開始する。 入学前からの学修に対する主体性涵養をめざし、主として推薦試験による入学生を対象に、入学前準備プログラムを構築・実施する。 **「評価指標」** ・入学前準備プロジェクトの参加者数、参加者への入学後アンケート調査結果、入学後の学業成績の分析結果状況	Ⅳ	2.11月25日（土）に総合型選抜地域指定（千葉）の入学予定者向けに「千葉での実習を知ろう」をテーマに、本学部で行われる千葉県内フィールドに焦点をあてた4年生4名との交流会を実施し、対象者16名中14名の参加を得た。 ・2月23日（金）に総合型選抜地域指定（千葉）および学校推薦型の入学予定者向けに、「大学での学修を知ろう：計画的な学習うと学生交流」を開催した。対象者54名中参加希望者47人で、参加者は44人であった。 ・3月24日（日）千葉看護学部の地域交流イベント企画として、総合型選抜地域指定（千葉）、学校推薦型、一般入試の入学予定者100人を対象に「大学での学修を知ろう　地域交流イベントへの参加と学生交流」を実施した。参加希望者53人で、参加者は49人であった。	2.入学試験合格者に対する学修支援を入学前に開始する。 ①～③前年度と同様 ④一般入学試験合格者に対する入学前プログラムを開始する（一部）。 **「評価指標」** ・令和3年度比、入学前準備プロジェクトの参加者数20%増加 ・前年度比、プログラムに対する肯定的な評価の割合維持・増加	Ⅳ	2.入学前準備プログラムの参加者は、令和3年度66%に比し、令和6年度92%と26%の増加であった。 ・開催後に参加学生を対象としたプログラム参加のアンケートを実施し、開催日時を検討し、令和6年度の参加者数増と、「プログラムへの参加が、あなたの入学後の大学生活に良い影響であったか」に84.1%が良かったと回答した。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
3.学生の主体的に学ぶ意欲と方法の獲得を支援する機会として、授業以外での学修機会の提供や学修活動を支援する。 医療・福祉の現場に関わる機会、健康関連イベントへの参加機会、ボランティア情報の周知及び活動発表やフィードバックを受ける機会の設定を行い、それぞれの学修機会と参加学生を増加させる。 **「評価指標」** ・提供された学修機会の数、学生の参加人数、参加学生からのフィードバックの状況	Ⅳ	3.学生を対象とする調査は実施しなかったが、課外活動の機会として、①医愛祭は2日間で17人、②地域交流イベントへの参加者は74人、③ふなばし健康まつりボランティアでの参加は32人、「からだのお話し会企画」運営は7人、④市川市マナフェスへのボランティア参加は40人、「からだのお話し会企画」は7人、⑤認知症サポーター養成講座学内開催の参加者は14人であった。	3.学生の主体的に学ぶ意欲と方法の獲得を支援する機会として、授業以外での学修機会の提供や学修活動を支援する。 ①授業以外の学修機会に関する情報提供と参加支援を行う（医療・福祉現場での活動、健康関連イベント、ボランティア活動、等） ②上記参加後の活動発表やフィードバックを提供する機会を設定する。 **「評価指標」** ・令和3年度比、提供された学修機会と参加学生の数10%増加 ・前年度比、活動参加に対する肯定的な評価の割合増加	Ⅲ	3.授業以外での学修機会の提供や学修活動の支援として、令和6年度の取り組みは以下の通り、学修機会は、前年度と同程度であったが、新たな機会が3回（八木が地区社会福祉協議会福祉まつり、JCHO船場祭中央病院での病院前救護所訓練、ママとベビーのためのリラクゼーションプログラム）増えた。全参加人数は、前年度合計191人に対し、185人とほぼ当程度であった。 ・医愛祭は、2日間で、15人が参加した。 ・ふなばし健康まつりについて情報提供を行い、学生23人がボランティア参加した。参加後のアンケート調査（n=15）で8割の学生が来年も参加したいと回答し、その理由として、地域の沢山の方との交流、健康に関する知識や思考の深化、地域についての知識が深まった、などの意見が聞かれた。 ・地域交流イベントについて情報提供を行い、学生78人がボランティア参加した。参加後のアンケート調査（n=33）で約9割の学生が来年も参加したいと回答し、その理由として、地域の人との交流、達成感、などであった。 ・八木が谷地区社会福祉協議会福祉まつりについて情報提供を行い、学生11名が参加した。当日は八木が谷地区社会福祉協議会より表彰状が授与された。 ・まなフェス（市川）について情報提供を行い、学生50名が参加した。 ・JCHO船橋中央病院での病院前救護所訓練について情報提供を行い、学生6名が参加した。終了後学生から、実際に近くでトリアージの様子などを見たのは初めてであり勉強になった、医師や看護部長からの説明が分かりやすくまた参加したい、などの感想が聞かれた。 ・「ママとベビーのためのリラクゼーションプログラム@THCUC」を実施し、学生2名がボランティアとして参加した。乳児との関わりや母親の育児不安、コミュニティ支援について学ぶ機会となり、終了後に学生から、実際の母子支援の現場に触れることができ貴重な経験だった、育児支援の重要性を実感した、との感想が得られた。 .学生の主体的に学ぶ意欲と方法の獲得を支援する機会として授業以外での学修機会の提供や学修活動の支援を、来年度も継続していく。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画15-2】 学生主体の教育における多様性に対応した教育を推進する。									
「計画達成のための方策」 1. 多様な教育ニーズに対応する。 学生の能動的な学修を促すために必要な資機材の整備を行うとともに、教育内容や方法を教員間で共有しアクティブラーニングを推進する。その場合、fGPAなども活用し常勤教員が担当する講義・演習科目を中心に、基礎及び発展的な内容の提示や習熟度別クラスの導入等を行うことにより、授業形態に関わらず、全科目で双方向性の担保と学生の授業参加を促す。	Ⅲ	1. 常勤教員の担当科目では、ほぼ全科目ICTを活用している。全開講科目のうち93科目（75.7%）でアクティブラーニングを取り入れたている。 ・若手教員が大阪大学の授業設計に関するオンデマンド研修を受講したり、関心のある所属領域以外の授業を見学し、その成果を発表会で共有した。	**【年度計画15-2】** 1. 多様な教育ニーズに対応する。 ①授業の目標を達成できる各種の授業方法を取り入れ、学生の理解を把握し成果を評価する。 ②学生の反応を確認しながら、DXを活用したアクティブラーニングを積極的に導入する。 ③上記の他、各科目において、学生のニーズを把握し可能な範囲で対応する。	Ⅳ	1. 常勤教員の担当科目では、全科目ICTを活用しており、このうち令和6年度の常勤教員への調査（56科目）では、DXを活用したアクティブラーニングは、37科目（66.1%）、習熟度別クラスは、12科目（21.4%）で実施している。 ・若手教員の大阪大学の授業設計に関するオンデマンド研修の受講を継続して実施した。 ・3月の活動実績報告会、質疑応答 ・すでに、常勤教員においてはアクティブラーニングは取り入れられているため、目標を達成していると評価する。				
「評価指標」 ・ICT活用科目数、アクティブ・ラーニングを取り入れた科目数、各科目での成績評価結果、各科目での学生からのフィードバック、授業評価アンケート結果、教員間での情報共有機会の数			**「評価指標」** ・令和3年度比、ICT活用科目数、アクティブ・ラーニングや習熟度別クラス等の工夫を取り入れた科目数6%増加 ・教員向けに関連する研修の開催状況						
2. 学生等の多様性に対する教職員の理解を促進する。 ⑴ 教職員の多様性への理解を向上させ、多様性に配慮した授業運営を行う。 ⑵ 教職員に対し、多様性に関する研修や情報共有の機会を定期的に設ける。	Ⅳ	2. カリキュラムプロジェクトとFD担当の共催によるFD研修会を8月17日および3月14日に実施し、カリキュラム改正について検討するとともに、学生の多様性への理解を深めるとともに情報を共有した。	2. 学生等の多様性に対する教職員の理解を促進する。 学生等の多様性をテーマとした教職員研修、カリキュラム評価・授業評価報告において学生の多様性への対応を視点とした評価を実施する。	Ⅳ	2. 学生生活支援委員会主催で、FD（臨地実習における合理的配慮・教育上の配慮が必要な学生の理解）を実施し、常勤教員34名（100%）の教員が出席した。終了後、出席教員へのアンケート調査を行ったところ、「臨地実習における教育上の配慮・合理的配慮」に関する理解が深まり、「支援・調整に必要な視点が広がった」「今後の教育活動に役立てそう」との回答が得られた。特に助教や講師など、臨地実習に直接かかわる教員からこのような回答が多かった。 本学部において、合理的配慮や教育上の調整が必要な学生が増えている。今回のFDにより、教員が合理的配慮や教育上の調整に関するスキルを実践現場でより活かすことができるようになり、今後のより一層の教育の質向上にもつながると考えられる。				
「評価指標」 ・多様性に関する研修・情報共有機会の数、教員へのフィードバック調査の結果、授業評価アンケート結果			**「評価指標」** ・令和3年度から継続して多様性に関する研修・情報共有機会の提供状況						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画15-3】 第2期中期目標・計画における教育の評価を行い、DP及び社会ニーズの変化に応じたカリキュラムへの改定を行う。 **「計画達成のための方策」** 教育活動と成果の点検評価及び改善活動を行う。 学生からの授業評価並びにそれに対する教員の自己評価、各会議での検討等に基づき、大学院DPに照らした点検評価を行い、CP、APおよびDPの改定に向けた準備を行う。 **「評価指標」** ・検討会の開催回数、成果物としての新カリキュラムの有無と内容	Ⅲ	1.①～④令和4年度のカリキュラム評価プロジェクトをカリキュラムプロジェクトとして発展継続し、実習前OSCE、実習前CBTの導入を視野に入れた改正カリキュラムの実現に向けた検討を開始し、8月および3月に全学部教員対象のFD企画を行い、文部科学省の看護学教育・モデル・コア・カリキュラム改正ならびに実習提携関係にあるJCHO船橋中央病院の移転を視野にいれたカリキュラム改正の準備に着手した。 ・年度末資料を加えたDP達成状況の評価から、教務委員会主導で、看護管理に焦点をあてた統合実習を2025年度より看護学全体の学びを統合する実習へと変更することとし、準備を開始した。 ・卒業生とその就職先を対象とした調査は未実施である。 ・3月の全教員対象のFD企画において新カリキュラムに向けての課題を整理した報告文書を提示した。	**【年度計画15-3】** 1.教育活動と成果の点検評価及び改善活動を行う。 ①前年度までの評価をもとに、令和8年度（開設9年目）からの新カリキュラム運用に向けた準備検討会を開催し（年4回）、年度末に新カリ案を策定する。同時にＤＰ、ＡＰ、ＣＰの改定案を策定する。 ②前年度の改善点の検討ら、授業内容や時間割変更で改善可能な点について、改善状況を情報共有し、前年度同様に年度末の資料を加えて、DPの達成状況を含めた点検評価を行う。 ③卒業生とその就職先を対象とした調査を行い、卒業後のニーズからみたカリキュラムおよび教育方法の評価を行う。 ④ＦＤ研修会として、看護学の学士課程のカリキュラム変更とその移行期に行う準備活動ならびに留意する教育的配慮についての研修を行う。 **「評価指標」** ・検討会の開催回数（年2回）、策定された新カリキュラム、改定内容に関する情報交換会の開催（年1回）、改定前に検討により改善された授業が5科目以上	Ⅲ	1.①令和5年度に引き続きカリキュラムプロジェクトを組織し、月1～2回のペースで継続的に計18回の検討を行った。文部科学省の看護学モデルコア・カリキュラム改定作業が並行していたことから、11の資質と能力の内容を確認し現行DPの見直し案の作成を行った。次年度はAP,CPの策定及び実習科目を内容や時期を中心に検討し、令和8年度入学者からの新カリキュラム運用を目指している。この見直しの過程で、現行カリキュラムのうち、4年次の「看護の統合実習」を1領域担当から全領域担当に運用を変更し、あわせて、「協働実践演習」を15コマから8コマに変更する改善を実施した。 ②教務委員会では、昨年度に決定した統合実習と看護研究の運営体制の変更、また協働実践演習についての授業時間の変更などの確認等、令和7年度から実施に向けた準備を行った。変更に伴う学修支援委員会や教務委員会が主導し、授業評価や国家試験対策の評価を踏まえて、解剖学、生理学等の知識の定着を図るためのCBTを作成し1～3年生全員に対して実施した。 ③卒業生とその就職先を対象とした調査は、卒業生とのアクセス方法が確立していないため、未実施である。 ④3月の全教員対象のFD企画において新カリキュラムに向けた新DP案を紹介し、現行の90分の授業時間の延長・短縮に関する意見交換の機会を設けた。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画15-4】㋐ 学生の主体性を涵養する教育を推進する。 **「計画達成のための方策」** 1.教育DX化と並行して、学生が自己の学修活動を記録し振り返ることが可能な仕組みを準備し、年に1回以上、学生自身が学修活動について振り返り、その後の自らの目標について考えることができるよう指導する。	Ⅲ	1.ポートフォリオに関する学年別ガイダンスを2024年2月および3月に計2回行い、1～3年生の各学年複数名の学生が入力した（正確な人数は、システム上教員が把握できず）。 ・次年度は、より、多くの学生が入力するよう推進するとともに、評価指標を再検討する。	**【年度計画15-4】** 1.LMSを用いた学修ポートフォリオの利用を拡大する。	Ⅳ	1.学習活動の記録と目標についての自己評価は、1年生については過半数の学生が記載している。学年により実施の程度には差があるが、ガイダンス毎に活用例を示し、利用を促進していく。				
「評価指標」 ・学修活動の記録と目標についての自己評価を、各学年のほぼすべての学生が実施する（1回/年）			**「評価指標」** ・学修活動の記録と目標についての自己評価を、各学年のほぼすべての学生が実施する（1回/年）						
2.千葉看護学部のビジョンに共鳴する受験生を確保する。学生がビジョンに照らして自己評価できるプログラムを作成し、本学部のビジョンを具現化するために入学前から継続した教育・学生支援を実施する。	Ⅲ	2.a.オープンキャンパスや学部見学会等を計7回実施し、参加者は515名であった（同伴者含まず）。参加者のアンケートからは、本学部のことがよく理解できた、志望校選択に役立ったなどの感想が多数挙がった。 b.学校推薦型の入学予定者の所属高校の校長にも入学前準備プログラムの資料を郵送し、周知を行った。 　また、2023年度入学生で学校推薦型での入学予定者に、入学前準備プログラムの参加可否とその理由についてアンケートを行い、47人より回答を得た。学習計画は35人が作成したがそのうち15人は途中でやめていた。入学前準備プログラムに参加して34人が聞きたいことが聞けたと回答した。さらに、大学からの情報は郵送資料の次に、LINEオープンチャットから得ていたことが分かり、2023年度も高校生が情報にアクセしやすいLINEを利用し、プログラムに関する情報の提供を行った。 c.学修支援委員会にて、各学年ごとにセメスター開始と終了時にガイダンスを行った。 　入学後全学共通のポートフォリオを関連づけられるか再検討し、評価指標を検討する。 d.大学に届く講演会等のお知らせは事務部より掲示してもらったが、各教員のもとに届く講演会やイベント情報を学生に周知するまでには至っていなかった。また、ボランティア募集に関しては、科目の事前学習にしたことで、参加が促進した。	2.a.　受験生対象の学部説明において本学部のビジョンをわかりやすく説明し、参加者の反応を把握し、必要に合わせ改善する。 b.　これまでの入学前準備プログラムを継続しつつ、参加者アンケートにてよりニーズに合うプログラムにする。また、学校選抜型入試での入学予定者及び、その高校（校長）に入学前準備プログラムを周知する。 c.　学生に対して定期的にガイダンスを実施し、具体的な履修につながるようにする。 d.　講演会やイベント、ボランティア募集に関して定期的に情報提供を行う。	Ⅳ	2.a.オープンキャンパスおよび大学説明会・入試相談会を計7回（OC:6/16,8/11,3/12;入試・大学説明会:6/18,9/1,11/25,12/16）実施した。参加人数はオープンキャンパスが55-232組、説明会が11-73組と前年に比べ若干上回り、いずれのイベントも在学生の協力を得て実施し、受験生が在学生と話せたことでの満足感も高かった（直近のイベント（春のOC）で大変満足・満足と答えた者は全体の9割以上）。 b.学校推薦型の入学予定者の所属高校の校長にも入学前準備プログラムの資料を郵送し、周知を行い、1月に開催し、令和6年度は92%の参加が得られた。 c.学修支援委員会にて、各学年ごとにセメスター開始と終了時にガイダンスを行った。 d.大学に届く講演会等のお知らせは事務部より掲示してもらい、各教員のもとに届く講演会やイベント情報は、各教員よりメール等で一斉周知が数回行われた。				
「評価指標」 ・オープンキャンパス実施回数（5回/年）・参加人数（定員8割以上）・参加者アンケート内容、入学前準備プログラムの参加人数(対象者の7割以上）・参加者アンケート内容（肯定的評価が7割以上）、学年別ガイダンスの実施状況（4回/年）、ビジョンについてのポートフォリオの記録回数（1回/年）・実施人数（ほぼ全ての学生）、学生ボランティアの割合（5人/回)、情報提供の頻度（3回/年）			**「評価指標」** ・オープンキャンパス実施回数（5回/年）・参加人数（定員8割以上）・参加者アンケート内容、入学前準備プログラムの参加人数(対象者の7割以上）・参加者アンケート内容（肯定的評価が7割以上）、学年別ガイダンスの実施状況（4回/年）、ビジョンについてのポートフォリオの記録回数（1回/年）・実施人数（ほぼ全ての学生）、学生ボランティアの割合（5人/回)、情報提供の頻度（3回/年）						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
3. 早期から看護職としての意識を高めるため、1年前期から看護の現場での演習を実施すると共に、授業内外で、看護職や人々の健康に関する講演会・イベント等の参加機会を提供するなど、アーリー・エクスポージャーのプログラムを行う。 **「評価指標」** ・学外の看護・医療保健福祉関係者等による授業回数（5回/年）、看護学概論の授業評価（総合評価が4以上）、授業外での看護・医療保健福祉関係者等による講演会・イベント等の案内回数（1回/年）、参加人数（5人/回） **【計画15-5】**㋐ 生涯学習支援を継続する。	Ⅲ	3a. 外部の保健福祉関係者の授業の実施状況（第一回目）アンケートを実施中（集計はこれから）。第二回目のアンケートでは保健医療関係者についてデータ収集を実施する。 c. イベント（ふなばし健康まつり、地域交流イベント、マナフェスの情報提供を行った。また、認知症ケアサポーター養成講座を開催し、12名の学生、2名の教職員の参加があった。 ・次年度は、より体系的に実態を把握できるようなしくみを検討する。	3. a. 外部の保健医療福祉関係者の授業の実施状況（特に低学年）を確認し、次年度に反映させる b. 前年度の改善計画に沿った授業改善を開始する。 c. 講演会やイベント、ボランティア募集に関して定期的に情報提供を行う。 **「評価指標」** ・学外の看護・医療保健福祉関係者等による授業回数（5回/年）、看護学概論の授業評価（総合評価が4以上）、授業外での看護・医療保健福祉関係者等による講演会・イベント等の案内回数（1回/年）、参加人数（5人/回）	Ⅳ	3. a. b. 令和6年度は、体系的実態を把握するために、IR推進担当により、学外の看護・医療保健福祉関係者等による授業回数を調査した結果、以下の通り1年次において、5回の機会を提供していた。 ・「医学・医療概論」（1年次）において、医師による特別講義を1コマ実施し、医療に携わる専門職としての視点を学ぶ講義を実施 ・「医療と人間」（1年次）において、公益社団法人認知症の人と家族の会 東京支部代表による「認知症の人と家族が穏やかに暮らしていくために」と題した講義を実施 ・「看護学概論」（1年次）の見学演習において、看護部長や医療安全・感染対策専従看護師による講義を通じて、看護の専門性や連携の重要性を理解する機会を提供 ・「機能看護学Ⅰ」（1年次）において、現任の看護師を招聘し、看護における自律の重要性等を理解する機会を提供。 c. 授業外での看護・医療保健福祉関係者等による講演会・イベント等の案内回数、参加人数は次の通りであった。 ・ふなばし健康まつりについて情報提供を行い、学生23人がボランティア参加 ・地域交流イベントについて情報提供を行い、学生78人がボランティア参加 ・八木が谷地区社会福祉協議会福祉まつりについて情報提供を行い、学生11名が参加 ・まなフェス（市川）について情報提供を行い、学生50名が参加 ・JCHO船橋中央病院での病院前救護所訓練について情報提供を行い、学生6名が参加 早期から看護職としての意識を高めるため授業内外で看護職や人々の健康に関する講義、講演会・イベント等の参加機会の提供などを実施しており、次年度も継続していく。				
「計画達成のための方策」 1. 学部における生涯学習支援を継続し、これが大学ビジョンに向かうものとなっているかを評価し、改善するためのICTを活用した基盤を整備する。	Ⅲ	1. 当該目標に関する検討会は開催できていないが、将来構想委員会において、卒業生担当を置き、学生生活支援委員会主催で、地域交流イベントと同時開催で、「ホームカミングデイ」を実施した。生涯学習支援の仕組みを検討するために、プロジェクトメンバーの選出し、シミュレーションを用いた生涯学習支援を検討しており、シミュレーション実施教室の環境を整備した。次年度は、「卒業生チャレンジ」（卒業生に声をかけて、DXについての研修を行う企画）を開始する予定である。	**【年度計画15-5】** 1. 前年度と同様。生涯学習支援の参加者からのアンケート結果を分析し、改善策を提案する。	Ⅲ	1. 生涯学修支援の仕組みを含めて活動しているDXプロジェクトにより、10月の学部教員会議ならびに3月の活動報告会において、プロジェクトの進捗および課題を共有した。また、卒業生のフォローアップやキャリアアップを支援するため、VRコンテンツを用いた「卒業生チャレンジ」を2回とニーズ調査を1回実施した。参加者は第1回（10/29実施）6名、第2回（3/9実施）8名であった。参加者の満足度は高いが、卒業生への連絡方法に課題があった。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
「評価指標」 ・当該目標に関する検討会開催回数と参加人数、評価のための仕組み作成状況と実施状況			**「評価指標」** ・当該目標に関する検討会開催回数と参加人数、評価のための仕組み作成状況と実施状況						
2.卒業生を継続してサポートできる仕組みを整備し、学びの機会を提供する。	Ⅲ	2.卒業生の連絡先登録は12月から呼びかけて91.7%であり、さらに早い時期から呼びかける必要性がある。メールマガジンは年2回発行し、発行後にメールアドレス変更を連絡してきた卒業生が数名確認できた。2023年度は初の試みとして、3月の地域交流イベントにてホームカミングデーを開催し、9名が参加した。また、ホームカミングデーにて、アンケートを実施した（9名回収）。参加者を増やすために、卒業生が関心を持つ企画を検討する必要がある。	2.前年度末にとりまとめた改善策を反映した卒業生の連絡先管理および継続教育支援の方法を実践し、年度末に現状と改善策をとりまとめる。	Ⅲ	2.卒業生の連絡先登録は、84.2%であった。メールマガジンでは定期に年2回発行した以外に、DXプロジェクトの卒業生チャレンジや大学院の情報を提供した。 今年度も地域交流イベントにて、ホームカミングデーを開催し、11名が参加した。また、卒業生への情報発信方法として、SNSの導入を検討した。引き続き、卒業生が母校に関心を持ってもらえるようなイベント、情報発信の内容、方法について、検討していくことが必要である。				
「評価指標」 ・卒業生の連絡先を管理する仕組みの作成と登録状況（100%）、年2回のメールマガジンの発行、講演会等の案内回数（年2回）と参加人数（各回50%）			**「評価指標」** ・卒業生の連絡先を管理する仕組みの作成と登録状況（100%）、年2回のメールマガジンの発行、講演会等の案内回数（年2回）と参加人数（各回50%）						
3.実習指導者講習会およびフォローアップ研修会、受講施設管理者を対象とした研修・情報交換を開催し、千葉県内の実習指導者育成と質の向上に貢献する。	Ⅳ	3.実習指導者講習会参加人数は30日間コースは定員40名のところ49名の受講（募集定員の123%）となり、目標を達成することができた。ただし、7日間コースについては40名定員のところ受講者は24名（募集定員の60%）と、目標を大幅に下回っている。ただ、昨年度よりは増えているため、今後さらなる受講者の増加のための取り組みを行っていく。フォローアップ研修については対面で実施したものの、34名が参加（69.4%）し、目標はt達成できたと考える。なお、上記3研修ともに終了時の受講生アンケートでは、満足度したとの回答がおおむね90%を超え、100%を達成する項目も多数存在しており研修内容の担保については今年度も目標を達成したものと考えられる。	3.事務部と連携し、実習指導者講習会、フォローアップ研修、受講施設管理者を対象とした研修・情報交換を企画・周知・実施し、実績と改善策を取りまとめる。	Ⅳ	3.実習指導者講習会参加人数は30日間コースは定員40名のところ58名の受講（募集定員の145%）となり、目標を達成することができた。7日間コースについては40名定員のところ受講者は33名（募集定員の82.5%）と、目標を下回っている。しかし、昨年度よりは9名増加し、開講以来、受講者の増加は継続している。30日間コースの修了生を対象としたフォローアップ研修について、33名が参加し、目標は達成できたと考える。なお、上記3研修ともに終了時の受講生アンケートでは、前年度同様に高い満足度を維持しており、今後も継続して質の高い研修を提供していくことが地域から求められていると考えられる。				
「評価指標」 ・実習指導者講習会参加人数（募集定員の120%）、修了時の満足度（70%以上）、フォローアップ研修の参加人数（50%以上）、受講施設管理者を対象とした研修・情報交換の参加人数、自施設の実習指導の質向上についての評価			**「評価指標」** ・実習指導者講習会参加人数（募集定員の120%）、修了時の満足度（70%以上）、フォローアップ研修の参加人数（50%以上）、受講施設管理者を対象とした研修・情報交換の参加人数、自施設の実習指導の質向上についての評価						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
4.主として千葉県北西部及びJCHOの看護・介護職者等に向けた生涯学習機会を提供する。 **「評価指標」** ・千葉県内及びJCHOからの講師依頼内容・件数、本学部主催または共催（有志含む）による研修会等の開催回数・参加者、満足度	Ⅳ	4.実習指導者講習会やJCHO病院との会議等の機会に、教員の研究内容、講演できる内容等の周知を行った。 学習機会の提供に関する今年度の実績は次のようである。 ◎周辺地域機関からの依頼 〇千葉県看護協会：「千葉県看護研究学会研究相談員」「看護管理ビギナー研修」「認定看護管理者教育課程ファーストレベル」「認定看護管理者教育課程セカンドレベル」3件 〇千葉県がんのリハビリテーション研修会実行委員会：「がんリハビリテーション研修会」 〇海神在宅看護支援センター：「都疎浜地区自治会活き生きくらぶ：体力測定・講師」 〇板倉病院：「こども食堂」 〇船橋市：「ふなばし健康まつり」 〇市川市：「マナフェス」 〇東京都訪問看護ステーション協会：「訪問看護実習指導者研修」 〇特別区男女共同参画センター：「地域連携研修、困難事例スーパーヴァイズ」 ◎JCHOからの依頼 〇JCHO本部：「認定看護管理者研修サードレベル」「認定看護管理者研修セカンドレベル」4件「JCCHO保健師助産師看護師実習指導者講習会」6件 〇JCHO船橋中央病院からの講演等依頼 「新卒看護職員研修」「ラダーⅢ研修」「看護研究支援」 〇JCHO東京山手メディカルセンター：「看護研究の講義と研究指導」 〇JCHO埼玉メディカルセンター：「看護研究指導」 〇JCHO東京山手メディカルセンター：「看護研究指導」「看護研究発表会講評」 ◎大学が企画した地域住民・専門職者を対象とした勉強会等 〇令和5年度東京医療保健大学千葉看護学研究科・和歌山看護学研究科共催公開講座	4.実習指導者講習会やJCHO本部・各病院に対して、教員の研究内容、講演できる内容などを周知する。研修会や講師依頼などの実績を年度末に取りまとめる。 **「評価指標」** ・千葉県内及びJCHOからの講師依頼内容・件数、本学部主催または共催（有志含む）による研修会等の開催回数・参加者、満足度	Ⅳ	4.令和6年度の実績は次の通りである。 ◎周辺地域機関からの依頼 ・千葉県看護協会：「認定看護管理者教育課程セカンドレベル」講師依頼（2件）があった。 ・千葉県看護研究学会：研究支援コーナーの相談員として、県内の病院看護師の研修相談に応じた。 ◎JCHOからの依頼 ・「JCHO保健師助産師看護師実習指導者講習会」講師（看護学における学修評価の方法、フィードバック演習等）6件 ・「認定看護管理者研修セカンドレベル」講師 ・JCHO船橋中央病院での看護研究支援：JCHO船橋中央病院の看護師を対象に、看護研究支援を月１回の頻度で実施。 ◎大学が企画した地域住民・専門職者を対象とした勉強会等 ・東京医療保健大学千葉看護学部「基礎看護援助方法Ⅳ」授業見学会：JCHO東京山手メディカルセンターに勤務する看護師8名を対象に、「基礎看護援助方法Ⅳ」の授業を見学いただいた。見学後の自由記載アンケートでは、実習に来る前にどのような学修をしているかを知ることができた、学生がどのような学び方をしているのか見学できて学びになった等、高評価を得た。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画15-6】㋐ 教員の研究力の向上を図る。									
「計画達成のための方策」 1.教員の研究活動の情報交換会を定期的に継続する。 **「評価指標」** ・情報交換会の開催回数（1回／年以上）	Ⅳ	1.3月13日に実施した学部活動報告会において、教員の研究活動・社会活動に関するポスター展示及び情報交換会を実施した。	**【年度計画15-6】** 1.定期FD研修やイブニングセミナーで教員の研究活動について情報共有を行う。 **「評価指標」** ・情報交換会の開催回数（1回／年以上）	Ⅳ	1.3月13日に実施した学部活動報告会において、教員の研究活動・社会活動に関するポスター展示及び情報交換会を実施した。 令和7年度の定期FD研修等では、研究活動に関する内容に取り組んでいく。				
2.学会（国際・国内）で、研究成果を発表を促進し、発表する。 **「評価指標」** ・国際学会参加人数（1人／年以上）、国際学会発表者人数（1人／年以上）、国内学会発表者割合（年間7割）	Ⅳ	2.国際学会参加人数：8人 国際学会発表人数：6人 国内学会参加人数：34人 国内学会発表人数：22人/36人（61.1%） 学部活動報告会で情報共有を実施した。	2.年度末の学部活動報告会で国際学会及び学内学会で発表した教員について情報共有を行う。 **「評価指標」** ・国際学会参加人数（1人／年以上）、国際学会発表者人数（1人／年以上）、国内学会発表者割合（年間7割）	Ⅳ	2.国際学会参加人数：8人 国際学会発表人数：8人(10件) 国内学会発表人数：21人(53件)/34人（61.8%）				
3.研究成果を査読のあるジャーナルへの投稿を促進し、採択される（共同執筆含）。 **「評価指標」** ・採択者人数、採択者割合（国際・国内、年間で全教員数のうち4割以上）	Ⅳ	3.論文（国内）採択人数：17人28件 論文（海外）採択人数：6人11件 国内・海外のいずれかに採択された人数：17人/36人（47.2%） 学部活動報告会で情報共有を実施した。	3.年度末の学部活動報告会で論文採択された教員について情報共有を行う。 **「評価指標」** ・採択者人数、採択者割合（国際・国内、年間で全教員数のうち4割以上）	Ⅳ	3.論文（国内）採択人数：18人(30件) 論文（海外）採択人数：3人(6件) 国内・海外のいずれかに採択された人数：18人/34人（52.9%） 学部活動報告会で情報共有を実施した。				
○和歌山看護学部 **【計画16-1】**㋐ 「大学での主体的な学び方の体得」及び「地域を理解する科目の充実」、「地域への愛着形成の支援」を図る。									
「計画達成のための方策」 1.主体的な学習に取り組めるために必要なカリキュラムと機会を充実する。 2.入学初期に主体的な学び方に関する科目と地域への関心を高めるための科目を設定する。	Ⅳ	1.大学での学び方を内容としたアカデミックスキル、これからのキャリアを考えていくためにキャリア教育Ⅰ～Ⅲ、それを支える情報に関する科目や論理的表現法も設置している。 2.地域への関心を高める科目としてわかやま学（講義）とわかやま生活健康探索実習（実習）を設定している。 内容・実施状況、参加状況を以下の方法で得た。 ・わかやま学では、受講学生がレスポンスカードを作成。 ・わかやま生活健康探索実習では、最終日のまとめの機会に、実習での学びを記載。 ・欠席者以外、9割以上が提出し、内容を質的に分析を行った。 ・わかやま学での発表会、和歌山生活健康探索実習での実習報告会にて、学生が得たことを表現できる機会となっていた。	**【年度計画16-1】** 1.「大学での主体的な学び方の体得」、「地域を理解する科目の充実」に関する科目の実施・評価する。 2.先輩学生からの学習経験をもとに、学習計画を立て実行する。	Ⅲ	1.初年次教育において、「アカデミック・スキル」「わかやま学」を設定し、複数科目で高校から大学教育への円滑な意識の転換と能動的な学習方法を身につけ、専門教育における自主的・主体的な学習への移行を目指した取り組みを行った。また、非常勤講師担当科目である「体の仕組みと働き」、「治療学総論」、「疾病治療論」の講義内容、試験問題内容等について、学生の主体的な学びの促進のために学部教員が支援を行い、教育目標の共有のために日赤和歌山医療センターとの合同教育会議を2回実施した。 今年度も授業科目「わかやま学」の担当教員を中心に目標達成ができた。学生の状況は、科目発表会・報告会の機会以外にも、授業ふりかえり内容や授業内容からも把握し、学生が「わかやま」を捉え、課題を検討しやすい学修環境を調整した。 2.先輩学生の取り組みの成果を受けて、学生に「予習シート」、「目標設定シート」を配布し、主体的な学びが行えるように支援を実施した。				
3.卒業後も学び続けるための支援体制を構築する。			3.主体的な国家試験への取り組みへの支援を行う。		3.国試対策　各学年の国家試験対策スケジュールに沿って担当者を決定し、計画通り模擬試験や対策講座の企画、運営を行うことができた。ほぼ100%の学生参加であった。模擬試験ごとに試験結果をアドバイザーと共有し、定期的にアドバイザー連携会議を実施して、支援が必要な学生の共有や学習支援を依頼した。				
			4.実習指導者との相互理解により学生の主体的な学びをサポートする。		4.令和6年度実習協議会を開催し、22施設から51名の参加があり、実習報告及び意見交換を行い連携をはかった。				
			5.学生の学びにタイムリーな図書の紹介をし、利用を促進する。		5.図書館入館者数：1日平均91名（目標値：90名）学生への貸出し延べ冊数：5809冊（目標値：2500冊）で目標値を達成した。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
「評価指標」 ・カリキュラム実施状況 ・愛着の程度を把握			**「評価指標」** ・科目への参加度100% ・愛着形成を自由記述から抽出 ・国家試験対策講座・模擬試験 学生100%参加 ・図書館入館者数1日平均90名、延べ冊数2500冊 ・実習指導者連絡会の開催と指導者及び学生からの評価						
【計画16-2】㋐ 「ボランティア活動の体系化」、「地域の看護教育ボランティアからの学びの推進」及び「関連団体と連携した社会的要請への対応」を図る。 **「計画達成のための方策」** 1.地域へのボランティア活動の推進と、地域住民の看護教育へのボランティア参加を進める。	Ⅳ	1.2023年度ボランティア活動の報告件数は、延べ人数252名、活動団体数は54種類であった（2024. 2月末地点）。 ・ボランティア論履修生は92名、ボランティア活動履修生は85名であり、選択科目となっているものの、9割の学生が履修出来ていることから、学生の関心が高いことも伺える。 ・ボランティア活動届については、デスクネッツ回覧レポートを通して記載提出できる体制を作り、ほとんどの学生がweb上で提出できているため継続していく。 ・和歌山市ボランティア保険は大学として学生全員加入出来ており、WILLへの加入に加え、安全なボランティア活動のためのサポート体制は取れている。 ・地域の看護教育ボランティアからの教育支援については、4つの看護学領域が必要な内容とボランティアの参加を得て、教育を実施している。年2回の教育ボランティア集いの会を催し、成果の発表や意見交換を行っている。	**【年度計画16-2】** 1.ボランティア活動を体系化し試行的に運用する。	Ⅳ	1.2024年度ボランティア活動の報告件数は、延べ人数295名、活動団体数は60種類であった。同時期の2023年度は延べ参加学生数252人、活動件数54件であったことと比較すると、継続して活動ができている。 2024年度　ボランティア論履修生は92名、ボランティア活動履修生は92名（2023年度　ボランティア論履修生は92名、ボランティア活動履修生は85名）であり、2022年度よりボランティア論は選択科目となっているものの、9割の学生が履修出来ていることから、学生の関心が高いことも伺える。 看護教育ボランティア登録数　28名（2025年4月現在） 活動での取り組み 1)4月：老年看護学概論」～高齢者との対話～（看護教育ボランティア７名） 2)7月：「コミュニケーション実習」基礎看護学実習Ⅰ学内実習（看護教育ボランティア20名） 3）和歌山県コンソーシアム学生共同研究に対する協力（看護教育ボランティア6名） 4)第5回看護教育ボランティア集いの会(3月)「看護のたまご保健室」（看護教育ボランティア9名） 今年度卒業生による血圧測定等の簡単な健康チェックを行い、その後意見交換を実施した。 医愛祭や公開講座のお知らせも行い、本学の教育活動に関心を持ってもらえるようにした。看護教育ボランティアの集いの会では、成長した卒業生の姿を間近で見てもらったことで、教育活動への参加の意義ややりがいの一端を感じていただけた。				
2.赤十字活動を中心とした活動を活発化する。 **［評価指標］** ・ボランティア活動状況、教育ボランティア参加状況	Ⅳ	2.学生赤十字奉仕団は、現在1年生19名、2年生7名、3年生5名、4年生5名の計36名となっている。現在日本赤十字社和歌山県支部主催の活動に参加したり、自分達で企画した学内演習、市民図書館でのイベント企画と運営等、教員のサポートのもと活動できている。医愛祭で献血バスでの学生の献血活動を実施した。 　和歌山県学生献血推進協議会（以後、学推）には、これまで、都合のあう人が随時活動に参加している状況であったが、今年、本学は、学推の副委員長校となった。活動があれば、ボランティアサークルメンバーと赤十字奉仕団メンバーに情報がいきわたる仕組みを作っている。	2.赤十字活動参加学生と活動数を増加させる。 **［評価指標］** ・赤十字奉仕団35名 ・ボランティア活動延べ人数200名	Ⅳ	2.2022年に発足した東京医療保健大学和歌山看護学部学生赤十字奉仕団は、現在1年生18名、2年生14名、3年生9名、4年生4名の計45名となっている。現在日本赤十字社和歌山県支部主催の研修や訓練への参加、医愛祭での防災コーナーの企画や献血活動を行えた。また、一部の学生は、県内外での学生献血推進協議会の活動にも精力的に参加できている。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画16-3】㋐ 異文化理解や語学力、コミュニケーション能力を習得させ、豊かな教養のもとに多様な価値観に対応できる医療人の育成を図る。									
「計画達成のための方策」 1. 海外研修及び海外からの研修生の受け入れ、近隣地域で生活する多国籍の方との交流の機会をつくる。	Ⅲ	1.9月の本学主催の海外研修はリモート研修、3月の現地研修が開催された。9月の研修には学生の参加はなかったが、3月のオーストラリア現現地修には学生4名の参加があった。	**【年度計画16-3】** 1.海外研修参加数2名以上を維持する。	Ⅲ	1.本学主催9月の研修には学生1名の参加、3月のオーストラリア現地研修には学生の参加はなかった。学部の国際交流委員会と連携しながら、サイネージやポスターだけではなく、個別的に声掛けをするなど積極的に学生への研修参加へのアプローチをおこなった。今後も積極的な学生への参加を推進していく。				
2.海外研修への参加案内と学生の参加しやすい環境を整える。ベトナムの大学との学生交流を進める。		2.ベトナム　ナムディン大学とのMOU締結後、交流会を持つための交渉が進まず、交流会が開催できなかった。	2.ベトナムの大学との交流の機会を1回以上つくる。		2.4.ベトナムナムディン看護大学とのMOU締結後、交流会を持つための交渉が進まなかったが、国際交流委員会との連絡が取れ今後交流会の実施へと計画される予定である。次年度、国際交流委員会がナムディン看護大学との交流会の開催の企画をすすめ、開催が決定すれば、積極的に学生が参加できるように、情報提供し、プロジェクトへの参加ができるように環境を整える。 ・また、他大学との連携については今後検討していく。				
3.近隣地域で生活する、または保健医療福祉施設で働く多国籍の人々との交流の場をつくる。		3.交流会には、和歌山市内の外国人医療従事者2名、本学部学生5名と大学院生1名が参加し、対面で開催した。国際交流委員会と連携を取りながら、参加者募集の広報を行い、会場の感染対策や交流会の進行をサポートした。学生が直接、外国人との交流ができる機会となるため、今後も継続していく。	3.地域で生活する多国籍の人々との交流の機会を1回以上つくる。		3.多国籍の人々との交流会には、大阪に在住の外国人医療従事者3名、本学部学生12名が参加し、対面で開催した。国際交流委員会と連携を取りながら、参加者募集の広報を行い、会場の感染対策や交流会の進行をサポートした。学生が直接、外国人との交流ができる機会となるため、今後も継続していく。				
			4.外国の大学との連携協定を検討する。						
「評価指標」 ・海外研修参加学生数、ベトナムの大学との学生交流の有無、多国籍の人々との交流回数			**「評価指標」** ・海外研修参加学生数1名以上 ・多国籍の人々との交流会1回						
【計画16-4】㋐ ICTを駆使する能力を備え、保健医療福祉に貢献できる医療人を育成する。									
「計画達成のための方策」 ICTを活用した授業の実施と充実を図り、ICTによる主体的学習システムを構築し、学修成果の可視化を図る。	Ⅳ	1.年間スケジュールを作成し、授業運営において必要性の高いICTツールや教材の使用方法についての実践例を紹介できるよう、学習会を開催した。またICTツールや教材の使用に関するマニュアルを配信した。 ・WebClassによる体調管理の入力・管理方法、実習記録の使用方法について勉強会を行なった。 ・学生への情報モラル教育について『情報倫理ガイドライン』動画を作成し、周知した。	**【年度計画16-4】** 1.これまでに導入したシステムの有効活用と評価を行う。	Ⅳ	1.WebClass、Medi-EYE、Teams など、既存のICTツールの活用方法に関する勉強会を実施した。修学カルテについては、学生の体調管理ツールとしてほとんどの実習科目で活用され、全学生が利用可能な状態となっている。 また、WebClassの授業支援機能についても学部内での研修を通じて利用範囲が拡大され、出席管理、アンケート、レポート提出等の機能は専任教員が担当するすべての科目で利用可能となった。 一部の科目では、WebClassを用いた定期試験の実施や、ルーブリック評価の導入など、さらなる活用が進められている。 電子黒板を用いた授業設計については、M101教室をシミュレーションルームとして活用する準備を進めており、今後の実践が予定されている。				
		2.・Web Class 修学カルテ（卒業時技術到達度、体調管理表、実習記録） ・Web Class ICEルーブリック ・Microsoft 365 Teams、F.CESSnurseを用いた演習および実習記録の活用	2.新システム増設時の活用可能にするための研修を行う。		2.新たに導入した実習支援システム「F.CESS Nurse」を活用した演習・実習の運営を行い、ICT推進委員会を中心に関連勉強会を実施した。 領域間でICTツールの活用頻度には差が見られるが、実践事例の共有および使用方法の周知徹底を通じて、教育DXの更なる推進を目指している。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
		3.・修学カルテを全領域で活用できるように整え、卒業時技術到達度を全学年で統一して使用できるよう教員と学生に周知した。学生に対しては卒業時技術到達度を入力する意義などについても説明し、有効に活用できるよう指導した。演習記録、実習記録などを必要に応じて全領域が使用できるように設計した。	3.学習過程・成果の可視化を試行的に開始する。		3.技術到達度チェックリストをWebClass上で入力可能とする設計・運営を実施し、学生は随時自身の到達度を確認できるようになった。これにより、卒業時には4年間の成果が可視化される仕組みが整備された。 一方で、他の学習成果可視化ツールの選定には至っていない。 ルーブリックの活用状況については、全学的な教学マネジメント調査の結果、13科目が達成水準を明示したルーブリックを運用、28科目が評価の一部としてルーブリックを使用、13科目が導入を予定していることが判明した。 なお、非常勤講師が担当する科目にはルーブリックが導入されていないことが確認されたため、今後の導入方針について検討が必要である。				
		4.・ICT推進委員のスキルアップを目指して委員会内での学習会を実施した。 ・シミュレーションセンター設置に向けた取り組みについて、令和4年度に導入された映像機器を活用し、シミュレーション演習がスムーズに行えるよう、M101教室に配置した。実際に配置した機材を用いてオープンキャンパスで試験的に活用し実際の演習で使用できる状態であることを確認した。 ・さらに、「看護基礎教育におけるデジタル教育ツール活用の効果検証」のテーマで学長裁量費に採択され、備品の拡充を行った。 5.2020年度生57名、2021年度生50名にオープンバッチを付与した。			22年度生(新4年生)は87名 23年度生(新3年生)は66名 24年度生(新2年生)は71名が履修済で認定バッチを取得できる見込みとなっている。				
「評価指標」 ・システムの利活用状況、新システムの利活用状況、学習過程・成果の可視化の程度			**「評価指標」** ・システムの利活用状況100% ・新システムの利活用状況100% ・学習過程・成果の可視化の程度100% ・学生のHSP取得状況60名						
○大学院医療保健学研究科 **【計画17-1】**㋐ 教育理念・教育目標に沿った教育プログラムを構築するとともに、人材を育成するため、本研究科のカリキュラムについての見直しを行う。									
「計画達成のための方策」 1.大学の教育理念に則った教育プログラムの確立。 2.明確な教育目標の設定。 3.教育目標に応じたカリキュラムの再構築。	Ⅲ	1-3.各領域で3Pを設定し、それに基づいたカリキュラムを構築しそれに基づいた教育実践が実施されてきている。	**【年度計画17-1】** 1.大学の教育理念に則った教育プログラムの確立。 2.明確な教育目標の設定。 3.教育目標に応じたカリキュラムの再構築。	Ⅳ	1-3.各領域で3Pを設定し、それに基づいたカリキュラムを構築しそれに基づいた教育実践が実施されている。				
4.新しい教育制度の導入。		4.教育制度の導入までに至らないが、教育方法は、オンライン教育でも対面と支障なく双方向での討議等を充実させている。	4.新しい教育制度の導入。		4.新規の教育制度の導入まではないが、教育方法は、オンライン教育でも対面と支障なく双方向での討議等を充実させている。				
5.主体的な学修を促す教育方法の導入。		5.図書館データベースに自宅からアクセスが可能となり、自己学習の機会が充実し、主体的な学修の支援システムが整備された。また、大学院教務委員会が発足し、定例会議が開催され、教務関連について、大学院での検討が開始され、規定などの改定がなされている。	5.主体的な学修を促す教育方法の導入。		5.大学院教務委員会による教務関連の検討がされ、規定などの改定や運用がなされている。				
「評価指標」 ・新しい教育制度の導入状況 ・主体的な学修を促す教育方法の導入状況 ・大学院医療保健学研究科カリキュラム評価班会議：5回			**「評価指標」** ・新しい教育制度の導入状況 ・主体的な学修を促す教育方法の導入状況 ・大学院医療保健学研究科カリキュラム評価班会議：5						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画17-2】㋐ 教育の質保証が実証できるマネジメントシステムを構築する。									
「計画達成のための方策」 研究指導の質を保証するためのマネジメントシステムを構築する。 1．FD活動による教育システムなどの開発。	Ⅲ	1-3.大学院独自に研究倫理、科研費獲得へのプロセスなどに関する講義・講演を実施し、またFD活動を通して教員の教育・研究指導の能力を向上させるための支援を実施し、質の保証に努めた。	**【年度計画17-2】** 研究指導の質を保証するためのマネジメントシステムを構築する。 1．FD活動による教育システムなどの開発。	Ⅳ	1-3.大学院における研究倫理、科研費獲得に関する講義・講演を実施し、また年1回のFD活動を通して教員の教育・研究指導の能力を向上させるための支援を実施し、質の保証に努めた。				
2.教育プログラムの実効性の確認。			2.教育プログラムの実効性の確認。						
3.教員相互協力による教育能力向上。			3.教員相互協力による教育能力向上。						
4.マネジメントシステムの第三者評価。		4.定期的に、大学及び大学院の教育に関する質保証のための外部評価委員会が開催され、評価を受けて改善に繋がっている。	4.マネジメントシステムの第三者評価。	Ⅲ	4.定期的に、大学及び大学院の教育に関する質保証のための外部評価委員会が開催され、評価を受けて改善に繋がっている。				
「評価指標」 ・FD活動による教育システムなどの開発状況			**「評価指標」** ・FD活動による教育システムなどの開発状況						
【計画17-3】㋐ 学際的・国際的な視点から自分の専門性を認識できる人材育成システムを整備する。									
「計画達成のための方策」 グローバル化に対応した人材を育成する。 1.学際的・国際的な視点から自分の専門性の認識。	Ⅲ	1-3.グローバル化に対応した人材を育成することとして、3.に関して立案した。学生自身が自分の専門性を認識し、2.学生のグローバル・リレーションシップ育成するために、まず、3.の実践的英語教育の導入を図り、abstractを英語で書けるとした。 ・実践的英語教育の導入状況は、「学術コミュニケーション特論」を開設し、抄録を英文で作成する能力の獲得までを目指し、授業は実施できたが、全員が抄録作成できるまでには至らなかった。 ・修士・博士課程論文の学会発表状況は、各領域の関連学会における学術集会で発表は実践できているが、論文投稿に至ったものは少数であるものの増加傾向にある。 ・全体論文報告会では、修了生は全員発表を実践できた。 海外発表に至ったのは1名であった。引き続き、海外発表および論文投稿に繋げられるよう指導を行っていく。	**【年度計画17-3】** グローバル化に対応した人材を育成する。 1.学際的・国際的な視点から自分の専門性の認識。	Ⅲ	1-3.実践的英語教育の導入として「学術コミュニケーション特論」が開設され、抄録を英文で作成する能力の獲得までを目指した授業は実施でき、継続して取り組んでいる。 ・修士・博士課程論文の学会発表状況は、年1回の学内論文発表会の実施と各領域の関連学会における学術集会で発表は全員が実践できている。論文投稿は少数であるものの増加傾向にある。 ・海外発表に至ったのは1・2名程度であった。引き続き、海外発表および論文投稿に繋げられるよう指導を行っていく。				
2.学生のグローバル・リレーションシップ育成。			2.学生のグローバル・リレーションシップ育成。						
3.実践的英語教育の導入。			3.実践的英語教育の導入。						
「評価指標」 ・実践的英語教育の導入状況 ・修士・博士課程論文の学会発表状況 ・海外論文発表経験者数 年間3名以上			**「評価指標」** ・実践的英語教育の導入状況 ・修士・博士課程論文の学会発表状況 ・海外論文発表経験者数 年間3名以上						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画17-4】㋐【計画6の再掲】 大学院医療保健学研究科修士課程プライマリケア看護学領域令和５年度に開講するための準備を進めるとともに、開講後適切に運営する。 **「計画達成のための方策」** 大学院医療保健学研究科修士課程プライマリケア看護学領域令和５年度に開講するため、関係機関との調整等を着実に実施し、開講準備を着実に進めるとともに、開講後適切に運営する。 **「評価指標」** ・大学院修士課程プライマリケア看護学領域の開講準備・運営状況 （令和7・8年度） ・入学者数、特定行為管理委員会開催数、修了生の人数、日本NP教育大学院協議会におけるNP資格認定試験合格者の人数、修了後の就業先と職務の状況、修了後の学会や研究会等の発表件数、在学生と修了生との交流及び研修会の開催状況	Ⅳ	・①から⑩について、計画通り全て完了した。 ・講義・演習では、学外講師77名（内訳：医師58名、看護師16名、そのほか専門家3名）学内講師8名の協力を得ることができ、計画通り、2023年4月に開講できた。 ・開講後は、カリキュラムの進捗管理、放送大学（特定行為共通科目）学習の進捗および評価管理、科目試験の管理により、設定期間内にすべての院生が履修合格ができた。 ・実習施設、実習指導医、実習指導NP（病院・施設・在宅）との打ち合わせを実施し、実習施設4施設、NP9名の協力を得ることができ、全員履修合格となった。また、令和6年に向けて実習病院14施設の確保ができ、厚生局修正申請を提出予定である。 ・演習室の確保と修繕を完了し、令和6年の授業に向けて演習（OSCE）物品・シミュレータの搬入を行う予定である。 ・特定行為管理委員会は2023年10月に第1回の会議を実施した。 ・令和6年度学生募集と入試により、計16名が入学した。 ・予定8名を超える入学生にともない、令和6年度に教員（診療看護師）1名を学部兼任担当として採用できた。	**【年度計画17-4】** 1.大学院医療保健学研究科修士課程プライマリケア看護学領域を開講し適切に運用する。 **「評価指標」** ・大学院修士課程プライマリケア看護学領域の運営状況	Ⅳ	・大学院医療保健学研究科プライマリケア看護学領域では第1期生は令和7年3月に11名全員が最短の2年間で修了することができた。 ・令和6年4月には第2期生16名が入学し、令和7年4月には12名の入学が決定し、令和7年度はM1生12名、M2生16名が修士課程にて学ぶことになる。8名程度の定員確保は3年連続で達成できている。 ・院生の特定行為研修に関する履修状況と修了を審議する「特定行為研修管理委員会」は外部委員4名を含めた8名の構成員で4月、12月と3月と3回開催され、カリキュラム内容や講師の選定、実習施設の選定、成績管理および修了判定が計画通りに行われた。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画17-5】㋐ 独自の公開講座の開催など、学生の研究発表や研鑽の場を企画して提供していくとともに、科学的研究費などへの申請数及び採択率の向上を目指す。 **「計画達成のための方策」** 1.公開講座の開催。	Ⅲ	1.各領域から代表が集まり、その年のテーマを決めて公開講座を開催した。また公開講座のプログラムの中で、修了生の研究発表が実施できた。	**【年度計画17-5】** 1.公開講座の開催。	Ⅲ	1.各領域から、年度毎にテーマを決めて公開講座を開催しているが、公開講座の中で、修了生の研究発表も実施している。				
2.競争的資金の獲得に向けて研究テーマを抽出する。 3.複数の領域が協力して、研究計画と応募書類を作成する。 4.審査結果の開示以降に、不採択理由の検証を行う。また、不備の認められる点について検討し、次年度申請の採択率の向上を目指す。 **「評価指標」** ・公開講座の開催年1回 ・科研費獲得に向けた取組状況		2-4.教員及び大学院生による科研費の申請は試みているが、採択には至らなかった。査読結果に関しては、指導教員が共に指摘内容を確認し、計画修正に繋げている。	2.競争的資金の獲得に向けて研究テーマを抽出する。 3.複数の領域が協力して、研究計画と応募書類を作成する。 4. 審査結果の開示以降に、不採択理由の検証を行う。また、不備の認められる点について検討し、次年度申請の採択率の向上を目指す。 **「評価指標」** ・公開講座の開催年1回 ・科研費獲得に向けた取組状況		2-4.教員及び大学院生による科研費の申請は推進しているが、院生の採択には至っていない。継続的に取り組んでいく。				
【計画17-6】㋐ コンセプトに基づく計画の立案と具体化を図り、国際感覚にあふれたキャンパスを実現する。 **「計画達成のための方策」** キャンパス教育環境向上プロジェクトを推進する。知的創造のための拠点となるグローバル化に対応する施設環境を実現する。 **「評価指標」** ・キャンパス教育環境向上プロジェクトの推進状況	Ⅱ	・キャンパス教育環境向上プロジェクトについては、施設環境の充実が図れていない。次年度は、新設領域が開設されることからも、使用教室の調整や、キャンパス内の清掃・衛生管理を徹底し、システムを整備していくこととする。	**【年度計画17-6】** キャンパス教育環境向上プロジェクトを推進する。知的創造のための拠点となるグローバル化に対応する施設環境を実現する。 **「評価指標」** ・キャンパス教育環境向上プロジェクトの推進状況	Ⅲ	・新設領域が開設されたが、使用教室の調整や、キャンパス内の清掃・衛生管理を徹底し、システムを整備していくことは継続していく。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画17-7】㋐ 学生が誇りを持てる学修環境を実現する。									
「計画達成のための方策」 1.時代に見合った学部学科構築のための検討・実施。	Ⅳ	1.オンライン上でのICT教育を整備し充実させた。	**【年度計画17-7】** 1.時代に見合った学部学科構築のための検討・実施。	Ⅳ	1-2.PC貸与によりICT教育を整備し継続した整備を実践できている。				
2.充実した学生生活支援。		2.入学生全員へのPC貸与により、学生の学習環境の確保ができた	2.充実した学生生活支援。						
3.一般入試方式重視による入学生の質的向上		3.大学院会議において、特に博士課程の入学者に関しては、研究遂行の能力の査定が必要であることが確認された。また、本審査の前段階として予備審査を設けるなど、段階的に審査を実施することの検討も行っていく。	3.一般入試方式重視による入学生の質的向上		3.大学院入学者の質の担保を図るために、特に博士課程の入学者に関しては、修士論文の査定や書類審査および面接による研究遂行の能力の査定を継続できている。				
「評価指標」 ・学修環境の整備状況			**「評価指標」** ・学修環境の整備状況						
【計画17-8】㋐ 産学協同体制の構築によるブランド力向上プロジェクトの推進を図る。									
「計画達成のための方策」 産学協同体制の構築によるブランド力向上を図る。 1.卒業生との交流活性化によるPR効果の促進。	Ⅲ	・産学協同体制の構築によるブランド力向上を図るために、計画1-4を立案した。 1.卒業生との交流活性化によるPR効果の促進では、大学院公開講座を開催し、学びの交流を図った。	**【年度計画17-8】** 産学協同体制の構築によるブランド力向上を図る。 1.卒業生との交流活性化によるPR効果の促進。	Ⅳ	1.卒業生との交流活性化によるPR効果の促進では、例年、大学院公開講座を通して学びの交流を図っている。				
2.産学協同研究成果の対外的なPR促進。		2と4では、産学協同研究成果の対外的なPR促進では、企業との産学連携のもと、特別教授制度による先端研究を実施している講師を招聘しての研究会などを開催した。	2.産学協同研究成果の対外的なPR促進。		2と4では、産学協同研究成果の対外的なPR促進では、企業との産学連携として、例年、特別教授制度による先端研究者を招聘して公開講座や研究会などを開催している。				
3.地域社会との連携によるPR促進。		3.地域社会との連携によるPR促進では、市区町村や企業との連携をすることによって産学協同体制の構築によるブランド力向上を図る。 学内の総合研究所や産後ケア研究センターなど、産官学連携による事業も展開、開始され、PR促進に繋がっている。	3.地域社会との連携によるPR促進。		3.地域社会との連携によるPR促進では、市区町村や企業との連携によって産学協同体制の構築によるブランド力向上を図る。 学内の総合研究所や産後ケア研究センターなど、産官学連携による事業も展開され、PR促進に繋がっている。向上の結果として、活動をしている大学として受験生の増加も見られている。				
4.特別教授制度による先端研究導入。			4.特別教授制度による先端研究導入。						
「評価指標」 ・ブランド力向上プロジェクトの推進状況			**「評価指標」** ・ブランド力向上プロジェクトの推進状況						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
○大学院看護学研究科 **【計画18】**㋐ 大学院修士課程における課題研究及び特別研究の成果について、修了後1年以内に口頭発表を行うとともに、誌上発表を行い、発表数を増加させる。									
「計画達成のための方策」 1. 研究倫理審査レベルの向上。	Ⅳ	1. 研究発表会・大学院教授会により大学院学生と教員への啓発を行い、令和5年度には修士課程修了生35名中3名（9%）が学会発表を行い、3編の誌上発表が行われた。（2/28集計中） ・倫理審査委員向け研修の受講者2名。委員の交替もあったが、受講修了者は委員7名中5名となった。 ・審査後の結果伝達は平均0.2日であり、迅速に結果を報告できた。	**【年度計画18】** 1. 研究倫理審査レベルの向上。	Ⅲ	1. 倫理審査システムを新たに稼働し、円滑な研究倫理倫理審査が行われ85件の審査を実施した。 小委員会の委員を高度実践、看護科学領域から任命し、8名体制と充実した。1. 課題研究および特別研究の成果を1年以内に13件（12名）発表した。論文として採択されたものは3件あった。				
2. 迅速な審査と結果の伝達。		2. NPフォーラム2023を2023年12月2～3日で開催した。のべ参加者数は在学生含め136名であった。修了生によって実践報告で1題、シンポジウムで6題の活動報告があった。また修了生実態調査報告では、対象となった修了生のうち、課題研究の学会への発表は約6割（54人）、学会誌等への掲載が約2割（21人）が実施していたことが明らかになった旨報告された。	2. 迅速な審査と結果の伝達。	Ⅱ	2. 新システムでは、これまでのように結果の伝達までの時間の算出が困難である。2日以内という令和6年度の目標は達成できていない。 今後は、1回目の研究計画申請で50%以上が承認になるよう、研修動画等の啓発活動を強化する予定である。				
「評価指標」 ・小委員会委員全員の倫理審査委員向けの研修の受講状況 ・審査日後2日以内の申請者への結果伝達。			**「評価指標」** ・小委員会委員全員の倫理審査委員向けの研修の受講2名 ・審査日後2日以内の申請者への結果伝達。						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
○大学院千葉看護学研究科 **【計画19-1】** 研究科修士課程においては、各指導教員の役割分担と連携体制を明確にして指導教員間の綿密な協議に基づき、DPを実現する体系的な大学院教育を行うこととし、院生の質を保証する組織的な教育・研究指導体制の充実を図る。									
「計画達成のための方策」 1. 地域交流イベントにおける活動の実施。 千葉看護学部の地域交流イベントにおいて、院生を主体とする企画を実施し、主として西船橋地区住民のニーズに応える保健医療の連携に貢献する。	Ⅲ	1. 前年度の成果について、一部をJCHO学会において発表した。3月24日に開催された地域交流イベントにおいて、研究科学生による演習成果発表会を行った。令和6年度は、それまでの活動を令和7年度紀要に発表することをめざして成果の整理を行うとともに、今後の成果発表の焦点化について検討することが課題である。	**【年度計画19-1】** 1. 地域交流イベントにおける活動の実施。 ①前年に分析した企画について地域住民を巻き込んだ企画を実施する。 ②成果を活動報告として紀要等に一つ以上発表する。	Ⅳ	1. 3月9日開催の地域交流イベントにおいて、2024年度履修者7名により口演形式で成果を発表し、会場参加者（船橋市民）と意見交換を行った。 ・令和5年度までの「地域看護機能推進演習」の成果とその発表（学会や地域交流イベント）などの活動をもとに、令和6年度本学紀要に投稿した(in print）。				
「評価指標」 ・地域交流イベントでの企画数、参加住民等からのアンケート結果、参加学生からのアンケート結果			**「評価指標」** 地域交流イベントでの企画数（1つ以上）、参加住民等からの肯定的な意見、参加学生からの肯定的な意見、活動報告公開数（1つ以上）						
2. 修了生の研究発表支援の実施。 修了生の研究成果の公開を支援し、実装的研究実施支援の在り方を検討する。	Ⅲ	2. 令和4年度修了生5名中4名が学会発表し、1名は令和6年度5月の学会発表が確定している。 ・令和5年度地域交流イベントでは、「地域看護機能推進演習（必修）」履修者により、演習での成果物をもとに発表をおこない、参加者との意見交換を行った。当日は、上智大学地域看護学教授を招聘し、意見交換及び助言を得ることで、今後の課題についてフィードバックがなされた。 ・令和4年度修了生の授業評価アンケート結果に基づき、令和5年度の授業改善につなげた。定期研究科運営会議にて、特別研究の進捗、令和5年度学位（修士）申請者の論文審査の評価基準をもとに各学生の取り組み状況を共有し検討した。	2. 修了生の研究発表支援の実施。 修了生を支援し学会・誌上発表を行う。 同左に修了生の状況を加えた検討会を開催する。 上記を加味し授業内容改善への提案を作成する。	Ⅲ	2. 大学院修了生の研究公開状況であるが、国内の学会での研究発表が5本、今後発表予定が1本であった。次年度も引き続き、修了生の研究発表支援を実施し研究発表に繋げ、学会誌への論文のアクセプトに向けて支援を進めていく。				
「評価指標」 ・修士論文の学会等での発表及び学会誌等へのアクセプト数、及び内容、自己/第三者評価結果			**「評価指標」** ・研究科学生による地域交流イベント等での研究報告の有無、修士研究内容に関する審査及び研究科教授会でのDPに照らした評価結果 ・研究指導を含めた授業方法・内容に関する自己点検評価及び改善結果（カリキュラム改正への提言を含む）						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
3.教育活動と成果の点検評価及び改善活動の推進。 学生からの授業評価並びにそれに対する教員の自己評価、各会議での検討等に基づき、大学院DPに照らした点検評価を行い、CP、AP及びDPの改定に向けた準備を行う。 **「評価指標」** ・検討会の開催回数、成果物としての新カリキュラムの有無と内容	Ⅳ	3.令和4年度の学生からの授業評価アンケート結果に基づき、令和5年度の授業改善につなげた。各科目の検討会議および研究科運営会議において、到達目標の達成状況や他科目との関連性からの学習効果を検討した。科目と各DPとの関係については、次年度以降さらに整理を行う必要性を教務委員会で確認した。以上の記録は、各議事録に残した。 ・令和5年度は特別研究担当教員1名を加えるとともに、各学生の研究テーマに応じて、大学院担当教員のなかから副指導教員を選出し、指導体制の充実を図った。	3.教育活動と成果の点検評価及び改善活動の推進。 ①前年度までの評価をもとに、令和8年度（開設6年目）からの新カリキュラム運用に向けた準備検討会を開催し、年度末に新カリ案を策定する。同時にＤＰ、ＡＰ、ＣＰの改定案を策定する。 ②授業内容や時間割変更で改善可能な点について、改善状況を情報共有し、ＤＰ等に照らした点検評価を行 **「評価指標」** ・検討会の開催回数（年4回）、策定された新カリキュラム（年度末）、改定内容に関する情報交換会の開催（年2回）、改定前に検討により改善された授業が８科目以上	Ⅲ	・令和5年度の学生からの授業評価アンケート結果に基づいて、令和5年度の授業改善につなげた。各科目の検討会議のほかに、研究科運営会議において、研究指導を含めた授業内容・方法の評価、点検を行い、授業運営の改善につなげている。 ・カリキュラム改正については、今後検討する予定である。				
【計画19-2】㋐ 修了生の研究成果の公開を支援し、実装的研究実施支援の在り方を検討する。 **「計画達成のための方策」** 研究科DPにのっとり、保健医療福祉における地域連携の推進と看護機能の明確化をめざした修了生の研究成果の公開を支援し、実装的研究実施支援の在り方を検討する。 **「評価指標」** ・学生の授業評価アンケートによる授業の質評価、修了生の研究成果の公開数、地域連携の推進や看護機能の明確化に関する情報交換会等の開催数	Ⅳ	・令和4年度修了生5名のうち4名が研究生となり、担当教員の指導のもと学会発表、論文の投稿準備を進めた。研究生ではない者も含め、5名中4名が学会発表を終え、1名は令和6年5月学会発表が確定している。 ・令和5年度地域交流イベントでは、「地域看護機能推進演習（必修）」履修者により、演習での成果物をもとに発表をおこない、参加者との意見交換を行った。当日は、上智大学地域看護学教授を招聘し、意見交換及び助言を得ることで、今後の課題についてフィードバックがなされた ・令和4年度修了生の授業評価アンケート結果に基づき、令和5年度の授業改善につなげた。定期研究科運営会議にて、特別研究の進捗、令和5年度学位（修士）申請者の論文審査の評価基準をもとに各学生の取り組み状況を共有し検討した。	**【年度計画19-2】** 修了生を支援し学会・誌上発表を行う。前年を継続するとともに、修了生の状況を加えた検討会を開催する。上記を加味し授業内容改善への提案を作成する。 **「評価指標」** ・学生の授業評価アンケートによる授業の質評価、修了生の研究成果の公開数、地域連携の推進や看護機能の明確化に関する情報交換会等の開催数	Ⅳ	・令和5年度修了生11名が研究生となり、担当教員の指導のもと学会発表、論文の投稿準備を進めた。全員が学会発表を終え、論文投稿の準備を進めている。 ・令和6年度地域交流イベントでは、「地域看護機能推進演習（必修）」履修者により、演習での成果物をもとに発表をおこない、参加者との意見交換を行った。当日は、地域医療機関で管理者として勤務する令和5年度修了生1名を指定発言者として招聘し、意見交換を行った。この修了生からは、研究科での学修が現職での地域連携活動における視点の広がりや新たな活動（案）の吟味につながっているとのフィードバックを得た。 ・令和5年度修了生の授業評価アンケート結果に基づき、令和6年度の授業改善につなげた。 ・定期研究科運営会議にて、特別研究の進捗、令和6年度学位（修士）申請者の論文審査の評価基準をもとに各学生の取り組み状況を共有し検討した。☐				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画19-3】㋐ 優秀な学生を確保する。 **「計画達成のための方策」** 基盤となる人材の獲得をめざし、入試・広報活動等を通して、保健医療組織及び個人に本学及び本研究科のビジョンを伝え、これに共鳴する受験生の獲得を図る。また、保健医療の現場に直接貢献しようとする人材を育成するため、修了後の臨床現場での活躍イメージをもって学修・研究が実施できるよう学生支援を行う。	Ⅳ	・千葉県内の施設470箇所ならびに、JCHO病院・看護学校60箇所に募集ポスター配布を2回行った上で、入試説明会を2回開催した。また、学部の実習施設となっているJCHO病院に訪問し、パンフレットの配架依頼等の広報活動を実施した。 ・学生へ授業評価アンケートの分析は科目担当者間のみの実施であり、全体での把握はしていないが、DPと照合しての自己評価や、研究テーマ設定から、本学研究科で目指す地域医療の場で看護機能を推進する人材像と一致している。 ・就学中に離職していた学生も修了後は就職し、全員保健医療現場（教育含む）で活動していく。	**【年度計画19-3】** 前年に準じた活動を行う。加えて、授業評価アンケートを分析し、評価改善を行う。修了生の現場での活動状況を把握するための手段（アンケート、修了後に参集できる機会の設定、等）を検討する。	Ⅲ	・千葉県内の医療施設や保健所、看護学校、ならびに全国のJCHO病院等計499箇所に募集ポスター配布を2回行った上で、入試説明会を2回開催した。また、学部の実習施設となっているJCHO病院に訪問し、パンフレットの配架依頼等の広報活動を実施した。 ・令和5年度の授業評価アンケート結果を踏まえて、授業改善を実施した。 ・全修了生と研究指導教員がつながっており、修了後に、地域医療の場で看護機能を推進する人材として活動しているため、今後は、修了生の現場での活動状況を把握するアンケートなどにより数量的な把握を検討する。				
「評価指標」 ・学生の授業評価アンケートによる大学・研究科ビジョンへのコミットメント状況、科目選択や研究テーマ設定における修了後の就業イメージとの一致状況、修了後に保健医療現場へ就職・復帰する修了生数、修了生の現場での活動状況			**「評価指標」** ・学生の授業評価アンケートによる大学・研究科ビジョンへのコミットメント状況、科目選択や研究テーマ設定における修了後の就業イメージとの一致状況、修了後に保健医療現場へ就職・復帰する修了生数、修了生の現場での活動状況						
【計画19-4】㋐ 仕事を持つ学生への修学支援等を行う。 **「計画達成のための方策」** 1. 学生が仕事を継続しながら学修できるよう時間割を工夫するとともに遠隔授業とそのサポートの仕組みを整備する。	Ⅳ	1. 令和5年度入学生10名が仕事を継続しながら学業を継続できるよう、業務で欠席せざるを得ない授業については終了後にオンデマンド配信を行った。特別研究のゼミに関しても、学生の勤務に応じて柔軟にスケジュール調整を行い、研究計画を進められるよう支援した。	**【年度計画19-4】** 前年度に準ずる。研究科授業の教材をWEB公開する（1コマ分）	Ⅳ	1. 令和5年度入学生8名が、仕事を継続しながら授業を受講できるよう遠隔授業を中心に実施した。特別研究のゼミも、学生のスケジュールと調整しながら支援した。				
2. 科目等履修制度の整備・活用を推進する。	Ⅳ	2. 科目等履修制度について、入試説明会、個別相談、ホームページ上で募集案内を行い、令和5年度1名の利用者は、令和6年度入学予定となった。令和6年度も1名の科目等履修生の利用予定であり、該当者には、大学院出願に向けた準備とあわせて、効果的な履修計画となるよう個別相談を行った。科目等履修生選考の実施要項を作成し、本制度の運用を円滑にする体制を整えた。		Ⅳ	2. 科目等履修制度については、前年度同様に募集し、令和6年度は1名が履修生となったが、初回参加の欠席連絡ののち、連絡の取れない状況になった。令和7年度は2名が履修予定となり、いずれも大学院進学希望者であるものの、1名体調不良による辞退があり、1名の履修予定となっている。				
3. 地域交流イベントやWEB掲載等により研究科主催の公開授業を実施する。	Ⅲ	3. 学生の授業評価アンケートから、出席のしやすさ、履修支援に関して否定的な意見は認められなかった。令和5年度は入学生10名中9名が前から従事する仕事を継続していた。残り1名も学内で非常勤助手として働きながら学修に取り組んだ。前年度休学していた学生1名は後期から復学したが、研究より非常勤業務の優先を希望し、退学した。科目等履修生は1名であった。研究科主催の公開授業は行わなかったが、地域交流イベントで大学院生10名が看護機能推進演習における学習成果を発表した。 ・次年度は、公開授業について、募集につながる模擬授業をWeb公開することを検討する。		Ⅳ	3. 令和6年度の授業評価アンケート結果は、教員まで伝達されていない状況であるが、出席のしやすさや履修支援を継続しており、令和6年度入学者8名全員が仕事を継続しながら、履修を継続できている。働きながら修士論文への取り組むために、2名が研究倫理審査通過後、休学している。 ・「ヘルス・グローカリゼーション」の科目内容に関連した公開授業を2本作成し、研究科ホームページで公開した。				
「評価指標」 ・学生の授業評価アンケートによる出席のしやすさ・サポート評価、仕事を継続しながらの入学生数、欠席・休学状況、科目等履修制度利用者数、研究科主催の公開授業実施数			**「評価指標」** ・学生の授業評価アンケートによる出席のしやすさ・サポート評価、仕事を継続しながらの入学生数、欠席・休学状況、科目等履修制度利用者数、研究科主催の公開授業実施数						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画19-5】㋐ 地域連携に関する共同研究を実施する。 **「計画達成のための方策」** 保健医療福祉における地域連携の推進と看護機能の明確化に関する独自の講義・演習を開発・展開し、これを基盤とした修士研究の指導、及び共同研究を行う。	Ⅲ	・開設初年度（令和3年度）より、保健医療福祉における地域連携の推進と看護機能の明確化に関する講義・演習として、看護機能推進特論および演習を実施し、3回目となる本年度に学生の授業評価や卒業時点での達成状況に基づいた評価を科目担当教員全員で行い、内容と方法に改善を加えた。次年度についてはこれまでcovid-19感染のため実施できなかったフィールドワークを取り入れ、これにより周辺地域への貢献につなげることを検討する。加えて、修了生の研究公開状況を確認する。 ・共同研究は実施しておらず、次年度には実践報告として本学紀要に投稿すること、および修了生との研究の可能性を探索する。	**【年度計画19-5】** 前年度に準ずる。地域連携に関する共同研究を継続する（1つ。）	Ⅳ	・令和6年度は、地域社会における看護機能を推進する能力の育成を目標とする研究科の科目の1つである「看護機能推進演習」のこれまでの取り組みと成果を本学紀要(第19巻第1号)に発表した。履修後の学生の評価結果等を分析し、受講生は地域社会における看護機能の活動事例、関連資料の収集や分析、学修成果の発表等を通じて、看護機能への理解を深め、その成果を示す能力の育成に繋がっていた。地域連携に関する共同研究については2つの研究を実施し、地域連携における看護の役割・機能を可視化した。また大学院修了生の研究公開状況であるが、国内の学会での研究発表が5本、今後発表予定が1本であった。次年度も引き続き保健医療福祉における地域連携の推進と看護機能の明確化に関する講義・演習をさらに精練していき、これを基盤とした修士研究の指導、共同研究、研究発表を推進していく。				
「評価指標」 ・研究科内での教員によるピアレビュー数と評価、修士論文に対する学内外の評価、保健医療福祉における地域連携の推進と看護機能の明確化に関する共同研究の数			**「評価指標」** ・研究科内での教員によるピアレビュー数と評価、修士論文に対する学内外の評価、保健医療福祉における地域連携の推進と看護機能の明確化に関する共同研究の数						
○大学院和歌山看護学研究科 **【計画20-1】㋐** 教職員体制の充実のもと、DPを実現するための教育方法を開発し学生の学びの質を保証する。 **「計画達成のための方策」** 1.社会人学生の学びを推進する教育方法を開発する。 **「評価指標」** ・教育方法と教育体制の検討・開発状況、大学院担当教員数 ・遠隔地でも学べる学習環境の整備状況	Ⅳ	1.令和4年度に引き続き、充実した担当教員により、修士論文審査を実施することができた。 ・ハイブリッドによる受講環境の下、学生は仕事の状況に応じてタイムリーにオンラインか対面を選択して講義や演習への出席が可能になった。学生の学修ニーズの確認し、必要な文献検索、分析方法など個別に対応した。研究室の整備により、研究室がよく活用され、学生同士のディスカッションが活発に行われるようになった。今年度は7名中6名が2年で終了、1名が休学を含め3年で修了した。入学前教育はプレセミナーとして、大学院で学ぶことについて説明し、在学生から学び方や生活について具体的に聞く機会を設けている。 ・大学院担当教員数は、教授8名、准教授9名、講師4名の体制であった。	**【年度計画20-1】** 1.大学院担当教員の充実 ①社会人学生の学びを推進する教育方法を検討する。 ②遠隔地でも学びを可能にする教育方法、教育体制を検討する。 ③入学前教育により大学院での学びへの適応を図る。 **「評価指標」** ・教育方法と教育体制の検討・開発状況、大学院担当教員数	Ⅳ	1.令和6年度に引き続き、充実した担当教員により、修士論文審査を実施することができた。 ・ハイブリッドによる受講環境の下、学生は仕事の状況に応じてタイムリーにオンラインか対面を選択して講義や演習への出席が可能になった。学生の学修ニーズを確認し、必要な文献検索、分析方法など個別に対応した。 ・研究室の整備により、研究室がよく活用され、学生同士のディスカッションが活発に行われるようになった。 ・研究生制度、特別研究生制度を導入し、修了後のフォローにより、学会発表、論文発表につながった。 ・今年度は9名中7名が2年で修了、1名が休学を含め3年で修了した。入学前教育はプレセミナーとして、大学院で学ぶことについて説明し、在学生から学び方や生活について具体的に聞く機会を設けている。 ・大学院担当教員数は、教授9名、准教授8名、講師4名と、指導体制を強化した。				
2.修了生の研究成果の公表を支援する。	Ⅳ	2.修了生への学会発表および論文投稿に向けた指導を継続して行っている。次年度からは個別指導を継続するとともに研究生制度をスタートし、キャンパスの学習環境も整えた。 ・修了生の成果として、学会誌への原著：2、紀要への研究報告：1、学会発表が9（内1名優秀演題賞）、院内報告が2であり、今後に向けて学会誌への投稿中、次年度学会発表にエントリーしている。		Ⅳ	2.修了生への学会発表および論文投稿に向けた指導を継続して行っている。次年度からは個別指導を継続するとともに研究生制度をスタートし、キャンパスの学習環境も整えた。 ・修了生の成果として、学会誌への原著：1件、学会発表が6件あり、今後に向けて学会誌への投稿中、次年度学会発表にエントリーしている。				
「評価指標」 ・学会等での発表および学会誌等への投稿数及び内容の状況			**「評価指標」** ・学会等での発表および学会誌等への投稿数及び内容の状況						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画20-2】㋐ 学生の社会生活と学習を両立できる環境整備を図る。									
「計画達成のための方策」 各種奨学金、補助金等に関する情報収集と獲得及び学生への周知を行うとともに、学生の学べる時間に応じた学習方法の検討を行い、科目履修での学びを勧める。	Ⅲ	1.教育訓練給付制度（専門実践教育訓練給付）の指定を受けているため、申請手続きについて説明し、6名の学生が活用し学費の負担軽減がされている。	**【年度計画20-2】** 1.各種奨学金、補助金等の学生への周知を行う。	Ⅲ	1.教育訓練給付制度（専門実践教育訓練給付）の指定を受けているため、申請手続きについて説明し、M17名,M25名の計12名の学生が活用し学費の負担軽減がされている。				
		2.ハイブリッド型の授業を行っているが、自分の都合の良い時間に学べるｅラーニング等の検討をしていく。	2.学生の学べる時間に応じた学習方法を試行する。		2.ハイブリッド型の授業を行っているが、自分の都合の良い時間に学べるｅラーニング等の検討をしていく。				
		3.科目履修生は2名。	3.科目履修での学びを大学院での学びにつなげる。		3.科目履修生は1名。				
「評価指標」 ・各種奨学金、補助金の獲得状況 ・学生の学べる時間に応じた学習方法の開発状況（e-ラーニングなど） ・科目履修生制度の利用状況			**「評価指標」** ・各種奨学金･補助金の獲得状況 ・学生の学べる時間に応じた学習方法の開発状況（e-ラーニングなど） ・科目履修生制度の利用状況						
【計画20-3】㋐ 修了生の学修継続支援を行う。									
「計画達成のための方策」 修了生の研究成果発表の機会を確保するなどにより、修了生の学修継続支援を行う。 **「評価指標」** ・修了生の学習支援機会の確保数 ・研究成果の発表と投稿数	Ⅲ	・本研究科修了生に対して研究生制度を次年度から開始する予定で2名が応募した。研究生の学習環境として文献検索できるパソコンの設置も行った。	**【年度計画20-3】** 修了生の研究成果発表の機会を確保するなどにより、修了生の学修継続支援を行う。 **「評価指標」** ・修了生の学習支援機会の開催数 ・研究成果の発表と投稿数	Ⅲ	・研究科修了生に対して研究生制度を開始した。2名が応募した。また、他大学修了生が特別研究生として所属できる特別研究生制度を整えた。学習環境として、文献検索ができるパソコンを整備し、研究生等が活用した。 ・学会発表6件、論文1件				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
〇助産学専攻科 **【計画21-1】㋐** 教育理念・教育目標に沿った教育プログラムを構築する。									
「計画達成のための方策」 1.教育理念に則った教育プログラムの確立。 1)明確な教育目標の設定。 2)教育目標に応じたカリキュラムの再構築	Ⅲ	1.母子保健法の改正により、助産師は生後1年までの母子の支援が求められるため、カリキュラム変更を行い「乳幼児の発育・発達とケア」を新規科目として立ち上げた。本科目では、新生児科医師の講義も多く配置し、健診時の診断能力の向上も目指している。	**【年度計画21-1】** 1.教育理念に則った教育プログラムの確立。 1)明確な教育目標の設定。 2)教育目標に応じたカリキュラムの再構築	Ⅳ	1.教育理念に則った教育プログラムの確立 1)明確な教育目標の設定。 2)教育目標に応じたカリキュラムの再構築 母子保健法の改正に伴い、産後ケアの対象は1年までの母子となったため、「地域母子保健学」や「乳幼児の発育・発達とケア」の講義内容を強化し実施した。				
2.新しい教育制度の導入 1)主体的な学修を促す教育方法の導入 2)ルーブリック評価法などを活用し、学生へもわかりやすい評価の提示 3)CBT・OSCEの実施 4)裂傷縫合・経腹エコーの技術の獲得		2.CBTやOSCEが今後、国家試験での新規取り組みとして導入が見込まれるため、全国助産師教育協議会での取り組みにも参加し、プログラム作成に携わった。今後、1年課程への導入方法に関して検討していく。 裂傷縫合演習は今年度も実施した。経腹エコーは機器の購入が図られた。次年度以降演習内に取り入れていく。	2.新しい教育制度の導入 1)主体的な学修を促す教育方法の導入 2)ルーブリック評価法などを活用し、学生へもわかりやすい評価の提示 3)CBT・OSCEの実施 4)裂傷縫合・経腹エコーの技術の獲得		2.新しい教育制度の導入 1)主体的な学修を促す教育方法の導入 2)ルーブリック評価法などを活用し、学生へもわかりやすい評価の提示 3)CBT・OSCEの実施 4)裂傷縫合・経腹エコーの技術の獲得 CBTの作問やOSCEの評価者研修に参加し、本学の教育でも実施できるように準備している。 東京母性衛生学会のチーム医療研修に参加し、産科危機的出血への助産師による一次対応や腹壁エコーなどの実践を教育に還元した。				
「評価指標」 ・新しい教育制度の導入状況 ・主体的な学修を促す教育方法の導入状況			**「評価指標」** ・新しい教育制度の導入状況 ・主体的な学修を促す教育方法の導入状況						
【計画21-2】㋐ 産後ケアセンターでの実習を通し、地域の母子を支援する。									
「計画達成のための方策」 1.アーリー・エクスポージャーの一環として、産後ケア研究センターなど、現場で働く助産師活動に触れる。	Ⅲ	・産後ケア研究センターにおいて、地域で生活している母子の現状と実際の支援に触れることができ、助産学専攻科生全員の実習施設として成立している。 ・母子支援クラスの開催によって、地域の母子の実際や支援ニーズを学ぶ機会となった。 ・地域母子保健学の講義内で、地域や海外で活躍する医療職の話を聞き、異なる文化圏における学習の機会を設けた。 ・各講習会を受講し実践演習を行った後、試験に合格して資格認定を受けた。 ・実習受け入れ人数や受け入れ期間の減少などあるが、学内実習での補充も含め、10例程度の分娩介助を確保できた。 ・母子保健法の改正により、産後ケアの対象は産後1年までの母子となったことから、「助産診断・技術学」や新設した「乳幼児の発育・発達とケア」において、1年までの母子を診る力の向上に努めている。	**【年度計画21-2】** 1.訪問型、日帰り型に追加して通所型の開設。 2.助産学専攻科、母性看護学生、大学院生の産後ケア研究センター実習。	Ⅳ	1.2.助産学専攻科の助産学実習にも産後ケアや地域活動の授業や演習を取り入れ、産後ケアの学内および品川区の地域活動にも実習として地域参加させている。 ・母子支援に関するシンポジウム内容の投稿を学会誌に投稿ができ、これも助産学専攻科の授業・演習・実習に取入れ教授活動している。 ・日帰り型、訪問型、電話訪問・電話相談の検討と通所型、外来機能などへの拡大の内容を産後ケア研究センターに実習させ体験させることができている。将来の地域活動の教育を図れている。 ・地域母子支援の助産師活動への参加機会の確保　2～3回／年 助産実習1週間ずつ、20名全員が実習に行けている。 ・育児クラスとして品川区在住の母子（父親含む）を1・2か月の母子、3・4か月の母子を対象に約10名ずつ3回企画・運営し貢献できた。				
2.地域や海外で助産師活動に従事する講師の招致。 3.NCPR、受胎調節実地指導員講習会の開催。 4.1人あたり10例程度確実に分娩介助実習を行い、臨床経験の確保。 5.新カリキュラムの検討。									

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
6.地域に貢献できるように、妊産婦・乳幼児健診の実習の機会を増やす。 7.生活の場における地域での母子支援の在り方について考えていける。									
「評価指標」 ・実習の受入れ状況			**「評価指標」** ・実習の受入れ状況						
【計画21-3】㋐ 大学と臨床施設との連携を図り、大学大学院までのキャリアを見据えた教育を実施する。									
「計画達成のための方策」 1.NCPR講習会や受胎調節実地指導員講習会の開催。	Ⅲ	1.2.産後ケア研究センターの従事者研修会やＮＣＰＲ講習会など、実習施設にも公開し、臨床スタッフの参加も促している。	**【年度計画21-3】** 1.NCPR講習会や受胎調節実地指導員講習会の開催。	Ⅳ	1-5.NCPRインストラクターの新生児科医師等を講師として招聘し、Aコースの講習会を実施し、20名全員が合格した。 ・年度当初の従事者研修会及びブラッシュアップ研修を実施し、学生も聴講した。 ・日本分娩監視研究会等に、学生全員が参加した。 ・2月に全実習施設の指導者及び管理者を招いて助産学実習協議会を実施し、学生の学びを共有し、課題について検討した。 ・実習施設への就職率は30%程度であり、向上を図る必要がある。				
2.産後ケア研究センターの従事者研修会への参加。			2.産後ケア研究センターの従事者研修会への参加。						
3.東京母性衛生学会学術セミナーの参加。			3.東京母性衛生学会学術セミナーの参加。						
4.チーム医療推進助産師研修会への参加。		4.5.オンラインで実習協議会を開催し、今年度の実習指導の振り返りや次年度に向けての検討を行った。今年の卒業生の実習施設への就職率は40%程度であった。	4.チーム医療推進助産師研修会への参加。						
5.実習協議会の開催。			5.実習協議会の開催。						
「評価指標」 ・実習施設への就職率			**「評価指標」** ・実習施設への就職率						
【計画21-4】㋐ 研究レベル向上の為の大学教育プログラムを確立する。									
「計画達成のための方策」 研究レベルに裏付けられた大学での人材育成を図る。 1.体系的なカリキュラムの構築。	Ⅲ	・研究レベル向上の為の大学教育プログラムを確立するために、研究レベルに裏付けられた大学での人材育成を図る計画1-4を立案した。 1.体系的なカリキュラムの構築として、基礎科目から助産の専門科目、論文作成に至るまでを段階的に学べるように、カリキュラムを構築している。	**【年度計画21-4】** ―		―				
2.学部・大学院の一貫教育の導入。		2.首都圏の内部進学者が増加し、学部から助産学専攻科への一貫教育が図られつつある。							
3.国際会議発表の推進。 4.産学連携・地域連携による共同研究の推進。		3.4.産学連携・地域連携による共同研究の推進を図ることで、計画国際会議発表の推進に導けるように取り組んでいる。							
「評価指標」 ・研究レベル向上の為の大学教育プログラムの作成状況			**「評価指標」** ―		―				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画21-5】㋐ 研究レベル向上の為の教育プログラムの確立を図るとともに、学際的・国際的な視点から自分の専門性を認識できる人材育成のシステムを整備する。									
「計画達成のための方策」 研究レベルに裏付けられた大学院での人材育成を図る。 1. 体系的なカリキュラムの構築。 2. 学部・大学院の一貫教育の導入。 3. 国際会議発表の推進。 4. 産学連携・地域連携による共同研究の推進。		—	**【年度計画21-5】** —		—				
「評価指標」 ・年1回以上の学会・研修会への参加 ・勉強会・抄読会の実施状況 ・実践的英語教育の導入状況 ・英語抄録作成クラス開催状況 ・学生の海外学習状況 ・論文の学会発表状況 ・海外論文発表経験者数の状況		—	**「評価指標」** —		—				
【計画21-6】㋐ 助産学専攻科のアメニティ空間の改善を図る。									
「計画達成のための方策」 キャンパス教育環境向上プロジェクトを推進する。 1. 施設のアメニティ空間の改善。 2. グローバル化に対応する施設環境整備。 3. 良質な学修環境整備。	Ⅱ	1-3. 講義教室が大学院と共有であるが、日程調整し、学生の学習環境の確保に努めている。第3別館の教室や階段に関して、学生より整備を求めるオピニオンが出ており、対応が必要である。	**【年度計画21-6】** —		—				
「評価指標」 ・キャンパス空間の整備状況			**「評価指標」** —		—				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画21-7】㋐ 大学ブランドを学生が認めて受験したいと思える大学及び助産学専攻科をつくる。									
「計画達成のための方策」 産学協同体制の構築によるブランド力向上を図る。 1. 卒業生との交流活性化によるPR効果の促進。	Ⅲ	1-3. 産後ケア研究センターでの取り組みや、助産雑誌や育児雑誌、インターネットへの寄稿、ホームページでの紹介などのPR促進効果により、オンラインでの助産学専攻科のオープンキャンパスでは、参加者100名程度と大変盛況であり、本学に進学したいと思ったなどの感想が多かった。内部進学希望者も増加している。	**【年度計画21-7】** 産学協同体制の構築によるブランド力向上を図る。 1. 卒業生との交流活性化によるPR効果の促進。	Ⅳ	1-3. 企業参加の集会や日本母性衛生学会学術集会等で産後ケアのシンポジウムを開催し、大学として設置している産後ケア活動のアピールができた。このような活動を助産師基礎教育の中に取り込み、教授活動している。また、助産学専攻科の助産学実習にも産後ケアや地域活動の授業や演習を取り入れ、産後ケアの学内および品川区の地域活動にも実習として地域参加させている。 ・産後ケア研究センターでの取り組みや、助産雑誌や育児雑誌、インターネットへの寄稿、ホームページでの紹介などのPR促進効果により、オンラインでの助産学専攻科のオープンキャンパスでは、参加者100名程度と大変盛況であり、本学に進学したいと思ったなどの感想が多かった。内部進学希望者も増加している。 ・一般入試志願者倍率は8倍程度であった。				
2. 産学協同研究成果の対外的なPR促進。 3. 地域社会との連携によるPR促進。 4. 特別教授制度による先端研究導入。		4.5. 授業の一環で、海外で活躍する医療職の話を聞く機会を設け、将来のキャリア選択の一助としている。	2. 産学協同研究成果の対外的なPR促進。 3. 地域社会との連携によるPR促進。 4. 特別教授制度による先端研究導入。		4.5. 国際看護・助産学の授業の一環で、海外で活躍する医療職の話を聞く機会を設け、将来のキャリア選択の一助として、国際看護やJICA、災害支援など航路している学生もいる。				
5. 国際交流グローバル化推進。 **「評価指標」** ・一般入試志願倍率5倍以上			5. 国際交流グローバル化推進。 **「評価指標」** ・一般入試志願倍率5倍以上						
○和歌山助産学専攻科 **【計画22-1】**㋐ 「災害と助産」の必修科目を踏まえ、平時から備える能力を養うことで一歩先を見据えた教育を行う。									
「計画達成のための方策」 全国でリスクが高まっている大地震を中心とした災害における周産期医療について専門的に学ぶ「災害と助産」を必修科目に設定したところであり、周産期の母子や多様化するセクシュアリティーにも着目し、平時から備える能力を養う。	Ⅳ	・災害時の助産や母子保健について、備えから発生直後、中長期にわたる避難所生活に至るまで、専門家を招聘してオムニバス方式で授業を行った。 ・アンケートによると「基本的な専門知識が得られた」「新しい考え方や発想が得られた」「総合的に満足できた」の問いに全員が「思う」と回答した。和歌山県の実情に沿った現実的な授業を展開できた。	**【年度計画22-1】** 「災害と助産」履修によって、母子保健における災害時への関心が高まる授業アンケートの実施。	Ⅲ	・災害と助産の講義において、災害時の物品の紹介及び実習施設の災害時の対応を各施設事に紹介し、妊産婦とその家族に出来る支援を共通認識した。 学生からの授業アンケートの回答では、災害時に助産師として何が出来るか考える機会となった事とその責務を考えることができた等の回答が得られた。講義の重要性が理解できた。				
「評価指標」 ・「災害と助産」履修によって、母子保健における災害時への関心が高まる授業アンケートの実施状況			**「評価指標」** ・「災害と助産」履修によって、母子保健における災害時への関心が高まる授業アンケートの実施状況						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画22-2】㋐ 必修科目の「カウンセリング論」を踏まえ、喪失体験者への接し方について演習を通して学び、寛容、愛、心温かい医療人としての態度を修得する。									
「計画達成のための方策」 必修科目に「カウンセリング論」を編成し、非常勤講師に公認心理師兼臨床心理士兼大学病院でのカウンセラーの授業を通して、ペリネイタルロスなど喪失体験者への接し方について演習を通して学び、寛容、愛、心温かい医療人としての態度を修得する。	Ⅳ	・昨年同様、大学病院で周産期のペリネイタルロスなどを支援している専門のカウンセラー（公認心理師）を非常勤講師に招いて、臨床の実践的な演習も踏まえた授業科目を開講できた。アンケートを閲覧できなかったが、学生の声を聴くと授業は好評で、有意義な時間だったと述べていた。	**【年度計画22-2】** 「カウンセリング論」履修によって、心温かい医療人としての接し方について理解する、授業アンケートを実施する。	Ⅳ	・カウンセリング論では非常勤の心理カウンセラーの授業を受け、様々な対象事例の提示と対応（傾聴と対象を肯定する態度）を学んだ。その後、助産技術学演習科目において学内で指導案作成と演習を行い、さらに助産実習1.2では多くの対象に指導案を作成し対象理解の難しさと高度な対応が必要である事を学ぶ機会となった。指導者からの指導を受けながら実施した。対象からの評価は高く臨床からは倫理的対応が理解できた実施であったことを評価された。				
「評価指標」 ・「カウンセリング論」履修によって、心温かい医療人としての接し方について理解する授業アンケート実施			**「評価指標」** ・「カウンセリング論」履修によって、心温かい医療人としての接し方について理解する授業アンケート実施						
【計画22-3】㋐ 一歩先を見据えながら助産を創造し、地域周産期医療向上に寄与できる助産師の育成を図る。									
「計画達成のための方策」 和歌山看護学部から進学を希望する者及び地域周産期医療への貢献を希望する受験生を、西日本を中心に広くリクルートし、優秀な人材を確保する。また、修了後は助産師国家試験に合格し、希望する就職ができるよう支援する。	Ⅲ	・令和5年度までは実習施設の確保の問題から定員は8名としたが、入学辞退者が1名出て7名の入学者で開講した。入学者7名全員が単位を取得し、修了することができた。 ・令和6年度からは定員10名の入学者を予定していたが、学部内受験者数が3名、学外受験者数も7名とどちらも昨年よりも少なく、合格辞退者1名が出た結果9名の入学予定者で開講することとなった。学部内進学希望は多かったものの最終的に受験につながらず、奨学金返済の課題が再度浮上した。また学外からの受験者も減少し、リクルート方法も検討していく必要がある。 ・就職率は令和5年度も100%で、助産師国家試験は全員が受験した。	**【年度計画22-3】** 定員充足率を100%とする。助産師国家試験合格率100%、就職率100%とする。	Ⅳ	・看護学部からの進学希望者への説明会の開催と個別相談に応じた。また関西地区以外に中部、九州地区の進学希望者への個別相談に応じた。結果、定員充足率は100%であった。 ・助産師国家試験に向け対策講義を実施し個別の指導も行い、合格率100%であった。 ・就職試験前には模擬面接と指導を実施した。希望する就職先に全員採用された。				
「評価指標」 ・定員充足率の状況 ・助産師国家試験合格率、就職率の状況			**「評価指標」** ・定員充足率の状況 ・助産師国家試験合格率、就職率の状況						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画22-4】 ㋐ 国際的視野と研究力を備え、国際母子保健分野で将来リーダーとなる資質を養成する。 **「計画達成のための方策」** グローバル化の問題を解決するための「国際母子保健活動論」及びリアルタイムで世界の母子保健情勢を英語で学ぶ「英語文献講読（必修科目）」の履修、加えて大規模な専門分野の学会参加も含めて、国際的視野と研究力を備え、国際母子保健分野で将来リーダーとなる資質を養成する。 **「評価指標」** ・ガイダンスで「国際母子保健活動論」の履修または聴講状況 ・学会への参加状況	Ⅳ	・ガイダンスで昨年同様に意義を説明し、全員が選択した。授業アンケートを閲覧できなかったが、担当教員からは学生が熱心に受講していたと聞くことができた。 ・令和5年度も日本母性衛生学会学術集会に学生全員が参加し、国際母子保健について視野を広め、リーダーの資質の基盤ができたと考える。	**【年度計画22-4】** ガイダンスで「国際母子保健活動論」の選択の必要性を説明し、学生全員が履修または聴講する。学会に1回参加する。 **「評価指標」** ・同左	Ⅳ	・国際母子保健活動論では全員履修し、遠隔授業ではマラウイで現在活動中の助産師から現実と可能性を学ぶことができた。学生のこれからの活動の場所が広がりグローバルな視点を持つことができた。その為の語学力を磨く、外国論文を読み解く必要性を学ぶことが出来た。 ・学会へは全員参加した。				
○感染制御学教育研究センター **【計画23-1】** ㋐ 「感染制御実践看護学講座」を継続するとともに、COVID-19パンデミックを経験し、感染制御に関わる人材育成について、本学がどのように貢献できるのか、引き続き検討していく。 **「計画達成のための方策」** 1.「感染制御実践看護学講座」の継続。 2. COVID-19パンデミックを経験し、感染制御に関わる人材育成についての検討。 **「評価指標」** ・合格者数20名～25名を維持	Ⅲ	1.24名の入学者全員が修了し「感染制御実践看護師」を授与した。 2.「修了試験」に合格することが卒業認定の重要ポイントとして位置付けているが、それ以外に前期修了時点で実施する「科目試験」、自施設実習修了時点での「成果発表」、そして外部委員により審査を経て総合的に評価している。 3.アンケートは終了し、集計中。 4.令和5年の研修生の応募数は定員の2倍に及び、関心の高さをうかがえた。本研修会は診療報酬上の施設基準「適切な研修」と認められており、わが国の医療施設の感染対策を担う人材育成機関として大きく貢献していており、今後も本体制を維持しつつ継続していく。	**【年度計画23-1】** 1.合格者数を20名～25名程度を維持する。 2.新設した「修了試験」を含め、適宜、カリキュラム全体を見直していく、 3.時代背景を踏まえ、最も臨床現場に貢献できる感染制御の有資格者の育成について、多方面から考慮し、本学の方針も踏まえ検討する。 **「評価指標」** ・合格者数20名～25名を維持	Ⅲ	1.19名の入学者全員が修了し「感染制御実践看護師」を授与した。 2.「修了試験」に合格することが卒業認定の重要ポイントとして位置付けているが、それ以外に前期修了時点で実施する「科目試験」、自施設実習修了時点での「成果発表」、そして外部委員により審査を経て総合的に評価している。 3.アンケートは終了し、集計中。 4.本研修会は診療報酬上の施設基準「適切な研修」と認められており、わが国の医療施設の感染対策を担う人材育成機関として大きく貢献しており、今後については体制及び内容を検討していく。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画23-2】㋐ JHAI誌発刊を継続するとともに、高齢者施設医療従事者に対する感染制御の知識普及のためのセンターで可能な「研修」の在り方など情報収集を行う。									
「計画達成のための方策」 1.JHAI誌発刊の継続。	Ⅳ	1.予定通り年2刊発刊。	**【年度計画23-2】** 1.年2回の発刊を維持していく。	Ⅲ	1.年2回発行し、本学HP上で公開した。次年度より年1回の発行となる。				
2. 高齢者施設医療従事者に対する感染制御の知識普及は喫緊の課題となっていることから、センターで可能な「研修」の在り方などの情報収集。		2.計画「2」に関しては昨年同様、「高齢者施設従事者」対象の感染制御に関する研修は、現状のセンターの運営体制では企画自体難しく、高齢者施設従事者をサポートする「感染制御実践看護師」の育成に注力していく。	2.センターで可能な高齢者施設従事者への研修体制を構築する。又は高齢者施設の感染制御の底上げのためにセンターで貢献できることを検討する。		2.「高齢者施設従事者」対象の感染制御に関する研修体制の構築は、現状の運営体制では企画事態難しく構築するに至らなかった。そのため、高齢者施設の感染制御の底上げのために、高齢者施設従事者をサポートする「感染制御実践看護師」の育成に注力した。研修体制構築を担当していた者の退職により、次年度に研修体制を構築することが困難であることから、高齢者施設の感染制御の底上げのために、「感染制御実践看護師」の育成に注力していく。				
「評価指標」 ・JHAI誌発刊年2回の発行維持 ・高齢者施設従事者への研修体制の構築状況			**「評価指標」** ・JHAI誌発刊年2回の発行維持 ・高齢者施設従事者への研修体制の構築状況						
〇産後ケア研究センター **【計画24-1】**㋐ 産後ケア研究センターでの実習を通し、地域の母子を支援する。									
「計画達成のための方策」 1. アーリー・エクスポージャーの一環として、産後ケア研究センターなど、現場で働く助産師活動に触れる。 2.地域や海外で助産師活動に従事する講師の招致。 3.地域に貢献できるように、妊産婦・乳幼児健診の実習の機会を増やす。 4.生活の場における地域での母子支援の在り方について検討する。	Ⅳ	・地域の母子を対象とした集団教育を計3回実施し、合計21組の母子が参加した。 ・助産師学生20名が、地域母子保健学の演習や助産学実習Ⅴの実習内で、地区踏査や家庭訪問の実際、助産管理実習を実施した。 ・母性看護学実習で8名、統合実習で10名、実習の受け入れを行った。	**【年度計画24-1】** 1.訪問型、日帰り型に追加して通所型の開設。 2.助産学専攻科、母性看護学生、大学院生の産後ケア研究センター実習。	Ⅳ	・実習の受け入れ状況 助産学専攻科：20名　1週間ずつ、母性看護学生：看護の統合の学生を4年間の学習を研究的にまとめることが12名のゼミ生、全員が麻取ることができた。大学院生：2月年4名の院生が従事者の助産師とともに実習できている。				
「評価指標」 ・実習の受け入れ状況			**「評価指標」** ・実習の受け入れ状況						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画24-2】 ㋐ 大学と品川区との連携を図り、大学院までのキャリアを見据えた教育を行う。 **「計画達成のための方策」** 1. 産後ケア研究センターの従事者研修会への参加。	Ⅳ	1. 産後ケア研究センターの従事者研修会は年度当初、3日間に渡り実施し、年度途中にブラッシュアップ研修も実施しており、参加者数は約15名であった。	**【年度計画24-2】** 1. 産後ケア研究センターの従事者研修会への参加。	Ⅳ	1-3. 対面だけでなく、オンデマンドでも参加を促し、全員が参画している。研修に、品川区も行政の立場として参加している。 ・学会への参加も促せている。 ・チーム医療推進助産師研修会への参加を促し、シミュレーション研修で実践につなげることができてきている。 ・全員参加できるように、対面だけでなくハイブリッド方式で実施したり、当日参加できない場合は動画にて視聴できるように工夫して全員参加できている。				
2. 東京母性衛生学会学術セミナーの参加。			2. 東京母性衛生学会学術セミナーの参加。						
3. チーム医療推進助産師研修会への参加。 **「評価指標」** ・研修会の参加者数、参加回数		3. チーム医療推進助産師研修会は、4名が参加した。	3. チーム医療推進助産師研修会への参加。 **「評価指標」** ・研修会の参加者数、参加回数						
【計画24-3】 ㋐ 産後ケア研究センターのアメニティ空間の改善を図る。 **「計画達成のための方策」** キャンパス教育環境向上プロジェクトを推進する。 1. 施設の長寿命化及び更新（アメニティ空間の改善）。	Ⅳ	1-3. 事務職員や従事者が働きやすい環境となるよう、配置転換を行った。看護学科学生や助産学専攻科生の実習受け入れに関して、保健センター内の産後ケア室の開設により、学生が学修しやすい環境整備を図った。	**【年度計画24-3】** キャンパス教育環境向上プロジェクトを推進する。 1. 施設の長寿命化及び更新（アメニティ空間の改善）。	Ⅳ	1-3. 施設内の整備は難しいが、物品（スマートフォン：訪問先のマップ案内、必要時の撮影、電動自転車・訪問バック・日帰り型で使用するおもちゃや育児用品等の追加購入、訪）などの整備は実施できている。 ・海外派遣者からの講義など、聴講できている。 ・勤務や帳票、カルテの電子化など、少しずつであるが検討して、学習や職場環境の整備に取り組む準備をしている。 ・希望や意見をブラッシュアップ研修などで聴取し、上記の要望を取り入れ整備に努められてきている。				
2. グローバル化に対応する施設環境整備。			2. グローバル化に対応する施設環境整備。						
3. 良質な学修環境整備。 **「評価指標」** ・キャンパス空間の整備状況			3. 良質な学修環境整備。 **「評価指標」** ・キャンパス空間の整備状況						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画24-4】 ㋐ 産学協同体制の構築によるブランド力向上プロジェクトの推進を図る。									
「計画達成のための方策」 産学協同体制の構築によるブランド力向上を図る。 1. 卒業生との交流活性化によるPR効果の促進。	Ⅳ	1-3. 産後ケア研究センターでの取り組み内容について、助産雑誌や育児雑誌、インターネットへの寄稿、ホームページでの紹介などのPR促進効果により、利用者数が維持されている。卒業生も従事者として勤務し、交流が図られている。 4. 5. 外国籍の利用者は今年度は5名おり、外国語の問診票を使用するなどして対応し、保健センターからも外国籍の対象者の紹介があり、区との協力体制も調整できてきている。	**【年度計画24-4】** 産学協同体制の構築によるブランド力向上を図る。 1. 卒業生との交流活性化によるPR効果の促進。	Ⅲ	1-5. 卒業生との交流を図り、卒業生が産後ケア事業に従事してくれるようになってきている。 ・産学協同研究成果の対外的なPR促進については、取り組んではいるが達成には至っていない。 ・育児クラスや個別相談、集団教育などに取り組み、品川区と連携しパンフレット配布等の広報活動も実施している。 ・国際交流グローバル化推進については、取り組んではいるが達成には至っていない。 ・学会参加やシンポジウム開催、専門誌に投稿するなど、事業の紹介や広報活動を実施している。そのことにより、助産学専攻科や大学院などの受験に繋がっている。				
2. 産学協同研究成果の対外的なPR促進。			2. 産学協同研究成果の対外的なPR促進。						
3. 地域社会との連携によるPR促進。			3. 地域社会との連携によるPR促進。						
4. 特別教授制度による先端研究導入。			4. 特別教授制度による先端研究導入。						
5. 国際交流グローバル化推進。			5. 国際交流グローバル化推進。						
「評価指標」 ・ブランド力向上プロジェクトの推進状況			**「評価指標」** ・ブランド力向上プロジェクトの推進状況						
○学長戦略本部等 **【計画25-1】** ㋐**（総合研究所）** 健康情報基盤研究ユニット（TIS）、ヘルスシステムデザイン研究ユニット（ビーンズ）、教育DX研究ユニット（文科省補助）の三本柱となる研究ユニットを立ち上げる。									
「計画達成のための方策」 すべての学部・学科の教員が関与する形で、3つの各研究ユニットによる研究成果（論文・書籍・知的財産等）が生まれ、その成果を授業に還元する。	Ⅲ	・新たに提携を行った京急サービス社との連携を深め、同社主催へ各種イベントへの本学の参加や連携しての新規事業への参画を図るなどにより、研究ユニットの活動推進を図った。 ・ヘルスシステムデザイン研究ユニットでは、台湾の提携先がカナダで展開しているホームケア支援システムを日本にローカライズするための研究に着手した。	**【年度計画25-1】** 3つの研究ユニットで、研究計画に基づき研究活動を行う。	Ⅳ	・健康情報基盤研究ユニットについては、助成元企業との契約期間の満了に伴い、活動を締めくくる活動に専念した。 ・教育DX研究ユニットについては、「教育」の冠を外してDX研究ユニットとして幅広く活動した。とくに京急サービス社との連携により横須賀市の健康・スポーツ行事に延べ3日間参加し、各日とも100名以上の参加者を集めた。同活動は、地域住民の健康状態を可視化する意味でDX的な要素もあるが、デジタル手段に限らず幅広く地域の企業等を産学連携を考える方が建設的ともいえる。これらを踏まえて両ユニットを再編統合し、令和7年度からは「コミュニティ連携研究ユニット」として再出発することとした。 ・ヘルスシステムデザイン研究ユニットにおいては、「看護DX実践ガイド」の刊行を支援するほか、国際学会での学生の発表2件を支援した。				
「評価指標」 ・3つの各研究ユニットの設置状況、研究成果の状況			**「評価指標」** ・3つの各研究ユニットの設置状況、研究成果の状況						

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画25-2】 ㋐(総合研究所) ヘルスシステムデザイン研究ユニットの主管により、学生を巻き込んだ研究共創行事として「ジャックと豆の木ワークショップ」を推進する。									
「計画達成のための方策」 学生有志と教職員の研究共創行事である「ジャックと豆の木ワークショップ」で生まれたアイディアに基づく研究から研究成果（論文・書籍・知的財産等）が生まれ、その成果を授業に還元する。	Ⅳ	・京急サービス社が主催する横須賀市のイベントに、ゴールデンウイークとスポーツの日の2回参加した。医療栄養学科、医療情報学科の教員が中心となり、学科学生も参加して「子ども向け野菜クイズ」「よこすか野菜を使った試食提供」「骨密度測定」「頸動脈エコー体験」など種々の『健康チェック』のイベントを企画して、参加者に提供した。 ・京急サービス社、本学を含む三者による共同事業体を結成し、京急沿線の自治体が募集した体育施設の指定管理の競争入札に参加した。本学としては同施設を利用しての公開講座や健康イベントの開催、及び五反田キャンパスの地元である品川区との連携・深耕を意図して、全学体制でチャレンジしたが、残念ながら落札には至らなかった。	**【年度計画25-2】** ・「ジャックと豆の木ワークショップ」を継続し、そこで生まれたアイディアを還元し、研究プロジェクトなどの立ち上げを検討する。また、成果の一部を授業に還元する方法を検討する。 ・令和5年度よりスタートした京急サービス(株)との提携による各種の共同イベントや研究を推進する。	Ⅳ	・ジャックと豆の木ワークショップについては、本学と産学連携協定を締結している株式会社ケアコムの支援を受け、6月1～2日の2日間、群馬県内の同社工場において開催した。参加学生数は8名であった。 本行事では、群馬県内にベトナム人労働者が多いことから、同社とも良好な関係にある「日越ぐんま友好協会」の山本会長の協力を得て、異文化交流も行った。このご縁がさらに広がり、同協会からのご紹介でメコン大学（ベトナム語：クーロン大学）から提携のご依頼をいただき、9月には在日ベトナム社会主義共和国大使館において、両校学長の出席、及び臨時代理大使お立合いのもとで予備的MOUの締結に至った。 今後、単発的なイベントに留まらず、単位互換などより幅広い提携に向けた検討を進めていく。 ・京急サービス社との連携については、【年度計画25-1】に記載済み。				
「評価指標」 ・「ジャックと豆の木ワークショップ」の開催状況、研究成果の状況			**「評価指標」** ・「ジャックと豆の木ワークショップ」の開催状況、研究成果の状況 ・京急サービス社とのコラボイベント、共同事業の実施状況						
【計画25-3】 ㋐(総合研究所) 教育ＤＸ研究ユニットの主管により、高校教員、大学教員がともに教育ＤＸを学ぶ場としてオンラインシンポジウムを開催する。									
「計画達成のための方策」 DX演習科目における授業満足度及びICEモデルによる自己評価が、DX以前よりも20%以上向上する。 **「評価指標」** ・DX演習科目における授業満足度及びICEモデルによる自己評価の状況	Ⅲ	・前年度の授業設計を受けて、複数の学部の全体および一部の科目において、ICEモデルの本格運用を行った。授業満足度については、引き続き評価について分析を行っている。 ・株式会社ケアコムとの連携により、同社のケア環境研究所（群馬県）でのコメの栽培を通じて、デジタル教材を活用した食育の展開を、医療栄養学科及び青葉学園野沢こども園とともに図り、左記分野の中で「産業DXユニット」での活動を推進した。	**【年度計画25-3】** 教育ＤＸ研究ユニットでは、「令和7年度入学者向け入学前プログラム」の実施に対応するため、「学修成果の把握・可視化となるＤＸによる全学的評価指標」の検討及び計画案をＩＲ推進室と連携して策定する。 **「評価指標」** ・上記計画案の策定と計画案の報告書提出状況 ・関連部署との検討会の開催や外部有識者等からの意見聴取の状況	Ⅲ	・ICEモデルについては一段落したため、当初の趣旨にそって「産業DXユニット」の実績を正規授業に落とし込む作業に専念した。その結果、株式会社ケアコムとの協定書に基づく「インターンシップ（企業）」を開講し、14日間の実習を行うことができた。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
【計画25-4】㋐(総合研究所) 健康情報基盤研究ユニットの主管により、萌芽的研究に対する学内助成活動を推進する。 **「計画達成のための方策」** 学内助成活動による研究成果や社会活動から、研究成果（論文・書籍・知的財産等）が生まれ、その成果を授業に還元する。 **「評価指標」** ・学内助成活動による研究成果や社会活動からの研究成果の状況	Ⅱ	・ユニットにおいて昨年度の助成対象者や外部資金の獲得テーマについてレビューを行い、事業化可能性について検討をした。 ・合わせて、オンラインセミナーの次年度実施について計画した。	**【年度計画25-4】** 健康情報基盤研究ユニットにおいて、大学が社会的・技術的変化に適切に対応できるよう、教育方法の改善等を行うとともに、セミナー等の開催を通じ学内への情報発信を行う。 **「評価指標」** ・教育方法の改善状況 ・セミナー等の開催状況	Ⅱ	・さらなる産学連携の推進については、2024年12月に学研グループとの連携推進協定を締結し、新たな活動の可能性を模索することとした。また、メコン大学など海外との提携が増えていることも踏まえ、インテグリティに関する規程整備を行い、科研費説明会に併せて学内周知を行った。なお、同大学との連携については、シンクタンクを通じた受託研究契約の調整・準備等を行った。 本年度はこうした体制整備に注力しており、個別の活動成果を得るには至っていないが、2025年度以降には、これらの提携関係を活かして積極的な活動を行ってまいりたい。				
【計画25-5】㋐(ＩＲ推進室) IR推進室として、中期目標・計画やアクションプランに基づく諸活動について点検評価を行う際、定量データに基づく評価・分析、情報の共有を行い、引き続き「全学的な見える化」を推進する。 **「計画達成のための方策」** 1.授業や学生生活など教学の根幹に関わる事項について横断的な情報収集・分析を行うことにより、「全学的な見える化」を推進する。 **「評価指標」** ・学生の学修に関する実態調査アンケートの回答率（継続）90% ・授業評価アンケートの回答率（継続）90% ・分析結果に対する感想や意見の件数　年10件	Ⅱ	1.学生の学修に関する実態調査アンケートの回答率は69.9%、授業評価アンケートの回答率は70.3%と、いずれも目標を下回った。回収率向上のための取り組みを次年度検討したい。 ・2023年度は、分析結果について他大学IR推進室と意見交換会を行うことを優先したため、「感想や意見の件数」は算定不能である。意見交換会の結果、LMS利用時間という指標を有効活用することをはじめ、その結果を学内公開し始めたので、2024年度はその公表を行っていきたい。	**【年度計画25-5】** 1.授業や学生生活など教学の根幹に関わる事項について横断的な情報収集・分析を行うことにより、「全学的な見える化」を推進する。 **「評価指標」** ・学生の学修に関する実態調査アンケートの回答率（継続）90% ・授業評価アンケートの回答率（継続）90% ・分析結果に対する感想や意見の件数　年10件	Ⅱ	1.学生の学修に関する実態調査アンケートの回答率は79.6%、授業評価アンケートの回答率は72.7%であった。特に回収率の悪い学部には、その旨の説明と回収率向上のための具体的な対応策を考えるように指示した。 ・分析結果についての感想や意見について、IR推進室運営会議で、各キャンパスの状況を情報収集するとともに、FormsにてIR推進室会議メンバーならびに各学部からのデータを「教学改善及び学修成果の可視化：IR推進室　運営会議　2024.11.22】として収集した。意見としては10件、データ指標の提案は12件あった。 ・また、「医療保健学研究科修了生による3P（DP/CP/AP）に対する修了後評価 -2019年度から2023年度の医療保健学研究科の現状・課題- 」の報告を受け、教育改善事例として公表を実施した。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
2.高等教育に求められる役割が変化している情勢を十分に踏まえ、学修成果の可視化を図る基盤を整備する。 **「評価指標」** ・アセスメント・プランに基づく学修成果の定量的評価指標（ディプロマ・サプリメント）分析結果の報告件数（新規）年2回 ・学修成果を可視化するためのデータ基盤整備＜キャンパス・プラン整備＞（継続） ・高等教育関係団体や他大学からの情報収集（継続） ・他大学研修会や高等教育に関する学会・研究会における活動報告件数　年2回	Ⅲ	2.他大学IR推進室との交流は活性化し、2つの医療系大学と意見交換を行うことができた。 ・ディプロマサプリメントの分析結果は、IR年報を通じて学内にフィードバックできた。	2.高等教育に求められる役割が変化している情勢を十分に踏まえ、学修成果の可視化を図る基盤を整備する。 **「評価指標」** ・アセスメント・プランに基づく学修成果の定量的評価指標（ディプロマ・サプリメント）分析結果の報告件数（新規）　年2回 ・学修成果を可視化するためのデータ基盤整備＜キャンパス・プラン整備＞（継続） ・高等教育関係団体や他大学からの情報収集（継続） ・他大学研修会や高等教育に関する学会・研究会における活動報告件数　年2回	Ⅲ	2.「大学全体レベル・学位プログラムレベル・授業科目レベル」のアセスメント・プランのCP評価の一つである「授業評価アンケート」の項目が正しくCP評価につながるような項目になっていないことについて、学長戦略本部にて議論した。その結果、「教学マネジメント・チェックリスト」に基づき、それぞれのレベルにて正しく評価が可能なように対応させ、項目を修正した。また、教員評価制度と紐づけられるように項目の1-10は教員の資質・能力の測定指標として明確に記載し、報告した。また、学修成果を可視化するデータ基盤の整備の一つとした。 ・アセスメント・プランのAP評価である「入学前教育」「プレイスメントテスト」がこれまで、学位プログラムレベルごとで統一されていなかった課題に対して、令和６年度は全学統一とすることを学長戦略本部にて、決定した。令和６年度の１２－２月に入学前教育を実施し、その結果は、内部質保証会議にて報告した。また、プレイスメントテストは令和7年4月1,2日に全学で統一実施できるように調整・企画し、学修成果の可視化のデータ基盤整備を行った。 ・その他結果も実施し、学部長等会議・内部質保証会議で報告した。令和6年度のディプロマサプリメント含め、全体結果は、令和7年度にIR年報として発行できるよう作成中である。ディプロマサプリメントの分析結果は、IR年報を通じて学内にフィードバックできた。他大学IR推進室との交流を実施し、医療系大学と意見交換を行うことができた。 ・高等教育関係団体や他大学からの情報収集は、引き続きメール配信やHPから行った。特に、「中教審第255号我が国の「知の総和」向上の未来像～高等教育システムの再構築～（答申）」による新たな認証評価に関する情報収集に努め、全学教務委員会等を通して情報提供を実施した。 ・第56回医学教育学会「第6回医療系IR友の会ミーティング～あなたのIR活動、未来に繋がっていますか？」などに参加し、意見交換を行った。				
3.活力あふれる大学づくりを推進するため、情報分析の結果を積極的に還元する。	Ⅱ	3.広報媒体については、2022年度まではCOVID-19対策本部が発行する「遠隔授業だより」にIRデータを提供する形をとることが多かったが、2023年度の途中で同本部が解散となったため、どの媒体を用いるのが効果的かはまだ検討段階である。 ・研究業績については、2023年度中に研究力強化会議が設置されたことから、同会議とも連携して研究パフォーマンス指標の策定を検討していく。	3.活力あふれる大学づくりを推進するため、情報分析の結果を積極的に還元する。	Ⅲ	3.令和6年度は学長戦略本部にて、IR推進室からのデータ分析結果の還元について、議論した。その結果、IR推進室から公表されるデータが教職員・学生・そして社会に分かりやすい形での還元（情報公表）が実施できていないのではないかという課題が挙げられた。そこで、IR推進室にて、IR推進室のHPの開設を行った。IR推進室のHPを作成し、データ公表できる体制を構築した。また、IR年報の作成を行い、全学教職員にIR年報を発信するとともに、IR推進室HPでの情報公表を行った。				

第3期中期計画	評価区分	令和5年度実績	令和6年度計画	評価区分	令和6年度計画達成状況	評価区分	自己点検・評価委員会	評価区分	内部質保証推進会議
「評価指標」 ・広報媒体の発行件数（IR News・IR年報の刊行）年2回 ・学生向け広報媒体の発行件数 年2回 ・研究業績に関する分析の検討（新規）			**「評価指標」** ・広報媒体の発行件数（IR News・IR年報の刊行）年2回 ・学生向け広報媒体の発行件数　年2回 ・研究業績に関する分析の検討（新規）						
【計画26】【計画2の再掲】 **(学長戦略本部・企画部)** 教育の質保証の観点から、毎年度定期的に自己点検・評価及び検証を行い、その結果について外部評価を実施し公表する。また、学長直轄の学長戦略本部を中心に、より適切なものとなるよう外部評価結果等を踏まえ、教育課程及び教育方法等の改善・充実を図る。 **「計画達成のための方策」** 学長直轄の学長戦略本部を中心に、全学的な教学マネジメントシステムを構築するとともに、「教学マネジメントチェックリスト(仮称)」を運用し、「大学全体レベル」、「学位プログラムレベル」、「授業科目レベル」毎に自己点検・評価及び検証等を行いながら、内部質保証システムのPDCAサイクルを構築する。	Ⅳ	・入学者受入れの方針に基づく大学入学者選抜の実施に関する「教学マネジメント指針(追補)(令和5年2月24日)」が文部科学省から発出されたことを踏まえ、学長戦略本部の担当プロジェクトチームにおいて、「教学マネジメントチェックリスト【Ver.2】」の改正案を策定し、令和5年7月12日開催の内部質保証推進会議において審議・承認されたので、改正版を7月13日付で学内関係者に周知した。 ・また、「アセスメントプラン」についても、日本私立学校振興・共済事業団からの指導等も踏まえ、評価指標を追加する等のため担当プロジェクトチームにおいて改正案を策定し、令和5年10月18日開催の内部質保証推進会議において審議・承認されたので、改正版を10月23日付で学内関係者に周知した。 ・令和5年度から「教学マネジメントチェックリスト」に基づく点検・評価を本格実施することから、教員のＦＤ・ＳＤ活動及び事務職員のＳＤ活動の一環として、全教職員が参加する「東京医療保健大学を語る会」を令和5年10月25日に開催し、「教学マネジメントチェックリストに基づく点検・評価の実施に向けて～具体的な取組の視点について～」をテーマとし、医療保健学部看護学科 西村礼子准教授及び東が丘看護学部看護学科竹内朋子教授より発表をいただき、「教学マネジメントチェックリスト」の取組について活発な意見交換を行い、教職員の理解を深めることができた。 ・「令和5年度計画の達成状況に基づく自己点検・評価報告書作成要領」及び「令和5年度教学マネジメントチェックリスト作成要領」について、担当プロジェクトチームにおいて要領案を策定し、令和5年12月6日開催の内部質保証推進会議において審議・承認されたため、同要領及び報告書様式等を12月19日付で学内関係者に周知した。 ・「令和5年度計画の達成状況に基づく自己点検・評価」については、部局内で3月末までに実施し報告書を作成し、また「令和5年度教学マネジメントチェックリストに基づく自己点検・評価」については、部局内で「学位プログラムレベル」、「授業科目レベル」ごとに令和6年5月末までに実施し、「学位プログラムレベル」について報告書を作成した上で、それぞれ企画部宛提出することとした。 ・これらの取組は、全て計画通り実施することができた。	**【年度計画26】** 学長直轄の学長戦略本部を中心に、全学的な教学マネジメントシステムを構築するとともに、「教学マネジメントチェックリスト(仮称)」を運用し、「大学全体レベル」、「学位プログラムレベル」、「授業科目レベル」毎に自己点検・評価及び検証等を行いながら、内部質保証システムのＰＤＣＡサイクルを構築する。	Ⅳ	・「教学マネジメントチェックリスト」及び「アセスメントプラン」に基づき、本学が定める3つのポリシーに基づいて教育課程等が有効に機能しているか等を「大学全体レベル」、「学位プログラムレベル」、「授業科目レベル」ごとに点検・評価を実施したが、そのうち、「大学全体レベル」での結果を「令和5年度点検・評価」として取りまとめ、「全学自己点検・評価委員会」で検証し学長に報告した。さらに令和6年7月10日開催の「内部質保証推進会議」では「全学自己点検・評価委員会」の点検・評価結果を基に更に全学的見地から評価を行い、その後同日開催の「大学経営会議」に報告し、速やかにウェブサイトにて公表を行った。 ・「令和5年度点検・評価」結果を取りまとめた後、学長からの指示に基づき、各部局等の取り組みについて具体的な改善策等を「令和6年度教学マネジメントチェックリスト及びアセスメントプラン点検・評価報告書」として報告することとした結果、各学科対応分については令和7年1月15日開催の「内部質保証推進会議」にて、全学委員会対応分については令和7年2月19日開催の「内部質保証推進会議」にて、それぞれ報告・承認された。これらの取り組みによりPDCAサイクルを機能させ、本学の内部質保証システムの確立に努めた。				
「評価指標」 ・「教学マネジメントチェックリスト(仮称)」の作成及び活用した自己点検・評価及び検証等の実施状況			**「評価指標」** ・「教学マネジメントチェックリスト(仮称)」の作成及び活用した自己点検・評価及び検証等の実施状況						